
ぬらりひよんの孫～異世界旅行記～

ヤマタのヲろち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫〜異世界旅行記〜

【Nコード】

N2444T

【作者名】

ヤマタのヲろち

【あらすじ】

事故にあつて、ぬらりひよんの孫世界に転生した主人公。憑依先は妖怪の間でも伝説になっている大妖怪だった・・・能力は高いのにそれを生かせない主人公と凶悪な原作キャラ共との物語ここに始動。

第0録 ついてない日（前書き）

ド素人がのりで無謀にも書いてしまいました。
駄目文ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。

第0録 ついてない日

「・・・ZZZ・・・」

「・・・もと・・・」

「・・・ささもと・・・」

「おい笹本・・・笹本享助!!・・・」
耳がキンキンするほど大きい声で呼ばれて跳び起きる。

しまった・・・授業中だった・・・と寝ぼけた頭で考えていると、怒鳴り声が響く。

「笹本、授業中に眠るとは何事だ。

真面目に授業を受ける気があるのか!!・・・」
教師の説教が始まった。

内心舌打ちしながら、表向きでは、はい、すみませんと謝る。

なんでもこの学校で一番厳しいと、うわさされる数学担当、荒垣先生。

そんな先生に目をつけられるなんてたまったものではない。

最善の方法は、とにかく謝って、反省していると思わせて許してもらおうことだ。

さてなんの脈絡もないが、自己紹介。

俺は笹本享助^{あさもと きょうすけ}。うら若き高校生だ。

青春の高校Lifeを満喫している真っ最中なのだが・・・今日は朝からなんだかついてない。

朝食の味噌汁をひっくり返し、

登校中に知らないおばさん集団に道をきかれてそれに付き合っはめになったり、

体育の授業では転んでひざから血はでるし、

昼飯用の箸は無くなるし、・・・

拳句の果てにこの説教・・・。。。。。

説教の原因をつくったのは俺だからしょうがないが、朝からの面倒事に免じて見逃してほしかった・・・。(泣)

『キーン・コーン・カーン・コーン』

「おっと、もう授業は終わりか、笹本!!」

今度居眠りしたら説教だけじゃ済まさんからな!」

そう言って先生は教室を出ていく。

授業の後半を俺の説教で丸つぶしにするなんて・・・

なんってねちっこい説教する先生なんだ・・・侮れん・・・

それはまあ、さておいて、俺は説教にも負けずあの凶悪的スピードで教科書にも載ってない最悪問題を平気で出す地獄のヘル荒垣の授業を乗り切った!

説教で後半潰れて逆によかったかもなあ。

そつえば確か今日はぬらりひよんの孫の最新刊の発売日だったなあ。帰りに買って家でゆっくり読もうかな。

ついてない日は家にいるのが一番ぞ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

放課後

「な・・なん・で・雨が降っているんだ・・・」
さつきまで晴れていた空は、どこへやら。にわか雨が降ってきた。
もちろん傘など持っていない。

「置き傘しといてよかったねー」
「ねー、天気が変わりやすい季節だしね。」
きゃきゃと話す女子どもにイラっとする。
ザアザア降る雨にも負けず、風にも負けず、俺は本屋を目指して
走った。・・・

本屋到ちやくく。

「(さて、多少濡れたが、大したことはないな。)」
服に付いた水滴を払いながらルンルン気分でマンガのある棚へ向
かう。

「……………」

「なん…で…だ」

賢い読者の皆さんはどういうことかもうお分かりだろう。

「何で売り切れてるんだあああああああああ。」

……………

……………

……………

「雨の中、傘もささずに歩く男、享助。」

「（なんでだ、どうして売り切れているんだ、

おかしい、おかしい、おかしい……）」

そもそも今日発売のマンガがすでに売り切れていくくら何でもねえだろう……

そんなことを考えながら歩いていると、

突然のクラクション、

その直後に体にとてつもなく大きな衝撃。

轢かれた事を理解するのは少し時間がかかった。

「（痛い、イタイ、いたい、遺体、どうして俺がこんな目に会わなきゃ行けないんだ。ううう、

確かにこの前コンビニで釣銭こまかしたけどさあ、

この仕打ちはないでしょおがぁ、。。。。。

ああああ、まぢでまずい、はやく誰でもいいから救急車、救急車呼んでえ。。。。）」

薄れていく意識の中、こんな事を考えながら、

俺はこの世とさよならしてしまった。。。うう

第0録 ついてない日（後書き）

はい、全くもって駄目文でした。

もうちょっと長かったのですが、なんかデータが消えてしまったので、

まったく原作に触れるどころか、転生もしないという駄目な結果に・

・
最初からこんなで完結なんてできるのだろうか・・・

第1録 おとぎの国ならぬマンガの世界（前書き）

やっと転生します・・・。

頭の考えを文章にするのって、思った以上にムズイっすねえ。

第1録 おとぎの国ならぬマンガの世界

視点：享助

「（暗い………ここ……どこだ？）
暗所恐怖症と閉所恐怖症をあわせ持つ俺が、こんなとこにいてい
いはずがない。

今にも発狂しそうな勢いだ、とりあえず状況確認……。

どこかに閉じ込められているようで、狭い。それに何かに抑えつ
けられている感じだ。

身動き一つ取れない狭い場所、しかもとてつもなく暗いこれ以外
に今わかることは……

無い。

そういえば俺は事故死したはずだ。（あの状況から生還できるほ
ど俺は強運の持ち主ではないしなあ。）

というか、よくテレビで九死に一生を得た30歳男性、幸運の持
ち主なんて言い方をされるが、

事故に会ってる時点で幸運じゃないんじゃない……。

まあ、色々気になる所だが、ここはあえてスル　しよう。話が進
まないじゃん。

とりあえず、縮こまった体を思いつきり伸ばす。

するとミシミシ、バキバキ、ミシリ、と大きな音を立ててからだ

から重みが消える。

それと同時に、俺の視界も光をとらえる。

「まぶしっつっ」

ずつづつと暗い部屋にいたのを、いきなり明るい部屋に出た時を何倍にもしたレベルの光が俺の目をつんざく。

まぶしいを通り越してもはや殺人的に痛い。

「ここは、森か？・・・」

目が慣れてきてからあたりを見回すと森だ。それも、どこの自殺スポットのような、

何年も人が出入りしてませんよゝ的な雰囲気をかもしだしている。

。。。。
そこまであたりを観察してからふと気付く。自分の体についてだ。

腕があるべきところがない・・・それに体にはうるこのようなものがそれはもうびっしりとくっついていて、いや生えているといったほうがいいか。・・・

『ぎゃああああああああああああああ』

視点：下つ端妖怪

『今日も平和だなあ。』

妖怪が、そんなのんきな事いつてていいのか？なんていつちやいない。

確かにおいらもたまにいたずらぐらいの悪さはするが、大それたことなど出来るほどの大妖怪ではない。

やっぱり妖だつてのんびり平和に暮らしたいもんだ。

そんなことを考えながら、最近、お気に入りのお昼寝スポットとなっている森へ向かう。

適度にたまつた妖気がおいらの全身の血行を良くしてくれて、目覚めがすつきりするんだよなあ。

なんでも大昔前に大蛇神ヤマタノオロチを封印して立てられた蛇塚が森だそうなんだが嘘か真か、どうなんだろうねえ。

そんな神代の時代の話なんて俺らにとっても伝説みたいなもんだしなあ、

そんなことを考えているいつものお気に入りスポットについた。

そこでまさかあのお方に出会うことになるうとは、思いもしなかったが……

視点：享助

『ぎゃあああああああああああ』

なんなのこのちつこい化け物は、まあこいつが小さいんじゃないかと俺がでかいんだが。

蛇に生まれたのは、生前の俺のおこないが悪かったせいかと思わなくもないが、こんなでかい蛇は世界中探してもいなくねえか？

アフリカの奥地かなあなんて思ったりもしたが、こんなでかい蛇はいないだろうしこのちつこい化け物は明らかに日本昔話に出てくる感じのやつだ。ここは日本だろう。

それはさておいて俺が悲鳴を上げようとしたら、このちびがでかい声出すもんだから、しらけちゃったよ。

それにしてもほんとに化け物いたんだな、多分俺もそのたぐいなのだろう。

とりあえず、声をかけてみる。

「なあ………」

『ひいひいひいひいひい、すみませんでしたあああ。ここが貴方様のねぐらと知っていながら、

ここで毎日昼寝していたなんて口が裂けても言えないですつうつつ。』

ただの通りすがりの小妖怪なんですつ、見逃してください。』

色々自分からしゃべってるが、スル してあげよう。

こんだけビビられているところを見ると、意外と俺って強いのか？

「なあ、俺の事知ってるのか？」

『はいいいいいいい、もちろんです。あなたがあの伝説的大妖怪ヤマタノオロチ様でございます。知らないはずがございませんです。』

ヤマタノオロチねえ、神話じゃ、引き裂かれて死んだんじゃないか
ったっけ？

『名のある妖怪の中では、京の羽衣狐や、江戸のぬらりひょんより有名な妖怪とも言われてますです。』

さりげなくおべんちゃらを俺に使ってわっしょいしてくる事よりも俺は羽衣狐というワードの方が気になった。

確か羽衣狐ってぬら孫のオリジナルキャラだったよな？確認してみる。

「羽衣狐って400年前に、ぬらりひょんに倒された奴だっけ？」

『さすがは、オロチ様、復活して間もないというのに、そんなことまで知っていらっしやるとは、

現在ではぬらりひょんが魑魅魍魎の主で、中学生になる孫もいるそうですよ。』

もうすでにリクオは中学生か、すると原作には入ってるのか・・・。
マンガの世界だったとは少々驚きだが、ちょっとラッキーだな。
買わなくてもぬらりひょんの孫の話を知ることができるのだから。

。。。
ただ、流血はちょっと勘弁してほしいな。

「じゃ、この森出ようかなあ・・・」

3D映画を見に行く気分で、森を出ようとする。だが・・・

『そのまま、行かれるのですか?』

ちびに言われて気付く・・・。俺蛇じゃん、街に出れねえええええええええ。

転げまわる俺を呆れたように見ながら、ちっこいのは、おれにこう言いはなった。

『あなた様ほどの妖でしたら、人型になれるでしょう、なにをそんなに・・・』

数分後・・・

四苦八苦してようやく、ひよろい人型になることに成功した。

ひよろいのは蛇だから見逃してね・・・。でもどうしても見逃せない点がある。

「・・・服は?・・・」

シーンと空気が叫ぶが、ふと、ちっこいのが思い出したように叫ぶ、

『たしか、山を下ると神社がありますから、

そこになにかしらあるんじゃないでしょうか？』

神社まで裸でいると？

神社到ちゃくく・・・あれデジヤブ？

神社につくと俺とちっこいのは、扉をこじ開け中を物色する。

だって俺一文無しだもん。これくらい見逃してよ・・・。

しばらく物色するが服が無い。一番必要なのがねえってだめじゃ
ん。

ちっこいのと、俺が物色を続けていると、表から声が聞こえてき
た。

「ねえやばいつてかえろっよう」

「はははっ、怖がりだなあ〜大丈夫だつて、」

若い男女がなに神社でいちゃついてんだか、

見たところ、学生か？学生服着てるっぽいし……、

あつ、いいこと思いついた。

俺は人型から、元の大蛇に戻ると、風よりも早くその男めがけてかけぬけた。

暗闇の中、若い男はよこしまな考えで思考を支配されていた。

。「へへへ、肝試しと言う名目で、彼女と夜中に二人きり……

今日こそものにしてやるっっ！」

彼のやらしい思考が頂点に達しようとしていた……。

「ねえやばいつてかえろっよう」

「はははっ、怖がりだな〜大丈夫だって、」
怖がる彼女を、落ち着かせ、彼は妄想を実行にうつそうとする
っ！・・・

「なあ・・・」

その時、とてつもない突風が吹きぬける！！！！！！！！

風に邪魔され、なんだよっ、と内心イライラしながら、もう
一度実行しようとするが・・・

「きゃあああ」

彼女は悲鳴をあげて逃げてゆく。なぜだ、どうしてなんだと、
その場へあたり込む。

そこでふと少年、いや、青年は気付く・・・。。。

自分が一糸まとわぬ裸であると・・・。。。

「あ
うわああああああああああああああああああああああ

夜中に、この世の終わりとも思える悲鳴が響いた・・・。

第1録 おとぎの国ならぬマンガの世界（後書き）

文章の進め方は、のりですので、あんまり突っ込まないでください。。。

作者は、ヤマタノオロチが大好きです。あの無駄に多いところが。

第2録 畏れとは、あこがれ（前書き）

飼い犬が作者のバックにしょんべんかけました。
最悪です。・・・

第2録 畏れとは、あこがれ

ここはとある昔ながらの、ラーメン屋。

夫婦で切り盛りしているのだが、なかなか人気の店だ。満席の日も多い。

ちょうど、お昼時も終わり、現在店にいるのは、客2人と店の夫婦だけだ。

客にラーメンを出し、ラーメン屋の女房は、一息ついて、店にあるテレビに目を移す。

『・・・昨夜未明・・・観光名所として知られていた、蛇塚神社で数十点の盗難が起きました。』

また、近辺に全裸の男性が見つかり、県警は、この男性が事件の何らかの関わりをもつものと断定し、現在、任意の事情聴取を取り行っています・・・』

近年では、ずいぶんと物騒な事件が起きるようになったものだとため息をつく。

「すみません、お勘定、お願いします。」
なにやら物思いにふけっているうちに、お客がラーメンを食べ終
わったようだ。

身長の高い、高校生くらいだろうか？学生服を着て何やら、大き
なバックをたくさん持っている。

もうひとり、弟か何かだろうか、帽子を深くかぶった少年がぴっ
たりとくっついている。

「はい、680円になります。・・・旅行か何か？いいわねえ、お
兄ちゃんと二人で？」

お客が勘定をすませる時、ちいさな男の子に話しかけてみる。

しかし恥ずかしいのか、うつむいてしまった。

「すみません、こいつ恥ずかしがりやで、これから、旅行に行く
ところですので、行く前に昼食済ませようと思ひまして・・・」

そういうと、兄らしき客は男の子をつれて、店を後にした、

「いいわねえ、旅行ですって・・・私も行きたいもんだわ。」

わざと奥にいる旦那に向かっていってみる・・・。

『また・・・情報によりますと、・・・その男性は容疑を否認しているようにして・・・』

視点：享助

『いやあ、うまかったスねえ、
そう言いながら、ちっこいのはニコニコしながら歩く。
こいつ、俺より人型になるのがうまいようだ。下っ端妖怪のくせ
しやがって・・・うう』

まあ生活に必要なものは手に入ったからいいか、金も有り余るほど手に入ったわけだし、

さて、どうしよう、東京まで行く前に、原作前の羽衣狐にでも会おうかな？

それとも、花開院家に殴りこみか？ニヤニヤしながら色々今後
の計画を練っていると、・・・

『今度はどこに行くんスか？』

『あ、見てください、あれが噂のミツケドナルドですよ。』

『あんなところにおなかをすかせた子犬が、』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・おい、お前と一緒に、行動するなんて俺はいつてないぞ
」。

『何言ってますか、さっき旅行行くと行ってたじゃアないで
すか、』

・・・初対面の時よりだいぶ、なれなれしくなっている・・・！

それに旅行に行くとは言ったが、間違ってもこいつと行くなんて
いってないぞ、

だが、そんな心の叫びもむなしく、ちっこいのは、どんどん俺を

引っ張って、駅まで連れて行く。

まあ、案内役がいるのは楽なんだけどねえ・・・。

なんだかんだで駅に着いた、

切符を買おうと、切符売り場まで行く。

「人が多いなあ、・・・どれくらいかかるんだろう・・・」

ここは、中国地方の島根県あたりらしい、中国地方とはいっても現代日本では端っこのほうに位置する田舎だ・・・。

その割に人が多い。

やっと切符を買い終えて、改札口へ向かおうとするがちっこいのがいないことに気付く。

さっき散々付きまっていたのに、どこに行きやがった？・・・

とりあえずあたりを探す・・・・・・・・・・。いない。

切符売り場に戻ってみる・・・・・・・・・・。いない。

改札口に行ってみる・・・・・・・・・・。いない。

いないのかあ〜いないんだなあ〜、いちやうからなあ〜

と心の中で言っつて改札を通り抜ける。

まあ、いないなら、いないでいいんだし。

どツか行つてたとしても待つてやる義理もねえだろ。

それにしても、この荷物持たせようと思つていたのに・・・・、

てめえ用の服もあんだぞ、コラあつ

先日買った日用品が入つたバッグ達を持って、電車を待つ。

重い・・・・・・・・・・。

『列車が到着いたしまゝす。黄色い線より内側までお下がりください。』

しばらくすると、列車が到着して俺は乗り込む。

せっかく、グリーン車、2席用意してやったのに、とんずらする
とはいい度胸だ。

イライラしながら、席を確認する。

えーっと、2のC、2のCと・・・。

いくつの駅を通り過ぎたのだろうか。
昼食にラーメンを食べたはずなのだが、ひと眠りしたら無性に何かを食べたくなった。

さっき、電車に乗る前に衝動買いした、駅弁があっただな、地域限定って言うのに惹かれるんだヨねえ、まったく腹は減っ

てなかったのだが、
買ってしまったのは、この四文字が目飛び込んできたからだろ
う。

うきうきと駅弁を入れたバックを開ける。

おい、俺の感情表現はウキウキしかねえのか？

前も使っただろう？もっと別の表現を活用してくれよ……

バックを開ける。しかし、そこにあるはずの弁当はなく、
代わりに、その弁当をたいたげた化け物がいた。

そう、泣く子も黙るといふ、あいつが……

「うわあ……！」
びっくりして、大きい声を出してしまった、
ちらほらグリーン車に乗っていた客の視線が一齐に俺に向かう。
何でもないです、すみません。という雰囲気を出して、手元の

バックに目を戻す。

確かに大きいバックではあるがどうやって入ったのかというぐらいぎゅうぎゅうになりながらのんきに寝ている。．．．．．それに、俺が買っておいた弁当も、ちゃっかり食ってしまったという状態．．．．。

寝ている【奴】をそのままに、何事も無かったかのように、バックのチャックを閉め元に戻す。．．．．

俺は畏れた。．．．

ぬらりひよんでもなく、羽衣狐でもなく、その他諸々の大妖怪を差し置いて、

一番最初に俺を畏れさせたのは、

こいつだった。．．．．．。

第2録 畏れとは、あこがれ（後書き）

主役のキャラが作者自身いまいち分かりません。

長い目で見てくれると嬉しいです。

このちっこいの、最初に出すだけで後は登場させる予定はなかったんですけどねえ。

なぜか、ついてきます。

第3録 うさぎとかめ（前書き）

月曜ですが、作者の通っている学校は休みでした。
あ、ちなみに、作者は高校生です。

シリアスな小説を読みました。

シリアスって心がもやもやしますよね。

第3録 うさぎとかめ

視点：下つ端妖怪

目を覚ますと、もうずいぶんあたりは暗くなっておりました。そのまま、ホテルに泊まるのかと思いきや、

「ホテルは予約してない、野宿だ。」
と、彼の一言……。

そのまま、公園まで引きずられていき、現在に至るわけです。

「貴様、・・・荷物をすべて持たせた拳句に・・・俺の駅弁を食べたな？」

その代償として、貴様には、何をしてもらおうか、なあ？」

完全に怒っていらっしやる……。

『そ、それにしても、野宿なんて、お、お金はあるのにどうしてですか・・・?』

「なに、少し、調子に乗っている貴様の頭を冷やしてやるつもりだっつてな・・・。」

あああああ、こ、これは、完全にきてしまっている・・・。

数時間後、

「・・・だからな、かめとメカの話にもあるように、コツコツ、人生を生きなければならん・・・」

ん?聞いているのか?・・・。」

『は、はいいいいい』

長い話をしていっているうちに、最初の話題は、どこえやら。人生のお説教のようになっていいる。あ、妖だから、妖生か?それにしてもカメとメカって、聞いたことないよ!!

『あのう、亀とメカではなくって、確か・・・』

「ん?ああ、かめとメカカメだったか?」

かめとメカカメ……。

ゴ○ラと、メカゴ○ラみたいになってるじゃないですかあああ！

「おお、思い出した、ガ○ラとメカだったな、」

………、もう原型をとどめてないですよ、

それからなんだかんだありまして……、

「一発、殴らせろ、それで許してやる。……」

という事に落ち着いたのでございます。

「しかし、子供を殴るみたいでやだな、人型、解いてくれないか？」

『別に誰も見てないんだからいいじゃないですか……。』

「もっと、ねっちりと、説教されたいのか？」

うう、あの説教はもう十分だ。それなら一発殴られた方がすかつとす。

するりと、妖に戻る……

が、刹那、とてつもない衝撃が、おいらを襲ったのでございます。

視点：享助

するする、と妖に戻っていくちっこいのをみる。

さて、一発だからな・・・どうやって殴ろうか。

入射角は、・・・こうだろ、そしてがつーんと・・・

頭の中でデモンストレーションしているうちにちっこいのは、妖怪に戻ったみたいだ。

さて、・・・と、かまえて殴ろうとする・・・が・・・

その前にちっこいのは、何かに吹っ飛ばされる。

あれ、やな予感しかしないぞ・・・説明をあえてしていないが、東京行く前に立ち寄ったのは、京都だ。京都といえば・・・

「学べよ、魔魅流、実戦から・・・」

ちっこいのは、煙をあげて伸びている。……おめっ、

もっと頑張れよ、お前、俺より妖怪歴なげえだろうが・・・。

さりげなく何事もなかったように公園を出ようとする。

が、出られるわけもなく・・・。

「おいおい、お前も妖怪だろ？仲間を見捨てていいのかい？」

うるせい、シークレットシューズならぬ、シークレットげた履いてる、

ちび竜二のくせに・・・。

「あいにくと、赤の他人でして・・・。」

いつの間にか起きたのだろうか？ちっこいのがこっちを泣きそうな目で見ている。

あのな・・・妖怪の状態でやられると気持ち悪いから逆効果だぞ？

「殺れ、魔魅流。」

あれ・・・、今とてつもなく物騒な言葉が・・・。

と、あほな事を考えていると、魔魅流の式神が飛んでくる。

アア・・・俺畏れの発動とか、戦い方とかなんも知らないのに・

・・・死ぬな。

簡単に頭の中で、結論を出すと、あきらめたようにその場から動かなくなる。

ちっこいのがなんか言ってるが無視だ、ムシ……。
別にいいよ……。、死んだってさ、避けるのもめんどい……。

しかし、式神が当たりそうになる直前、ぐにやりと俺の体があさつての方向にそれる。

そのおかげ？いやせいで、俺は攻撃に当たらなかった。

でもなんか、気持ち悪いな……。人の骨のつき方無視して、ぐにやっ……。

魔魅流……。もういや、のっばだ、

のっばは、どんどんと、式神を吹っ飛ばしてくるが、ぐにやり、ふにやり、としょぼいマトリックスのようにすべてよけきる。

たとえるなら、同じ極の磁石を合わせた時みたいな感じか？そんな感じで、式神に当たる気がしない。

つい調子に乗ってしまっ。

「どうした、シークレット下駄の竜次い、お前のポンコツロボじゃ、俺は倒せないぞあ」

その間もずつとつと、式神を飛ばしてくるのっぽ。自分の意思で、避けたわけじゃないのに当たらないとなると、のっぽが式神飛ばすのへたくそなんだよな……?。

「く、この下駄は、でかく見せようとか、そういうのじゃねえよ……そもそも、でかいというのは、……」

あれ、おもしろい。竜次やっぱり気にしてたんだ？にしても、身長についてちょっと突っ込まれただけで、この反応。

めんどくせ。

「……………ところで、…なぜ貴様が俺の名前を知っている…」

ひとしきり、自分の身長に対する思想を語った後に、一番先に聞くべき事をきいてくる竜次。

マンガでは、嘘つきでクールなイメージで、結構好きなキャラだったんだけどなあ。

イメージが台無しだ……。どうしてくれる……。

竜次がその核心的な質問をするまでの間に、のっぽの攻撃は、いつの間にかストップ。

更に茂みに隠れていたちっこいのも、俺たちの方によってきていた。

「はん、陰陽師共めが、このお方をどなたと心得る。」

知る人ぞ知るヤマタノオロチ様であらせられるぞおおおお。

黄門様での決め台詞のようなことをはく、ちっこいの……。あんまり、正体をばらさないでもらいたい。

ちつこいの言葉聞いた、竜次達も微妙そうな顔をしている。そりゃそうだよなあ、云千年、だか云万年だか前に封印された妖怪なんか知るわけがないだろう。

花開院家だつて古くて羽衣狐ぐらいの妖怪までしか知らんはずだ。

なんだか微妙な空気になってしまった、．．

なので、それを打開すべく、ちよつと気になる話題を出してみた、
「あんたらに、ユラとかいう、妹、のつぽには義妹か？がいるだろ。」

その小娘つてもう東京に行ったの？」

竜次はなぜ知っているという顔を一瞬見せたがすぐに、にやりと悪そおな顔になる。

のつぽは言わずもがな．．．．．。

「はっ、そこまで知ってるとは、だが教えてやる義理はない．．

・自分で調べるんだな。・・・」

まあ、そういうとは、薄々思ってたけどねえ、むしろここで教えてくれるの方がびっくりなんだけどさあ。

教えてくれると、今後の動きが分かりやすいんだよ。・・・

でもあの反応だと、もう行ってる感じだな・・・。

これは急がないと・・・。。。

とりあえず、ワーワー、陰陽師に悪態をついてるちっこいのを、引きずりながら、逃げるようにして、（実際逃げてるのだが・・・）その場を去る。

攻撃してこなかったってことは見逃してもらえたんだよな？

・・・そうでしょ？・・・そうだよねえ？・・・

視点：竜次

「・・・竜次・・・なぜとどめ・ささなかつた？・・・」
抑揚のない声でそう聞いてくる魔魅流。確かにロボットのようだ。

「魔魅流・・・あいつは、実力の半分も出していなかったぞ。

今回は戦う気が無かったようだからよかつたが、・・・相手の
実力を測れるようになるのも、陰陽師には必要だ・・・。」

あとで当主に報告だな。

それにあの妖怪の名前、後で詳しく調べといた方が良さそう
だ・・・

「……魔魅流……帰るぞ、」

そう言いつと、竜次は、本家へ帰り始める。

「……分かった……」

黒ずくめの二人が公園を後にする・・・。

その時にはすでに、東より日がのぼりかけていた・・・・・・・・

第3録 うなぎとかめ（後書き）

次回は原作にはいれたらいいんですけどねえ・・・

第4録 堪忍袋（前書き）

お久しぶりです。

なんか色々ありまして、更新遅くなってしまいました。
それでは、どうぞお楽しみください。

第4録 堪忍袋

とある、ネットカフェの店に、おかしな生き物が1匹……………。

視点：享助

「ほお、なるほどねえ、はあ…ふーん。」

現在ネットでこの街の情報を手に入れてる最中である。

そう、この浮世絵町にとつとつ来たのだ。

ついたらすぐに、家を探し、住民登録、エトセトラ……………。

めんどくさいことこの上ない、任務をこなし、やっと一息ついて、現在の状況に至る。

至るのだが、なぜネットカフェ店にいるのかというと……………。

とあるアパートの一室……………。

『オロチ様！オロチ様！……………』

「……………なんだ、ちつこいの、うるさいぞ……………」

『これ見てください！！浮世絵町有名ラーメン店の極上醤油ラー

メン・

食べたいです!!!!!!」

どこから拾ってきたのか、ラーメンの広告用紙を持ってさわぐちっこいの……。

「だからなんだ……喰いたきゃ喰いに行けばいいじゃないか！、言つとくが、俺は行かないからな。」

『でも、場所分らないし、おいら、金持ってないんですよ!!--ちっこいの持っている、広告は、場所の所が擦り切れて、よくわからなくなっている挙句、店の名前も紙がちぎれて、わからない。』

「じゃ、あきらめるんだな……」
俺は、そういつと、ごろりと横になる。

「うう……うう……ううわああああああん」
いきなり泣き出すちっこいの……
う、うるさい……限りなくうるさい……

「ばか、近所迷惑になるだろうが!黙れ……」

「うう、だつてえ、だつてえ、うわああああああん」
なんなんだ、たかがラーメンが食べないだけで、こんなに泣く意味がわからん……。
うるさいっ、よしぶん殴ろっ……

ばたん！

俺がちっこいのを殴ろうとしていると、いきなり扉が開く。

「ちよつと、近所迷惑よ！！って何しているの！！！」

いきなり開けるのはどうかと思うが・・・

そこには、このアパートを管理する大家さんが立っている。

大家さんと言っても、しわしわのばあさんではなくて、ずいぶん若い、大家さんだ。

なんでも、親の管理するアパートの手伝いだそうなのだが・・・この状況は非常にまずい、おれが、小さい子供を殴るといっように、大家の目には映っただろう。

まあ実際殴ろうとしたのだが・・・。

大家の声をきいて、別の部屋の住民も続々と集まる・・・。
泣きわめく子供・・・手を振り上げている青年・・・
じつと住民の冷たい視線が俺を襲う・・・。

「ははっ・・・いや、これは・・・。」

「警察に連絡を！！！」

「ち、違っんだあああああああ！！」

その後、必死に訳を話し、それでも胡散臭そうな、顔をする住民と大家。

拳句の果てに、ちっこいのに土下座までして、ちっこいのに誤解を解いてもらった。

その交換条件として、現在、浮世絵町有名ラーメン店極上醤油ラーメンというフレーズのみを頼りに、

片っぱしからラーメン屋を調べているというわけだ・・・。

今頃、ちっこいのは、大家の部屋で菓子でもごちそうになっただろうな。くそっ。

ちっこいのも連れてこうとした時に言われた大家の言葉、今でも

むかむかする・・・。

「だめよ、この子は私が面倒みてるから、あんた一人で行きなさい。」

二人きりにしたらなににするかわかったもんじゃないわ・・・」

そしてそのあとちっこいものに対しての言葉、

「何かされたら、すぐにおねーさんが、周りの人に知らせるのよ、いいわね?」

その時のちっこいの顔、ニコニコしゃがって、ああ胸糞わりい

「っど、っねそっつっばいな、・・・」

とりあえず、どこか分からないので、広告になるべく近いのをピ

ツクアップしていく。

ピックアップしたのからさらに絞らないとな。・・・

ちっこいのにこれを見せたら全部行きたいとか言い出すかもしれん・・・。

連れてこなくて正解だったかな・・・。

うーん、どれだ？

ちゃんと選ばないと、また文句いいそうだからな。

丁寧に選ばねばならん。

かたかた、パチ、パチパチ・・・・・・・・

さてこんなもんか？

広告に限りなく近いものを探して、約8時間、午後から始めているのもう夜だ・・・。

5つまでは絞れたのだがこの先がどうしても絞れない。

60

本格醤油ラーメン屋、きつぽうけん吉報軒

ラーメン界での、王道を極めしラーメン屋、秘伝のスープと、細いちぢれ麺の相性は抜群。

新感覚派ラーメン店、かんらくどう歡樂堂

斬新なアイデアが大人気。まだ食べたことのない、ラーメンが食べられる。具材には高級国産品を使用。

アイデアラーメン店、りゅうてんくわう竜天宮
見た目よし、味よし、で、さらにあつと驚くひと手間が加えられている。

懐かしラーメン店、まんぶく万福
どこかで食べたことのあるような、懐かしい味のするラーメン。
じんわりと心にしみるスープは絶品。

ポリウムラーメン店てんのうざん天王山
大きなチャーシューをはじめ、さまざまな具材が乗って食べ応え満点のラーメンが食べられる。

具材は、その日によって一番良いものを使うため、毎日少し違う。

ふう・・・。

みているだけで、のどが乾いてくる。

ああ、和食がくいてえなあ・・・。

5軒くらいなら、全部行きたいって言われても対応できるし、後はあいつに選ばせよう。

あゝ疲れた、帰ったら、まず睡眠だな・・・。

店の情報を印刷機で出してもらおう。ホントはこういうの公共の場でやりたくないんだよね。

コンビニの印刷機で印刷するとかも絶対したくないことの一つだな。

あゝふらふらする・・・
もう口の中がラーメンの味しかしない、脳味噌がおかしくなっ
てるなあ・・・

なんて思っていると、道の真ん中に大きなゲージが見える。
ちょうどハムスターなんかを飼うゲージだ。

「あはは、とうとう幻覚まで見えるようになったのか？・・・」
もう一度眼をこすってよくみてみる。

・・・やっぱりまだある・・・
それに見たことあるような人がいる・・・
あそつか・・・旧鼠か・・・
まあいいや、俺は今疲れている・・・
無視ムシ・・・。

「おいてめえ、なにしてやがる？」
下っ端のネズミ妖怪が絡んでくる・・・。無視ムシ・・・。

「おらあ、シカトしてんじゃねえ」

そういうと、下っ端のネズミ妖怪はこぶしを振り上げる……
あっ……だめだ……今は駄目……精神が参っている……

思いつきりパンチを腹に食らう……。

「……うぐ……」

その拍子に手に持っていたラーメンのデータが落ちる。
続けて、ネズミ妖怪はパンチやキックを繰り出す。
いたい、いたいって、痛い！、イターイ……

他のネズミ妖怪が笑って、俺を馬鹿にする。

「あっはは、こいつよえー……」

「はははー、もっとやれえ……」

「ちっ、つまんねえ、もう伸びちまったのかあ？」
そういつて俺を散々痛めつけたネズミ妖怪は、辺りに散らばった、
ラーメンのデータの紙を

ぐちゃぐちゃに踏みつけた。

ぶちりっ
.....

何か切れるような音がした
.....

第4録 堪忍袋（後書き）

はい、切れましたね……。

この後どうしよう……。

まったく考えていません。駄目作者ですね、すみません。

第5録 百鬼夜行（前書き）

どうも、ハロー、ハローです。

何か微妙な感じですがいつもの事なので、大目に見てください・・・。

第5録 百鬼夜行

「……ん……うん……」

一人の少女が目を覚ます。

「な……ここは!?!?……」

「こ、このカゴは一体……」

「そ……外……?」

彼女は自分の置かれている状況がいまだにのみこめない……。

その少女に、声をかけるものがいた……。

「よう、陰陽少女、……」

どうだ……? ネオンの光の中……処刑される気分は?」

「な……処刑?……」

「そうだ……あの……三代目のガキが……」

約束を破ったらな……」

だが少女には、あまり意味のない回答だったかもしれない……。

まったく、少女にはこの者たちの目的が伝わらない。

「三代目……? 何のことや……?」

旧鼠……アホなことはやめるんや!! ええかげんにしい!!」

自分がとらわれの身になったら極力、相手を刺激しない方がよい

ちよつど……今くらいのなあ……?」

その言葉を合図に周りの男どもが少女たちに迫ろうとするが……

「うわああああ」

「ぎゃああああああああ」

男の悲鳴が聞こえる。

「なんだ?……」
声の聞こえた方を見やると、一人の男が立っている……

闇夜さえも明るく照らすネオンライトの中にたたずんでいるとい
うのに、

全く顔が分からない。

ただただ、鬼灯ほおずきのように赤い目が光るのみ……。

「なにもンだ？・・・てめえ・・・」

男たちは、一斉にさわぎだす・・・。

だが、男は答えない・・・。ただ一步、進むのみ。

その動きに、さわいでいた男どもは、ぴたりと静まる・・・。
彼の動きはまさしく死を表すと言っている。

男たちは、その畏れにのみこまれたのだ・・・。

その後・・・彼らは物理的にも飲み込まれる。

「貴様！・・・何のつもりだ！！」

星矢と呼ばれていた男は、焦っていた。

彼を星矢と呼んで、慕ってくれていた手下はもう一人もいなかった。

一瞬にして【何か】にのまれたのだ。

しかし、謎の男は、赤い眼を輝かせるだけで、答える気配はまるでない。

「・・・ちっ・・・貴様ああ・・・」

沈黙に耐えきれなくなった星矢は、声を荒げ向かっていく。

しばらくすると、その場には、沈黙が訪れた……。
今はただ、ネオンのライトが無機質に道を照らすのみ……………。

視点：享助

「…………あれ?…………」

なんだか、頭がボーとしている…………。

だって、蹴りとか普通にしてくるんだもんなあ…………。

ああ、いてて…………。

「妖怪！お前たちは何が目的なんや!!!!!!」

いきなり声を掛けられてびっくりしたが、…………
とりあえず、声の方向に目をやる。

「…………うおい!!…………」

あれ?なんでここに、原作キャラがいるんだ?

旧鼠達を見たところいないし…………、もうネズミ退治はすんだのか
と想っていたが。

まあいいや…………。

このかごから出せば、いいんだしね。旧鼠、トイレにでも行つて
んのかなあ?

かごに手をかける。

「いやああああ」

「あれ？・・・若、一人しかいませんよー？」

「あいつが、組みの頭領なのかあ？」

「へっ、一人で百鬼夜行と戦うのか？跳んだ自信家だな・・・」

おいおい、勝手に話進めんなああああ。

「おい、おめえが、頭領かい？」

百鬼夜行の主その名は、奴良リクオ、が聞いてくる。

あはは、なんだあの重力ムシの髪型は・・・。。。。。

「・・・あはは、きゆうそなんて知る訳ないじゃないですかああ
にかりと笑って、ごまかす俺・・・だが・・・、

「ほう、旧鼠を知っているのかい？」

し、しまったああああああ、墓穴を掘ってしまった・・・。
うう・・・、原作知識が仇になるとはああああああ。

「おい、おめーら、他にも隠れてるかも知れねえ、気い付けな。
リクオのその言葉を境に、

自称、ぬら組特攻隊長の二人が、ずいと前に出てくる・・・。

第5録 百鬼夜行（後書き）

もうちょっと、長く書くつもりとというか、完結させちゃつつもり
だったんですけど。

ー迷子つと、な事が起きてしまい、ここまでとらいつとで……。

簡単に言つと、言い訳ですよ……。

第6録 一番街の悲劇 (前書き)

なんか、パンドラの塔だか、何だったか忘れちゃったけど、
(Wiiのゲームだった気がする。)CM見たんですけど、なんか
ストーリーの続きが無性に知りたくなりました・・・。

まあ、ゲームとしては、興味無いですし、作者はWii持ってないから、できませんけどね。映画ならよかったのになあ。・・・・
なんて思ったりします。

ちなみに、そのゲームのヒロインの声って、
羽衣狐の声やった人とか何とか・・・マジですか？って感じ
です。

無駄書きを、たれてしまいました。ではでは、続きをどうぞ、

第6録 一番街の悲劇

視点：享助

ははは・・・これは、夢なんだそうにきまっている・・・
そもそも、旧鼠はどこに行ったんだ？

おかしい、きつと、はやく原作に絡みたいて、思ってたから、
それが、潜在意識になつて夢になつたんだ、そーだ、きつとそ
うにきまっている・・・。

後ろで檻が壊される音がする。・・・
これは夢だ、・・・早く覚める・・・。

「どうする、夜の帝王？・・・人質ねこが逃げちまつたぜ」
夢だもん・・・もうすぐ覚めるはずだ、いつたい、いつ寝たんだ
っけか？

「おらあー！・・・」
青田坊が拳を振り上げて迫っている・・・あはは、あれは夢だ・・・

「・・・がはっ・・・」
腹に痛みが走る。というか、殴られた勢いで、吹っ飛ばされて全

・・・気を紛らわそうとしたのだが、全然効果が無い・・・痛い・
、ちよつ・・・

いたあ・・・イタイ！・・・もっ・・・もう無理！！！！・・・

痛すぎてもう涙目だ・・・。。。

とりあえず、人型から大蛇に戻る。その拍子に、紐は引きちぎれ
ていく・・・。

はあ・・・痛かった・・・、ちよつとは加減してほしいものだ・・・。

「・・・なつ、蛇！？・・・わ、若あ」

蛇になった俺を見て驚く妖怪共。

俺は蛇だから旧鼠とは無関係ですよー、と暗に主張している事に
気付けよ？

「ほう、追い詰められて、牙を出したか」

はあ？きばあ？そんなんだしてねえよ・・・。こいつはまずいな・

逃げよう・・・。。。

「だがたいした牙じゃないようだ」

え？・・・あちつ、も、燃えてる！！もえてるっつっ！！！！

「てめえらが向けた牙の先、本当に闇の帝王んなりてえなら、

歯牙にかけちゃならねえ奴らだよ」

あちいいいいいいいい、マジで無理、なんなのこいつら、糞やぐざがあああああ。

「おめえらは・・・おれの下にいる資格もねえ・・・」

おめえら？ 一人を大勢でほこぼこにして何言ってるの？ 俺の他に誰かいた？

ねえ、誰かいました？

「奥義、明鏡止水、桜・・・・・・」

その波紋鳴りやむまで、全てを・・・燃やし続けるぞ

あぢいいいいいい、とうかもうなんかわからん、頭が、もわあとする。死ぬのかな・・・死ぬな・・・

「夜明けと共に塵となれ」

数時間後、

「うっ……うっん……」

全身が痛い……。まあ、全身やけどだからしゃあないけど……

原因はリクオだ、絶対いつか仕返ししてやる……。

明日は、中学校に入学する手はずで整ってたんだがな……。

全身大やけどの転校生か……。やだなああ……。

痛い体を引きずりながら、なんとか帰宅する……。

視点：ちっこいの

まさか晩飯まで大家さんに食べさせてもらうことになるとは、いくらなんでもオロチ様調べすぎじゃないですか？

「ねえ？ところでさあ……」
大家さんが話しかけてくる……なんだろう……。

「な、なんですか？……」
「そんなかたくならなくていいって、名前なんて言うの？まだ聞いてなかったでしょう？」

しまった、いきなりすぎて、適当な名前が浮かばない……
「ええと……」
そこまで、答えると表で何かが倒れる音がした……。

「あれ？なんか今外で音しましたけど。」
さりげなく話題転換……

「あら、ちょっと見てきましょう、猫がごみ漁ってたら大変だしね。」
そういつて、大家さんは外に出る。おいらもその後が続く。

「ちよつと!・・・何やつてるの!？」

大家さんがびっくりした声をあげる。何だろう？

大家さんの脇から、ひよいと頭を出して確認する・・・。

お、オロチ様？何で倒れているんですか!!!

ボーッと訳が分からず立っていると大家さんの声が聞こえる。

「私の部屋に運ぶの手伝って頂戴!!大やけどしてるわっ、一体なにがあつたのかしら!?!？」

『は、はい』

大やけど？ホントに一体何をしたのだろう・・・

大家さんと二人で、オロチ様を部屋に運ぶ。

そのあと、大家さんは、テキパキと、オロチ様の看病をしていく。。。

いったいオロチ様ほどの人が・・・なんで・・・

もしこのままオロチ様が寝たきりになつたらと思うと、とても不安になる。

「さて、大急処置はこのくらいでいいでしょう、やけどが思ったよりひどく無くてよかったけど、救急車は、呼んだ方がいいわね、」
すると今まで寝ていたと思った、オロチ様がむくりと起き上がる。

「いや、救急車は呼ばなくて結構です・・・。これで十分ですよ、有難うございます。」

「でも、そのままにしてたら・・・」

『そうですね、呼んだ方がいいです!!!!』
なぜ、断るのだろうか。。。呼んでもらったほうが良いのに。

しかし、オロチ様は、もう一度、頭を下げて礼を言つと、さっさと出て行ってしまった。

おいらも、大家さんに夕食をごちそうになったお礼を言つて、オロチ様を追いかける。

視点：享助

うむ、精神的疲労と肉体的疲労で、アパートに着いた途端、ぶっ倒れてしまったが・・・

なんだこの俺の異常な自然治癒力は、・・・
大家の手当てのおかげもあるが、異常だ。。。見た目はひどいが、そんなに痛くない。

部屋に着くなり俺は服を脱ぐ。

やけどの時に服つてぬいじゃいけないんだけどね・・・痛くないからいいや・・・。

四苦八苦して、服を脱ぎ終わるとやけどのひどい個所に薬を塗つて、包帯を巻いていく。ミイラ男かってくらい巻くレベルだな。

『あの、病院に行ってやってもらえばよかったのでは？』
いつの間にか、戻ってきたちっこいのが口を開く。

「おまえ、俺のような妖怪が人間の病院に行ったら大問題になる
だろうが・・・。」

ちよつとは考える！」

俺に言われてはじめて気付いたかのような顔をするちっこいの・・・
はあ・・・

しばらくして、包帯を巻き終える。顔はさすがに全部は覆ってないが、顔の一部を除けば、ほぼ包帯妖怪である・・・。

ちなみに髪の毛は、ちゃあんとある。燃えなかったのかなあ？

それにしても、明日登校なのに、包帯野郎で行く羽目になるとは・・・。

もう、だいぶ夜も明けてきたしな。

それにしても・・・中学生にしてはちよつと身長高すぎるか？
少し縮めようかなあ・・・

ひよろいので、そんなにデカイという感じはしないが、いかんせん高い・・・。

175ぐらいに縮めようかな、・・・今は185ぐらいだからそんなに低くしたら駄目か？大家におかしいと思われるし・・・

あああ、どろじよう。

というようなことを続けて小一時間・・・

178ぐらいで落ち着いた、これでも中学生では高いが、まあ倉田こと青田坊もいるしね。

明日の準備を終えて、つかの間の休息を得た・・・・・・・・。。

朝・・・

ああ、ねみい・・・・・・・・。

ふわあ、と大きなあくびをして、起きる。
まだ十分時間はあるが、よく知らない土地だし、早めに行つて損はない。

朝食をとって、早目に家を出る・・・。

。 なの問題もなく、学校に到着する。まだ生徒の数もまばらだ。
。「(浮世絵中学校ねえ・・・、意外とぼろいな・・・)。「

第6録 一番街の悲劇 (後書き)

顔の半分が包帯で隠れているので、特に変装とかはさせないでおきました。

もし、リクオ達に突っ込まれても享助なら知らぬ存ぜぬで通せるでしょう。

視点が下っ端妖怪から、ちっこいのにになりました、名前決めてません……。

良いアイデアがあったら、教えてください……。

第7録 転校生（前書き）

今回はちょっと短いです。

それに、あんまり主人公しゃべりませんし・・・。

第7録 転校生

視点：享助

「今日は、転校生を紹介する……。」

入りなさいと言われたので、廊下に立っていた俺は教室に入る。

少しどよめく教室の生徒……。

まあ、包帯男だからな……。やだなあ……。

「えーと、蛇塚享助へびつかきょうすけと言います……。

よろしく願います……。」

なんか、なれないなあ……。蛇塚……。

いつそのこと、鈴木とか、佐藤とかにすればよかったかなあ？

まあ、笹本以外なら何でもいいんだけどねえ、笹本って呼ばれるとある数学教師を思い出しちまうからな。

とりあえずあたりさわりのない事を言って自己紹介を終わらせる。

「蛇塚くん、君にはあそこのあいてる席に座ってもらおう、」

「はい……。」

ちなみに、俺のクラスは、リクオはおろか、原作キャラが一人もいない。

そっちの方が疲れなくていいんだが、どうやってリクオに仕返ししようか？

原作に絡めないと、リクオに仕返しができん……。

ボーとしながら1日を過ごす、やっぱりつまらんな中学校……。

転校生なのだが、包帯野郎なのであんまり話しかけられない。それは超助かる。

いちいち、どこからきただの、やれ前の学校はどうだっただの聞かれなくて済むし・・・。

『キーン・コーン・カーン・コーン・・・』

「では今日の授業はここまで・・・みんな気をつけて帰るように。」

ふう、やっと終わったよ・・・帰って寝たいなあ・・・。

「ちょっと、君い、うわさの転校生君じゃないか・・・。」
話しかけられたので振り向く。

清継・・・。なぜここにいるんだ？お前のクラスはここじゃないだろ！？・・・。

「・・・なんですか？・・・。」

「いやあ、君もしかして、その包帯、昨日の一番街で起こった事

故となんか関係あるんじゃないかい!？」

「……はあ、まあ………ってっわあ……」
答えるか答えないかぐらいで、
清継に腕を引っ張られどこかの教室まで引きずられていく……。
社会科資料室? ……ってことは……。

「いやあ、みんな、今日は新しい仲間を紹介しよう……っわさ
の転校生、蛇塚享助くんだあああ!」

新しい仲間だと? ……清十字なんとか団のか?
一回も入るとは言ってないが……まあ、こいつはうれしい誤
算だ。

原作に絡める可能性が飛躍的に上がった訳だしな……。

とりあえず、自己紹介をする。そうすると他の団員もぎこちなく
自己紹介してくる。

まあ、包帯野郎だしね……。引かれてもしょうがないか……

とりまきコンビに、家長に、幼児用チャレ○ジのキャラクターに、
陰陽師に、雪女ね……。

リクオは居ないのか? ……あそっか、風邪引いてんだ……。

おい清継、なんて良いキャラしてるんだ。マンガ初めて読んだときから一番好きなキャラだよ。

でも、生でみるとほんのチョビツと引くな・・・

さて、なんだかんだありまして・・・。。。。。。

現在リクオ宅にいるわけです・・・。

なんでって、・・・風邪引いてるリクオのお見舞いと、新団員の紹介だったさ。

ちなみに、陰陽少女はいない・・・。制服買いに行くんだとか・・・

俺も適当に理由つけて帰ればよかったかなあ・・・

「やっほ！」

「カ・・カナちゃん!？」

ああ、障子越しにリクオの声だ・・・殺したくなってくるね・・・。

「家長君ばかりじゃないぞ！」

「わ!!清継くん!？」

ぞろぞろと部屋に入る団員共・・・。

なんか、一部屋が無駄に広いな・・・学校の教室より・・・はさすがに無いか？

微妙だな・・・。

「紹介しよう、奴良くん、新しい団員の蛇塚君だ!!!」
うおう、いきなりか・・・。

「どうも………」
「とりあえず軽く頭を下げる……」

「よろしくね、それよりなんで包帯してるの?」

「てめえのせいだつ、てめえの……」

「蛇塚君は、一番街の被害者なんだよ、うらやましいいい
おいおい……清継いつまでうらやましがってんだ……
それと……思考にまでかぶってくんない!!」

「え!!………」

清継の言葉にびっくりしたのか……がばりと起きるリクオ……。
ああ氷が……

「ちょっと、寝てなきゃだめだよ、ちょっと待ってて、お薬もらって
くるね」

「さっすが、幼なじみく良いお嫁さんになれるよ」

「おいおい、家長、トリマキコンビの突っ込みけつこう恥ずかしい
ぞ……」

「顔色一つ変えないとは……まんざらでも無いのか?
でも今はそっちに行かない方が……」

「お待たせ、リクオさ……」
ガチャン、雪女が手にもっていた薬が落ちる……。
……薬を持ってきた雪女と取りに行こうとした家長が鉢合わせ
……。
そういえば、いつの間に雪女いなくなってたんだっけ？…覚え
てないや……。

にしても……修羅場だ……
必死にリクオと雪女がごまかしてるが……あんまりうまくない
ごまかし方だな……。
家長の顔怖いし……。

「さあて!!、看病はさておき!!ゴールデンウィークの予定を
発表する!!」

ナイスだ・・・清継・・・よくこの状況でその言葉が出たな!・・・

でも、行く場所って確か・・・

「場所は僕の別荘もある楳目山!!」

今も妖怪伝説が数多く残るかの地で・・・妖怪修行だ!!」

妖怪修行って・・・確かとてつもない階段を上り続けるっていう
・・・地獄の・・・

やっぱ、原作に関わるのもほどほどにしようかな・・・。

第7録 転校生（後書き）

蛇塚から出てきたから、蛇塚享助になりました……。
というのは嘘で、もともと主人公は、蛇塚にしようと思っていたんです。

でも、転生前と後の名字が一緒って……。やだなあと思ったので、笹本って適当につけたんです。すみません。

小休止録 大家の正体（前書き）

どうもです。

とりあえず今回は、小話を挟みます。

決して、本編の今後を考えていないわけではないですよ……

小休止録 大家の正体

視点：享助

一番街で、大やけどを負ってから、数日とたたずに完全回復した俺は、

数時間かけて調べたラーメンのデータをもう一度、調べに行く羽目になった・・・。

まあ、店の名前覚えてたから、今回は時間掛からなかったんですけどね・・・。

ぐしゃり、かさかさ、ぽいつ、・・・

『全然駄目じゃないですか、こんな屑のラーメン屋しか調べられなかったんスか？

とんだ期待外れでしたね・・・まさかラーメン屋の一軒も満足に調べられないとは・・・。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『だいたい、なんすか、調べに行って帰ってきたと思ったら・・・情報は持ってこないし・・・、学校とか言っちゃって、全然その後も調べてこないし、

あんた、妖怪として恥ずかしくないんですかあ？』

ぶち・・・

『それにだいたい・・・・・・・・ぐはあつ・・・・・・・・』

何の前触れもなく、俺はこのカス屑チビ役立たずごくつぶし腐れ嘘つき妖怪を殴った。

俺は多分悪くない。見た目は子供でも子供じゃない奴を殴ったのだから。

『うわああああん』

ばたんと音を立てて、出ていくちっこいの・・・・・・・・。はっ、ざまあみろ、鍵閉めてやる。

そう思いながら、おもむろにドアに近づき鍵を閉めようとする。が・・・・・・・・が

ばたん、と音を立てて大家がドアを開ける・・・。

と刹那、棒状のものが俺に振り下ろされる・・・・・・・・。

あれ・・・・・・・・、やばくないか？・・・・・・・・

俺の記憶が正しければ、あれはいわゆるバットと呼ばれるもので

は？・・・

「ぎゃあ・・・」

すんでの所で避ける・・・

「な・・・なにすんですかあ・・・」

「あんたこそ何してんの！！・・・場合によっては警察呼ぶわよ！」

あれ？今ここで警察を呼ぶべき人間ってだれ？・・・

i t ' s m e . (それは俺)

急いで電話をかけようと、受話器を手に取りうつとする・・・。
・・・ばきいいいい、そこにはすでに変わり果てた姿の電話。
ちばい、ちばい、ちばい、ちばい、ちばい・・・。
携帯出す暇が無いね・・・。出す間に殺されてしまう・・・。

まず、話し合いだよね……

「あの〜何をそんなに怒ってるんですか？……」

ばきばきいい、返事が無い……帰ってくるのは、鉄バットが物を破壊する音のみ。

逃げよう……。。。

「きやあつ……」
バットを振り回し続ける大家をはっ倒して、出口へ向かう……。

がしい……

あれ？おかしいな……体が前に進まないヨ……
肩に手がかかっている気がするヨ……
なんだかもう駄目な気がするヨ……

「さあ、中に入って、お話、しましょう……」

ずるっずるっずるっずる……ばたん。

数時間後、

「分かった？もうこんなことしちゃダメよ・・・」

「ひい・・・はい・・・わがりましたあ・・・うう・・・」

あり得ない拷問に近い説教を食らう・・・。

つてゆうか、裁判で訴えたら勝てる気がするよ・・・。

折角治った体もあざだらけだ・・・。

数日後

げらげらといやらしい笑い声をあげながらテレビを見るくつつぶ
し・・・

もとい、かわいい、かわいい、小さいぼつや・・・ふふあははは

・

まずいな・・・このままだとおかしくなってしまうそうだ・・・。
精神的にも、肉体的にも限界が来ている俺は、一時的になんか起
こしそうだ・・・。

旧鼠の時のちよつと手前の時の感覚だなあ・・・。
そういえば、旧鼠どうなったんだろうか・・・

それにしても、あの大家は色々おかしい・・・。

まず頭・・・は、置いといて・・・

年齢が謎だ・・・見た目は20そこそこにしが見えんのだが・・・
大家をやっているところを見ると、もっと年増なのか？最近は、
化粧とかでごまかせるしなあ、

あと、親の手伝いって言ってたけど・・・

娘に管理任せてる親ってなんなんすか？それに学校はどうしてる
んすかあ？やっぱ見た目で年齢ごまかしてるんすかねえ？・・・

『ああ〜おろちさまあ〜のみもン買ってきてくださ〜い』
こいつは・・・

ここに來てからこいつの俺に対する態度・・・まずいな・・・切
れそう・・・

「・・・なにがいいんだ？・・・」

『テキストに見つくるってきてくださいよ・・・』

おいおい、空気読めよ的な顔されても困るんだよね・・・

テキストに買ってきたら買ってきたで、文句言つ気だろ？

「……………」

とりあえず、財布を持って外に行こうとする。

ん？あれはっ！…にツくき大家……

どこかに出かけるらしいな……くくく、後をつけて何かをつかんでやる……。

もつ二度と俺に口出しさせねえ……

尾行してから数分後……

美容院に入つて行った大家……なんだ、美容院か、もつと訳ありのそこに行つてくんないかな？……

これじゃあ、大家を尾行した意味が無いな。

帰ろうかなあ……

するとあわてて出てくる大家……あれ？金でも忘れたかな？

いきなり出てきてびっくりしたが、サングラスをかけて服装もいつもと違うからばれないだろう……。

これぞ、転ばぬ先の杖、転んだ後のバンドエイドさ、

にしても大家はどこに行くつもりだ？

しばらく歩くと、大家は喫茶店に入っていく。

何がしたいんだ？

「……大家はコーヒーを頼むとあたりをきよろきよろしている。
おっと、何かありそうだな……」

「お客様？なにに致しますか？」

「あ、チョコパフェください。……」

ん、大家がいきなり席を立つ！なんだ！？尾行がばれたか？……
大家は俺の席の脇を通り過ぎ、トイレに向かう、……はあ……び
っくりした……

……
……
……
……

「ん、おいしい・・・」
チヨコパフェうまい。ちっこいのと大家によってボロボロになっ
た俺を癒してくれる。
涙が出そうだ・・・。

にしても、大家は何してんだろうね。
もしかして俺、巻かれたのかな・・・。
まあ、いいや、今はチヨコパフェの方が大事なのさ。

んん？・・・あれ、大家以外にトイレに行ってた女居たんだ。
大家が入る前から入ってたんだから軽く30分はトイレにいたの
か？
にしてもどっかで見た顔だな・・・。

しばらくすると、出てきた女は、大家の座っていた席に座り、お
勘定をすませて出て行った。
あれ、今軽く大事な事スル したよね？・・・
あれ、大家だったのかな？・・・

パフェを急いで食べて、勘定をすませてすぐにあとを追う。
やばい、証拠写真！！撮らないと……

大家と思われる後姿を見つけて、走って追いかける。

足音に気付いたのが大家と思われる婆が振り返ってしまったが、
まあ、気付かんでしょう。

しかし、しかしだ……大家と思われる婆は、一歩二歩、近づいてくると、

ばっ、とサングラスを奪いとった……。

「こんなところで……なにしてるの？……」

「あはは、人違いじゃ……」

まずい。大家の目の焦点が合っていない。これは……
大家のパンドラの箱を開けてしまったのか？……

いつの間に握られたのか、彼女の手には包丁が一つ……。
いつの間に出したんだよ！！？

手に持った者をみてダツシユで大家から距離をとる。

どうしよう、とりあえず、ちっこいの連れて、リクオのうちに行くか？・・・

あそこなら安全だろう。もう妖怪ってばれてもかまわん。

それどころじゃない・・・・・・・・

ばたん、

『ちよつとお、遅かったじゃないですか！！！！』

「・・・はあ・・・はあ・・・大事なもん持って、ここ出るぞ、早くしろ！！」

大家と思われる婆は追いかけてくる気配はなかったが、帰ってくる前にここを立ち去りたい。

ちっこいのがしぶしぶ腰を上げた時、・・・

ばたん!!!!!!

『あ、大家さん。どうしたんですか?』

おかしいだろ、追いかけてこなかったのに、全力で走ってきた俺に婆のこいつが追いつけるはずがない。タクシーでも使ったのか? それにしても速すぎる。

「ばか、そっちに行くな!!!」

大家は近づいてきたちっこいのに向かって光るものを振り上げた。何度も何度も……………

ちっこいのは、声を上げる間もなく……………息絶えた……………。

ミスった……………まずい……………

こいつ妖怪なのか?マジでやばい……………

「さあ、享助君、お話ししましょう……………うふふふふ。」

ひい、妖怪なんかよりよっぽど怖い。ってゆうかなんだよお、マジで怖い。

恐怖で妖怪になれないってまずいね。

「さあ……………おろち……………」

がばり、と起き上がる。あれ？朝？さっきまで夜だと思ったんだけどなあ？

ってゆうか大家は！！？

『……どんな夢見たんですか？』

ちっこいのが呆れた目でこっちを見てくる。
え、夢？、辺りを見回すいつもの部屋だ。

体は汗だけで、目からは涙が出ている。

なんだ、夢か……。あははは、夢だよ、何で気づかなかったのかなあ。

『……でも、夢でよかったですねえ。さ、朝飯作つていたんで、食べましょう。』

そういえば、今日は擦れ目山とかに行くとか言ってますんでしたっけ？』

なんだと！！まさか、まだ時間は大丈夫だが……。

「……す、すまん、もう行かなければならん。朝飯作ってもらったのに悪い。」

えーそんなあ、という顔をするちっこいの。はあ、なんか落ち着く。

まだ夢の中から抜け出せないなあ。夢の中のちっこいの怖かったもんなあ。

荷物を持って外に出る。

「あら、どっか出かけるの?・・・」
「ひい!!--びっくりして道につまずく。」

「ちょっと何してんの?・・・」

そう言つて、手を貸してくれる大家。なんだかんだでいい人だよ
ね。

夢とは大違いだ。

「そついえば、部活でどっか行つて言つてたわねえ。」
「はあ・・・あのう・・・」

ちよつと聞いてみたいことが・・・ありますぎるよ。

「なに?・・・」

少し微笑んで聞いてくる大家。

「まあ、今聞くことじゃない・・・かあ・・・
時間もないしね・・・。」

「あ、何でもないです。」

「そ、じゃあ、いってらっしゃい!!--」

いつてきまあす、と返して、まだ太陽の昇り切っていない町を俺は歩いていく。

目指すは、 擦れ目山!!!

あ、バナナはおやつに入るんだっけ!?

小休止録 大家の正体（後書き）

なんか、夢落ちにする予定はなかったんですけど。

っていうか、もっとほのぼの、享助とちっこいのが大家の正体を暴こうとしていくけど、結局分かりませんでした。っていう感じにしようと思ったんですが・・・

ホラーああああああ

第8録 「うしおに」なら聞いたことある

「……………」

「さあ……みんな、いいかな……………？それで……………」

皆が神妙な面持ちでうなづく……………。

「よし……………いくぞ！！せーの！！！！」

バン！！と音を立ててカードを見せ合う。

「ぐあああああああまた負けたああ」

「くそーまたリクオと花開院さんの勝ちかよ」

「ちくしょー持ってけよ……………かけたお菓子、持ってきやいいだろー！！！！」

うるせいなあ、そんなにくやしいのかよ、周りに迷惑だよ。

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

「嫉眼山伝説……ですか、聞いたことないですね……」
すみません、と小さく謝る陰陽師。

「ふふふ、そりゃーゆらくんが知らないのも無理はない!!」

妖怪先生のようなマニアの方々には知られてないのだよ!! 今日はそのすごい伝説とやらを聞きに行くんだ!!」

妖怪先生ねえ……、胡散臭いことこの上ない。

そんなのと関わるんじゃない清継よ!!」

「そのためには妖怪の知識をためなければ!! さあ!! ハイもう一度!!」

清継曰く、妖怪ポーカー……この下らないゲームをもう一回だど!?」

当然、団員からも文句が出る。当たり前だろ。

「あ!! 享助君!! 寝るな!! 寝ちゃいかん!!」

「グーーーーー……」

もういやだ。ねみい……、変な夢見たせいで寝不足だ……。

「寝るなああああ!!……」

電車を降りて、バスに乗り、やっと山の入り口っぽい所に到着。
うげえ、階段地獄が待っている。

一時間後、

「なんだよ~~~~~ず~~~~~つと山じゃんか
!!!」

「当たり前だ!!!修行だぞ!!!」
なんのだよ.....

「足いたいー」

俺もだよ。はあ.....

ちよつと気を抜いた時、疲れていたせいか体がグニヤリと歪んでしまった。

「.....」

例えるならば、リンボーダンスのすごい版みたいな状況だ。
後ろを歩いていたらリクオと雪女と目が合ってしまった……

「……………」

何事も無かったかのように体勢を元に戻す。

「ちょ、ちよつと!! 蛇塚くん! 今の何??」
めんどくせえ……………」

「体が柔らかいだけですけど、何かあ? ちよつと疲れて体勢崩した
だけだよ。」

「で、でも、不自然だよ、それにどっかで君の顔見たような……
うぜえ。」

「この前に、会ったのが初めてじゃないですか? それに、不自然っ
て、あなたの考えの問題でしょうが……………」

リクオは、納得してないようだが、それ以上聞いてこなかった。
つららの姉さんがめちゃくちゃ睨んでるけど……………無視…………

なんだかんだしているうちに妖怪博士とか何とか云う、やばそうな
人との待ち合わせ場所に着いたようだ。
それにしても、つかれたなあ。

「ああ!! あなたは!! 作家にして妖怪研究科の……………化原先生!
!」

「うん」

うわあ、やばそうな人だとは思ってたけど……

まあ、作家って事はちゃんと社会と関係をもってたろう。

でも、やっぱり生理的に無理だなあ……

「うむ、そいつは……この山の妖怪伝説の主人公だよ……」

化原センセイの雑学を軽く聞き流していく……。

化原センセイ、……あんた蜘蛛の糸が超くっついてるよ、とってあげましょうか？

蜘蛛の糸をたどっていくと、……木の上に人がいるんだね。おかしいなあ。

幻覚かなあ、そうであってほしいなあ、そうだろう、今、疲れてるもんなあ。

「あれ？信じてない？んじやー、もう少し見て回ろっか……」

「」

めんどいよお、はやく休みたいよう……

立ち入り禁止の場所に入る団員達。霧深いなあ、涼しくて気持ちいいけど。

「ん？なにこれ……」

明らかに作り物だろ、っていう感じだな。おい。

「それは、爪だよ。」

「ここは妖怪の住まう山だ、もげた爪くらいでおどろいちゃーこまる。」

おいおい、あんたの顔の方が怖いから・・・

っていうか、あんたお化けでしょ！だよね！そうでしょ！！！！

センセイの一言でさわぎだす団員。うつせい。

っていうか、よく見ろよ、こんな爪の生き物がいたら特別天然記念物に指定間違いなしだよ？

作り物臭い爪を見ただけで信じちゃうほどお前らは純粹なの？ねえ？どうなの？

「山にまよいこんだ・・・」

不安そうだねえ陰陽師娘。

「旅人を襲う妖怪・・・」

おい清継、お前妖怪を見たいんだろ？そんな不安げな顔してんじやないよ・・・

「名を牛鬼という・・・」

そんなに怖いんならくんじゃねえよ、なんでみんな黙りこくっちゃってんの？

っていうか疲れた！！！！はやく、休みてえ。

「・・・ダメだ、通じないわ・・・」

雪女が携帯を見てつぶやく。

当たり前だろうが！！山奥なんだよ？そんなのも分かんないの？

「いやだあーーーーー！！！！」

「帰ろーよお、こんな山ーーーーー！！！！」

さわぎだすトリマキコンビ。意外と純粹なんだね。これ絶対作りもんだよ。

「みてよおこーんなでかい爪ー死ぬつて~~~~~」

いや、だからさあ・・・

「そーだよ鳥居さんと巻さんの言うとおり！今すぐみんな帰った方

「がいいよ！」

「よし奴良！！あんたついてきな！！」

「おいおいおいおい・・・無理無理、ね、落ち着こうか？」

「暗くなった山を降りる方が危険だ！！それにおりてもバスはもうない！」

「普通こう考えるわな・・・。」

「つていうか今から山おりるとかふざけてんの？」

「はっはっはっ、まあいうても牛鬼なんて伝説じゃから。」

「あのツメも誰かの作り物かもしれんしの~~~~~」

「いやいやいや、作り物以外に考えられないだろ、

もしいたら、研究所送りになって、ホルマリン漬けにされるのがおちだろ？」

「まあホントにいるんだけどさあ、一応この世界の一般常識では妖怪は公認されていないじゃないですかあ。」

「ここまで信じ込むってどうなんですか？他の人はもっとフツーなのか？」

「こいつらだけがこんなに信じ込んでんのか？」

「それとも俺の考えがひねくれてんの？」

「ねえ、どうなんだ？疲れすぎてて混乱している頭ではこれ以上考えたくない。」

「来なきゃよかったよ・・・。」

第8録 「うしおに」なら聞いたことある（後書き）

牛鬼「ぶちいいいいい……」

ちっこいの『ああ！！切れちゃってますよ！！自分でぶちいいって
言っちゃってますよ！！』

享助「おいおい、やべえな、牛さん切れちゃったよ。もーもー言っ
ちやうんじゃねいかあ？」

牛鬼「もー許さん、貴様らああああ」

享助「落ち着け！落ち着け！ちゃんと自然の恵みに感謝してピフテ
キ喰うから！！」

ちっこいの『火に油注いでんじゃねえよ！！！！！！』

第9録 究極的に関わらない!! (前書き)

「 享助「あーる、はれたーひーるさがりーいちーばーえつづーくみち
」

ちっこいの『なんですか・・・その歌・・・』

享助「子牛ちゃんが市場に売られる歌だよ・・・。」

ちっこいの『なんかもつと景気のいい歌歌いませんか?・・・』

第9録 究極的に関わらない！！

黒い森の中……二つの影が現れる。

「今宵は新月……あらしのよる……」

大将の首を狩るにはふさわしい夜だ……」

「馬頭丸よ、うまくとどまらせたようだな。」

顔の半分を髪で覆わせた少年が、さつきまで、化原を操っていた、動物の骨を頭からすっぽりとかぶった少年に声をかける。

「ここまでが大変だったぞ、ここからどうすれば？」
骨をかぶった少年が尋ねる。

「若頭には……常に側近とやらがいるようだ、どれかはわからんがな」

そういうと、片目を覆った少年は続ける……。

「まずは奴らをばらばらにすること、」

そして 一人ずつ片づけることだ」

視点：享助

「おおお〜テンションあがるっ〜」

トリマキコンビがさわぎだす。さっきまであんなにビビってたのにこの変わりよう。

っていうか、これテンションあがるかあ？

和風の広間にシャンデリアって、カオスもいいところでしょ。・・・

「さあ、おまちかね、この奥が特製の温泉だよ、女の子達・・・先に思う存分入るがいい。」

本格的だなあ、どこぞの旅館か！ってレベルの入り口だな。

女子が上がったら後で中也見てみようかな・・・。

さっそく、温泉に向かう女子ども・・・なんでそんなに元気なんだろうね、きゃきゃあさわいで。

「さあ！！今のうちに僕たちは妖怪探検だ！！！」

化原の話を聞いている時は、ビビってるように見えたが・・・周りの空気を読んで黙ってただけか・・・

こいつの辞書に恐れるという文字はないってか？

「あ！あれ？、享助君？みんなは？……」

「妖怪探検だつて、今行けば間に合うんじゃないか？」

「そう、享助君は行かないの？」

「はあ？冗談でしょ？的な顔をしたら、家長は、苦笑いして外に出て行った。」

「物好きだねえ、つて、目的はリクオか！！」

「部屋に着く……」

「あ！飯が用意されてんじゃん！！お先に失礼していただいちゃおう！！！」

うまそうだなあ。やっぱり、和食だよなあ。

これまた料理もこつていて、どこその旅館のようだ。っていつか誰が用意してんだらう？

住み込みのお手伝いさんか？……

「ごちそうさまでした。……」

ご飯はみんなで食べたほうがうまいという味覚馬鹿がいるが、俺は一人で食う方が落ち着いて食べられていい。

おいしい料理を堪能して、一息つく、今気付いたが、風呂は襲われてるから当分は入れないのか……、シヨック……

暇だなあ、寝ようかなあ……

ごろりと横になる………が、

きやあああと叫び声の様なものが聞こえる。ああ、あれは幻聴だな。

でも幻聴がうるさくて眠れないや……、

そっいえば、ちっこいのはちゃんと留守番してんのか？気になるな

あ………

……彼の出番はここまでのようだ……。

風呂場は、とてつもない状況である。

陰陽少女ゆらは、だいぶ追い詰められていた。

「カカカ、式神はあつかうものが倒れば力を失うってか!?

いけ!!あの女に集中攻撃だー!!」

骨をかぶった少年は、陰陽少女を追い詰めた……

と……思われたが……

どこからか、現れた三羽の鴉天狗……。

彼らは、少年のあやつっていた、うしおに軍団を一瞬で、蹴散らしてしまった。

「カ、カラス天狗!?!…本家の……お目付役……なんでここに

……

「けがらわしい……女湯を襲う妖怪か……

……

一人の鴉天狗が心底嫌そうな目で、少年を見下す……。彼女は女性
のようだ……。

「あ……いや……」

少年は取り繕うとするが、時すでに遅し……。冷たい視線の集中
砲火を浴びる……。

その頃……

「ぐーーーーー、んぐ!」

なんだろう?爆睡していた一人の少年がいきなり起きる……

「……ネタが無いからっていきなりカメラ回すのやめ
ませんか?」

はて?この少年は寝ぼけているのだろうか?

「にしても、このままでいるのはやだなあ、風呂場の様子でも見てみようか？」

今は緊急事態のようだ、彼がこのまま、女子の入浴中の風呂場に行っても誰も非難はするまい。

「………そういうナレーションはいらないからね、……」

時々この少年はだれにも理解しえない独り言をしゃべるようだ。

「すみませー……ん……！何かあったんですかあ??」

何が起こってるのか知らないわけではないが形式的にそう大声で聞いてみる。

「きよ、享助君!?!今はダメ!?!絶対入ってきちゃだめだからね

「!!」
中から女子がそう返してくる……。まあ、全裸の状態だしな。
だが別に入るとはだれも言っていないんだけど……

「そうですねあーじゃあそろそろあがったらどうですか
ー何時間入ってんですかーのぼせますよー?」
妖怪に襲われてるからちよっとしか入ってないんだろっが、いく
らなんでも長い。そろそろ出るよ。

「いいから、あんたは部屋に戻るときーな。」
陰陽師が風呂から言ってくる。良くないよ……。こちとら何時
間汗かいたままだと思ってるんだ?今すぐにも風呂に入りてーよ!!
はあ、しょうがない、もうひと眠りするかな……

数分後……。結局部屋には戻らないで廊下にある絵を鑑賞して
いる。

くくく……。なんだよ、幼児の落書きかよ……。ぷぷぷ……
と馬鹿にしていた絵が実は、ピカ〇だったのには驚いたが……
絵は見ていて飽きないな、

特にここの絵は変なのが多くておもしろい。

「うおーい、助けてくれ」

風呂場から情けない声が聞こえる。

男？馬頭丸か？ちょっと見てみたいなあ……

そんなわけで、もう一度風呂場に向かう。確かもう女どもは、服着てるんだったよな？

ガラリとドアを開けて中に入る。うおおお広い！！！！どこの旅館より全然広い！！！！

原作通り、馬頭丸が宙ぶらりん状態で痛めつけられている。……

なんか来るべきじゃなかったんじゃない……

「な、何で入ってきたんや！！」

俺を見て怒鳴る陰陽師……。

もちろん服は着用済みなので俺が文句を言われる筋合いはない。

「いいじゃないですか。俺だって風呂入りたいの我慢してんですよ。ちよつと浴場の様子見に来て何が悪いんですか？」

「そういう問題やないんや！！今は……」

ああうぜえ、耳に指で栓をして、陰陽師の言葉を無視する。

にしても、ホントに広いな。なんかこの風呂についての説明書きが書いてあるな。

なになに・・・皮膚病によく聞く？

じゃあ、俺の体のうるこもこの風呂につかれれば治るのか？・・・

無理か・・・皮膚病じゃなくて、素があればだからなあ・・・

・・・

っっていうかどうでもいいけどさあ・・・

雨降ってきちゃったじゃん！！露天風呂入れねえ！！！！！！！！

第9録 究極的に関わらない!! (後書き)

ちっこいの『なんすか! 今回の話!! おいらが出てこないじゃないですか!!』

享助「黙れ!! 脇役Aの分際が、・・・出られなかったからといって騒げる立場じゃない事を理解しろ。」

ちっこいの『わ、脇役、・・・撤回だ!! 撤回を要求する!!!』

享助「貴様はたまたま、偶然、奇跡的に俺のおまけとして出れているだけなんだよ・・・ホントはお前はただの通りすがりの下っ端妖怪なんだよお!!」

ちっこいの『う、うそだああああああああ』

享助「認めようね・・・」

第10録 鏡に映る姿は左右逆（前書き）

リクオ「……今は人間だよ……」

牛鬼「……覚えて……いるのか……」

リクオ「覚えてる、昨日の事も、旧鼠の事も、蛇太夫もガゴゼも！」

ちっこいの『しゃべった！！確信犯や！！確信犯でっせえ！！才口
千様！！』

享助「……！……！すぐに警視庁に連絡だ……！！！」

リクオ「ちよつと……！……！きよ、享助君……！……！まだ出番じゃないんだから
……！！！」

享助「おい、貴様はふざけているのか？……なぜ前回の話の終わり
からいきなりこの話になるんだ？……」

リクオ「そ、そんなの知らないよ……！……！享助君が原作に関わらなかつ
たせいじゃない……！！！」

ちっこいの『ばかあ……！……！それは禁句だぞ……！！』

享助「あ……！……！もしも……！……！警察ですか？……！今、目の前に殺人者が……
……」

リクオ「ちよ……！……！なにしてるの……！！……！！！」

牛鬼「・・・私の出番はこの前書きだけなのか？ 擦れ目編の主役であるこの私がああ！！」

ちっこいの「あさましいですねあ・・・人も妖も・・・」

？？？「そうですねえ・・・」

ちっこいの「あんた誰？っていつかどツから声が？・・・」

？？？「そづいづのは気にしないですよ。」

くだと？

「なんじゃいクソ甘い・・・人間のままじゃないか・・・」

「そんな純粋ビュアな妖怪の総大将がおるか〜い!!!」

老人の叫んだ言葉は青空に飛んで行った。

視点：享助

「ハイ!!!そこ!!!違う!!!、式神のかまきは「こつ」「や」

現在陰陽少女による妖怪退治講習、トリマキさんは禹歩とやらを習っている。

もちろん俺は見てるだけええ・・・。

家長がどごそのスパイのように双眼鏡をつかってある一点を見てい

る。

その先にはリクオと雪女。ああ、気にしてるのかあ。

でも双眼鏡使うほど離れてるか？肉眼でもここからならなにしてる
か見えるぞ？・・・

双眼鏡をしまい立ち上がった家長に陰陽師少女が声をかける。

「何をしてるん、家長さん・・・」

「さあ~~~~家長さんもレッスンや！ホンマはいの一番に受けて
ほしいのがあんたなんやで!!」

そついうと強引にレッスンを始める陰陽少女・・・

「やあ諸君!! やってるねえ!!」

でかい声を出しながらやってきたのは清継。彼はこの馬鹿らしくも、
すばらしい団体の団長である。

すると清継は、ごそごそと何かを取り出し、家長に差し出す。

「家長さん!! 今日君の生まれた日じゃないか~~~~」

マイファミリーへのプレゼントに遠慮なんかいらないよ!!

ガンガン受け取りたまえ!!!!」

やることは良いんだけどね・・・残念な子だね・・・

家長が箱を開けると・・・そこにあったものは・・・

「何……これ……」

「家長さんを妖怪化した人形だ！……どーだい！？超絶キュートだろ
う！……！」

マンガで見たときはもうちよつとましに見えたんだけどなあ……
キモい……

「うげええ〜いらねえええええ」

トリマキコンビの巻さん。それが普通の反応だわな……

「ゴミだな、生ごみ……」

「バカ！！これはブランド品だぞ！！！！それに享助君！！ごみと
は何だああ！！」

おっと口が滑った……。

「ちよつと……もう今日は帰るね……」

ああ〜この後、家長はとんでもない目に合つんだよなあ〜

ま、人事だから関係ないがな……。

雲外鏡だっけ？たしかチャイナの妖怪だった気がするんだが……

不法入国でもしたのか？これだからあそこは……

ぷ~~~~ん

……さっきから耳元を飛ぶ蚊がうるさい。

「……」

ぷぷぷ……腕にとまった蚊に狙いを定めて手を振りおろす。

ばちん!!!!

ぷ~~~~ん

「……」

自分の手が叩いたことによって、腕が赤くはれる。

「あぶないですねえ〜、いきなり殺そうとするなんて。．．．」
そついいながら、目の前をぶんぶんと飛ぶ蚊．．．。

！．．．ば〜ん！．．．

手で包むようにして蚊をとらえると足早に団員達から離れようとする。

「ど、どうしたんだい？享助君？」

「ちょっと、トイレ行ってきます。」

そうして、屋上を後にする。

とある男子トイレ……
運よく誰も用は足していない。

「貴様も妖怪なのか？」

「ああ！あなたも妖怪なのですね、自己紹介が遅れました。
ワタクシ、日系ドラキュラのニーゲル2512世でございます。今
回は数百年ぶりの祖国帰りです……」

日系ドラキュラ？……それがこのやぶ蚊なのか？……ちよつ
と涙が……

「ワタクシ、まだこの国の勝手がいまいちよくわからなくてですね、
失礼をいたしました……」

「なんでもいいが、……勝手に人の血を吸うのは関心しないな……」

「……すみません……」

俺は、蚊という生き物がこの世で10番目くらいに嫌いだ……
あのかゆみ……思い出しただけでも不快になる……

ちらり、とトイレの鏡を見る、なぜ見てしまったのだろうか？
ホントになんの気もなく、見たのだ……。

雲外鏡と思われる、デカイ妖怪に襲われる家長カナ、・・・
なんかこつちに助けを求めているような・・・っていつか見えるだ
けじゃなくて声も聞こえてきたよ・・・
幻聴じゃあ・・・無いヨねえ？

「きよ享助君！！たたすけてええ！！！」

「ハハハ、無駄であ〜ガナちゃあ〜ん、ここはオデとガナちゃんだ
け〜」

「なんで、何で見えないのお〜〜!?!？」

見えてるんだけどね・・・。あえて見えないってことで・・・
はやくしないと、清継とかが見回りに来そうだ、そういえばあの気
色悪い人形・・・
通信機になつてんだっけ？

「・・・いいんですか・・・レディが助けを求めているというのに・
・・・」

「・・・いい・・・」
どうせリクオが助けたから良いんだよ。

「いやはや・・・最近の若い者は、ダメですねえ、まあ私の能力を
使えばチヨちよいのちよいですね。」

「なんだと!!!・・・」

この虫けらが何かできるとは到底思えないんだが……

「わが一族に伝わる最強の秘術……」

「……」

「なんだあ、ががゆいい!!、がゆいいい!!!!!!!!!!」
いきなり体をかきむしりはじめる雲外鏡……
何が起こったか分からないが……とりあえず足早にトイレを出る……。

「……いったい何をしたんだ?……」

「あははは、ワタクシ、体のかゆみを自在に操ることが出来まして

ね、発狂死させることもできるのですよ。」

かゆみって……っちょっとしょぼくないか……？

「おや？……あまり理解されていない様ですが、どんな強者でも、痛みには耐えられても、かゆみには耐えられない……つまりかゆみを操れるというのはその生命を握ったのと等しいのですよ。」

「……」

「さて、少々おなががすきましたね……」

「……かゆくはないなら、少し吸ってもいいぞ……」

「そうですね……それでは……」
「そういうと、蚊はいきなり人型になる。」

長く黒い髪で、白黒のツートンカラーの服を着ている。
年は、分かんが、十代なかば……か？

「……おまえ、女だったのか？……」

「……ええ、血を吸うのはメスだけですよ……」
「そういうと、にじり寄ってくる蚊。今は人型だが……」

「……まさかそのまま吸うとか言わないよなあ……」

「ええ、滅多に妖怪の血なんて吸えませんが飲みだめしますね・・・」

ニコニコしながらいう言葉ではない。

どんだけ吸う気だよ。貧血になっちまうよ・・・

いつの間にか、体が拘束されて動けない、おい!!どんだけこの尻、
力つええんだよ!

ちよ!!やだよ!!やめろおおおお!!

「いただきます!!」

ぐさり!!と首筋に牙?きば!?!つつ突き刺さってる!!!!!!!!
とつか尋常じゃなく痛い・・・

「ぐっはあ・・・」

あまりの痛さに意識が飛んでしまった・・・。

視点：ちっこいの

『オロチ様、遅いっすねえ・・・何やってんでしょう・・・』

テレビを見ながらそんなことを考える。

『はい、こんにちは！！今回は蚊についての実験です！！
蚊に刺されるとかゆいですよね！！そこで、そのかゆくなる成分
を出す管を切って血を吸わせてみまーす！！！！』

『なんと、かゆくなる成分は同時に刺す痛みをやわらげる効果があるらしくて！

これがないとかゆくならない代わりに刺される時とてつもなく痛くなるんです！！』

下らない番組だ・・・そのままテレビを切って夕食の準備を始めた・・・

第10録 鏡に映る姿は左右逆（後書き）

二ーゲル「これからよろしくお願いします。」

ちっこいの『てめーなんか不必要なんだよ、土に還れいえ!!!』

享助「俺的にはお前の方がよほど不必要だがな・・・使えないし・・・」

第11録 来訪者（前書き）

ちっこいの『作者最近、前書き俺らに丸投げつすよね、ちゃんと書いたらどうなんですかねえ？』

享助「馬鹿め、貴様、俺らが作者による創作物であることを理解しているのか？

俺たちなんて、はなから存在しない。ただの文字の列にすぎないのだよ、

つまりは、この会話は、全て作者の考えたものであり、俺たちはそれをしゃべっているだけ……

俺もお前もこの世界に存在するもの全ては、同一人物なんだよ、分かったか？

結局俺らは生かされるも、殺されるも、作者の自由、ここは作者が独自に展開した存在しない、文字の列の世界なんだ、

まあ、作者に対するさっきの文句も作者が考えたものなんだがな……」

ちっこいの『そういうの言うのはタブーなんじゃ？……』

享助「黙れ……、いちいちめんどくさいキャラだな……あんまり馬鹿なキャラ設定にならないように気をつけろよ……所詮、貴様は脇役なんだからな？」

二ーゲル「かつかかかかかか！……！」

ちっこいの『てめーにや笑われたくねえよ！……！』

二ーゲル「ワタクシとしては、いまだに名前さえ付いていないあな

たの方がよほどかわいそうですがねえ？・・・」

「ちっさいの・・・」

第11録 来訪者

妖怪・雲外鏡

通称、紫の鏡

魔を照らす鏡である。この鏡を見ると13歳の誕生日に殺される。

古代13という数字は、十三の発音が實生みじょうに近かったため、昔から妖の世界では、成人の年とされた。

視点：享助

「ああ！思い出した、思い出した、確かこんな妖怪だったなあ・・・

現在、自宅のパソコンで、雲外鏡を調べている。ああ、首痛いなあ・・・

首には包帯が巻いてあるが、痛みは全然おさまらない。

気分転換に、雲外鏡を調べていたのだが、全然気がまぎれない・・・

『昨夜未明、何人もの人が、変質者に襲われ、重軽傷を負いました。．．またこの事件の犯人は、いまだに逃走を．．』

『あ！！見てください！！この被害者が撮った写真！！こいつ妖怪ですよ！！！！』

「え〜！！ホントですか??」

ぎゃあ、ぎゃあとさわぐ、ガキと蚊．．その正体は妖怪である．．．。

意外と仲が良い．．やっぱ同類だからか？

『全く最近は、ちょっと驚かすだけで、やれ変態だの、やれうざいだの、やれキモいだの、やれ変質者だのと．．．．．』

「ええ、ホントに．．ワタクシなんて、少々他人の血をたしなむだけで、害虫扱いですからね、

最近では蚊取り線香で飽き足らず、虫よけスプレーだの、ムシコナーズなどと、本当にやな時代になったものです。」

蚊取り線香が効かなくなってきたから、新しい対策を講じたにすぎんだろ、．．．

コレだから蚊は嫌いなんだ．．．うぐっ．．．首痛っ．．．

つていうか、雲外鏡が終わったら、そろそろ四国の妖怪が来てるヨねえ？
はあく……擦眼山みたいな感じにはなりたくないな、いまだにリクオに仕返しできていない……
今回は、仕返すの大チャンスだな……四国に手を貸してぬら組をぶっ潰すか？……

「ニーゲル、……ちよつとついてこい……」
ぶんぶん部屋を飛ぶ蚊に声をかける……。大家にばれるから、人型になれるよりでしたが、……
この羽音、けっこう精神的にキツイ。

『……おいらは？……』

「おまえは留守番に決まってるだろう……」

『えく、ずるいですよ……おいらも連れてってくださいよお！
！……』

うるせえ……長期間発散されてないストレスが、スカスカと、

漏れ出す・・・まずい・・・

「・・・黙れ、貴様を連れて行っても役に立たん、というかお前に何ができるんだ・・・」

無意識に畏れを発動してしまう・・・

「ぎゃはははははははは、まあ、お供はワタクシに任せなさいな。」

『・・・むぐう・・・うわあああん・・・』

ボタンと扉を開けて出ていくちっこいの・・・なんかパターン化されてるな・・・

「・・・行くか・・・」

「・・・行きましょう・・・」

ぷぐんと俺の腕にとまる二ーゲル・・・

ばちん！！！

「・・・なにするんですか！！！」

「どさくさにまぎれて血を吸おうとしただろ……」

「うぐう……」

「次にこういう真似をしたら……分かってるだろうなあ？……」

「ぎろりと蚊をにらむ。他人が見たら一人でしゃべる変人にしか見えないだろう。」

「は、はいっ……」

街を歩く。四国の妖怪たちでかいビルにいた気がするんだが……どこだっけ？

「享助君!!……」

呼ばれたので振り返る……。

そこには学校帰りのリクオと家長……それと及川こと雪女、倉田こと青田坊……

さらにその後ろに、側近共……なんかばればれの尾行だな。

「享助君……外で歩いて大丈夫なの?……」

学校には、とつもない重病って言うてあるからな、首がちよつと痛いだけけど……

「……もう治った……」

苦しい良い訳だが、これで納得してもらうしかない……

「は、はやくない?」

なんだかリクオの様子が変だな・・・なんか俺を利用して重要な話題をそらしてるような・・・。

「及川さん家こつちなんだ・・・」

「何にも知らないのね・・・家長さん・・・」

ああ、そういうことね・・・及川と家長のリクオをめぐるバトルか・・・
とすると・・・そろそろあいつらが来るころなんじゃないのか？

「・・・リクオくん・・・だよね・・・」

高校生と思われる服装の二人組・・・四国の妖怪だな・・・

「・・・誰・・・？・・・」

リクオが知らないのも無理はない・・・初対面だもの・・・

「いや、聞く必要はなかったか・・・」

こんなにも似ているのだから・・・僕と君は・・・

若く、才能にあふれ、血を継いでいる・・・」

こうというのが、巷でさわがれる、ナルシストって奴だな。

「だけど・・・君は最初から全てをつかんでいる・・・
ボクは今からすべてをつかむ・・・」

「まあ、見てて・・・僕の方がたくさん畏れを集めるから。」

この自信に満ち溢れた顔・・・虫唾が走るな・・・

「ま・・・待って・・・」

「ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・」

両手に花かあ~~~~~!? やっぱり大物は違っぜよ
~~~~~」

もう一人、さっきまで黙っていた男がそういうと、長い舌で家長の  
顔をなめた・・・  
犬だけにか?.....

「ひい!.....なにいい!!!」

「か、カナちゃん!!」

リクオ達とは対照的に笑いながら去っていくナルシストと舌長男。

「あいさつじゃ」

舌でなめる挨拶って、アフリカの方とかにありそうな挨拶方法だな・



・

すると、二人組のまわりに明らかに時代の違う服を着た大小さまざ  
まな影が現れる。

「なんで……なによあれ……さっきまであんなのいなかったのに……」

家長が半泣き状態でそうつぶやく……

泣くほど怖いのか……見た目はそんなでもなくないか？

「着いたね……七人同行……いや……八十八鬼夜行の幹部達……」

「やれるよ……僕らはこの地を奪う……」

昇っていくのは……ボくらだよ……」

なんかこのナルシスト、リクオよりムカつくなあ……  
そんなことを考えながら、リクオの側近たちを見やる……  
雪女、青田坊をはじめ、全員あいつらに気を取られてるようだ……

「おい、ニーゲル……」

「なんででしょう？……」

「あいつらの血を吸いまくっていいから、あいつらの後をつけてア  
ジトを見つける……」

「かしこまりました……」

ぷんと飛んでいく蚊……  
くくく……ざまあみろ……かゆみにもだえ苦しめ、四国共が、  
……

にしても……どうしよう……リクオよりムカつくキャラがわ  
んさかいるから

四国の手助けする気が失せてしまった……

第11録 来訪者（後書き）

享助「おい、ちっこいのはどうした？・・・」

二ーゲル「さあ？・・・拗ねて帰っちゃたんじゃないですかねえ？・・・」

享助「めんどくさい・・・っていうかもう誰か名前考えてやれよ・・・」

二ーゲル「ヤデスヨー・・・そんなめんどくさい事誰もしたくないです。」

享助「だよなあ・・・俺も考えたくないもん・・・」

二ーゲル「そうですね、もう現状維持が一番良いですよ！！・・・」

ちっこいの「ちょっとおおお！！勝手な事言わないでくださいよお！！！」

享助「じゃあ、自分で考えたらどうよ？・・・」

二ーゲル「・・・それが一番イーですよ。なんて呼ばれたいんですか？・・・」

ちっこいの「え・・・ええーとお・・・」

享助「まあ、考え付くわけないよな、理由は前書きで述べたとおりだがな・・・」



## 第12録 めら組撲滅協定成立(前書き)

享助「死ぬ、死ぬ、しねしねしねしねしねしねい!!!!!!!!!!」

ニーゲル「享助殿のご乱心だあ!!!!」

ちっこいの『そんなに焦ってどうしたんですか!!オロチ様!!!!』

バシツバシツバシい!!!!!!!!!!

享助「・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・死んだか?」

ニーゲル「ゴキブリじゃないですか・・・」

ちっこいの『もう死んだから大ジヨブですよ、こんな潰せば一発で死にますから・・・そんなにたたくことないのに・・・』

ニーゲル「意外に怖がりなんですね、そんなに妖怪と戦えるんですか?」

享助「戦う気はそもそもないから、デカイ口叩いてるだけですよ。そもそも貴様らが部屋を汚すからこんな目に合うのだ。そうか、全部お前らのせいだったのか!・・・」

ぎろり!!!!

ちっこいの「ニーゲル」『ひい!!!!!!!!!!』

## 第12録　ぬら組撲滅協定成立

視点：享助

学校を休んでいたことをリクオに怒られるのではないか?と思って  
いたのだが、

運よく四国のナルシスト共が、リクオ達に絡んだおかげで俺のずる  
休みはうやむやになった。

よかった、よかった・・・というわけで現在帰宅したわけだが・・・

『うつうつうつうつ・・・』

部屋の隅でいまだに泣いているちっこいの、留守番をしるといふ命  
令はちゃあんと守ったらしい。エライ、エライ（棒読み）

「おい、いつまで泣いているつもりだ、いっとくがかなりうざいぞ  
・・・」

あまり機嫌は良くないので、びしゃりときつく言い放つ。

さて、蚊が帰ってくるまで何しようか・・・?  
んーんー・・・寝よう・・・

ウトウトと、素敵な夢の中に入りかけた時ピンポンとチャイムが  
鳴り響く。

「（くそ、せつかくももう少しで素晴らしい世界だったのに、  
どこのどいつだ、非常識野郎が……）」

少し暗くはなっているが、非常識といわれるほど遅い時間に尋ねた  
わけではないのに、

この客もひどい言われようである……が、ストレスが極限状態  
の現段階ではしょうがない。

しょうがないんだってば……！……

ばたん！！

俺がドアを開けようとする前に、チャイムを鳴らしたと思われる人物が勢いよくドアを開ける。

やっぱり非常識なのかな？普通、許可とってからドアは開けるんじゃないのかな？

「享助殿ですか？・・・お知り合いの女性がお呼びです。ご案内いたしましょう。」

少し小柄の男が俺に向かって口を開く。

言ってる意味がわからん。なんだ？もしかして蚊がなんかへましたのか？

あいつって、意外と使えんのか？・・・

もし本当に虫けらがへまやったんだったら、一人で行くのはやだなあ・・・

「おい、ちっこいのついてこい、お前に仕事をやる。」  
その言葉を聞いて泣きべそをかいていたちっこいのが、がばったちあがる



『ほ、ほんとですか!?!』

「うん、ホント、ホント（棒読み）」

俄然やる気を出したちっこいのを引き連れ、訳のわからない黒服の男に案内してもらったことにした。

視点：ニーゲル

「にしても血を吸いほうだいなんて・・・なんって太っ腹なんでしょ  
う!?!」

現在、享助さんの命をうけ、妖怪集団の後をつけている。

まあ、つけているといっても相手の体へはりついて今まさに相手の血を吸おうとしているのだけでも。

でも・・・飲み放題とは、すばらしい仕事だ！ただ相手にへはりついているだけで仕事をしたとみなされる。

自分の評価が高くなるばかりでなく、・・・飲み放題！！！！

さて、

「いったただつきまーす！！！！」

ぶすりといこうとするまえに、血を吸おうとしていた相手に器用に捕まえられてしまう。

な！！！！まずい・・・このままでは簡単に殺されてしまう・・・

人型になればわけないのだが、正体をばらすのは非常にまずい。

ならば、我が最終奥義を！！！！！！！！

「おっと、下手な事はしないほうが身のためだよ、何かしたら即握りつぶすからね。」

なっ！！！！この男は蚊であるワタクシを妖怪であると見抜いたようだ・・・

ますますマズイ・・・だがちょっと力を入れれば握りつぶされそうな状態にされてしまっている。へたにかゆがらせて、はずみでグチュなんてことになるのは避けたい。

しばらくあるくと大きなビルに彼らは、入る。 . . . .

. . . . . もちろんつかまえられた状態であるので、一緒に入ることになる。 . . . .

「さて、 . . . . . そろそろ正体を明かしてくれないかな? . . . . .」  
少し手に力を込めながら聞いてくる男 . . . . .

仕方がないが、人型になるしかないようだ。  
. . . . .

「これは驚いた . . . 君はぬら組かい?」  
あんまり驚いてなさそうにいう男。ぬら組? . . . . . なんだらうか?

なんであるつと関係ないか・・・ぬら組じゃないし・・・

「えつと・・・ワタク・・・私はぬら組なんて知らないです。」  
あぶないあぶない・・・ワタクシなんて言ったら何こいつって、  
なっっちゃうかもしれない。

そのあと、なぜ付いてきたのか、誰に頼まれたのか・・・など色々  
聞かれたが・・・

・・・しゃべってしまった・・・

・・・それもあらいだらいい全部・・・

だつてのど元に刀が突き付けられてるんだから・・・しゃべっても・・・  
問題・・・ないとは・・・思う・・・たぶん・・・

「そうか・・・君は、その男に頼まれたんだね？」

「・・・は、はい・・・」

そう答えるか、答えないかで頭に衝撃を食らう・・・

「・・・はぐっあ・・・」

「さて、一体何者なんだろうね？享助君……」  
男のそう呟く声が最後に聞こえ……私は意識を手放した。

視点：享助

しばらく歩くと、デカイ、ビルに着く。ここって四国のアジトじゃ  
なかったっけ？  
やっぱりとは思ったが、というか絶対そうだと思ったが……なん  
かへましたんだな？ムシケラよ……ダメダメじゃねえか。

「やあ、君が享助君？・・・そういえば、さっきリクオくんと一緒にいたね？・・・」  
ナルシスト野郎が出迎えてくれる。

それよりもだ、・・・人型になったニーゲルが縛られている。気絶してるのか？  
なんでだ？・・・無敵の能力はどうしたあああ。

俺の視線の先に気付いたのが笑いながらナルシスくんがしゃべる。

「君の事は全て彼女がしゃべってくれたよ。・・・」

そういうとニーゲルを足蹴りするナルシスくん。そういうの女の子にやっちゃうってどうなのかなあ？まあ、本当は蚊だからどうでもいいけどね。

「……っあ……はぐうあ……」

けられた衝撃で起きたのだろうか？っていつかマジで何しちゃってんだよ……

蚊トンボ！お前のへまのせいで俺の壮大な計画がああ……

「……ええと……ばれちゃいました……」

どうしようって顔でこっち見られてもね？俺も困るよ？

うーん……ちっこいの連れてきたのは失敗か？今はビルの外で待たせているが……

あいつ役に立ちそうにないもんな……

勝手にしゃべったのが気に障ったのだろうか？……  
神通力によってニーゲルを縛る縄をさらに締め上げる。

「・・・っ・・・っく・・・んあ・・・うく・・・っつ!!・・・」

おいおい、ちょっとかわいそうじゃない?・・・涙目になってるよ?

「君はぬら組なのかい?・・・」

不敵に笑いながら話しかけてくるナルシスくん。

ばかだなあ、そんな顔されるとぶっ殺したくなってしまうよ、しな  
いけどね。っていうかする度胸が無いね・・・  
っていうかぬら組だったらなんだったの?殺すのか?

「ぬら組じゃないですよ。(棒読み)」

即答しておく。事実だし、ここでためると変に疑われるからなあ。

「へえ、じゃあどうしてこんな真似をしたんだい?」

「自分たちは、ぬら組が嫌いなのでつぶしたいんですよ。」

そしたらちようどつぶしてくれそうなやつがいたんで、どんなやつ  
らなのかなと思って調べただけですよ。

それ以上でもそれ以下でもないですね。(棒読み)」

とりあえず、俺の地下にたまるストレスを爆発させないように、感  
情を出さないでしゃべる。



別にぬら組、つぶすほど嫌いじゃないんだけどね、て言うかそんなめんどい事したくもないし……

意外な反応だったからか、ちょっと驚いた顔になるナルシス君。

「それは、証明できるのかな？……君が嘘をついている可能性もある。」

……いらっ……

「じゃあ、協力しようと思いましたが、あなたが疑り深いので帰ります。（棒読み）」

「簡単に返すと思うのかい？……」

……いら、いらいら……

「力づくでも帰らせてもらうことになりましたが？（棒読み）」  
こんなことを言ってみるが、嘘だ。

喧嘩もろくに出来ない俺が殺しあいなんてできるわけないでしょ。

……しばらく沈黙が訪れるが、すぐにその状態は壊されることになる。



「……百鬼には加わりませんが、協力ならしてもいいですよ。

（棒読み）」

解放されたニーゲルの縄をほどいてやりながら、ナルシス君にそう話す。

「ほう……どう協力してくれるんだい？……」

「まあ、やることは百鬼に加わっている妖怪と変わらない感じで・

・  
ただ、外部の妖怪という扱いにしてほしいのです。（棒読み）」

百鬼夜行に加わるなんてとんでもないな。

いちいち、このナルシストの言いなりになったり、周りの妖怪に気を使わなくちゃいけないなんて絶対に嫌だ……

「まあ、僕たちに協力してくれるならそれでいいよ……好きにや  
つてくれたまえ。」

「では、今日はもう帰らせていただきます。」  
ホントに帰りたい。今すぐ帰って寝たい気分だな……

そうして、四国のアジトを後にする。

視点：ニーゲル

「……」  
さつきから無言で先を歩いている享助さんが怖くてまともに頭を上げられない。  
帰ったら・説教だろうか？……

『あつ、もう用はすんだんですか？』

ビルを出ると人間になり済ました、いつも一緒に暮らしている妖怪が待っていた。  
享助さんをオロチ様と呼んでいるが一体何なのだろうか？妖怪としての名前なのだろうか？

「飯つくんのめんどくせいなあ……この前調べたラーメン屋行かないか？」

享助さんはいきなり口を開く。

えっ……ラーメン？……さっきの重苦しい雰囲気から、ラーメン！？……

『いいすねえ！！確かここからなら、万福って店が一番近いです！』

そういうと彼はラーメン！ラーメンと騒いでズンズン進んでいく。人型の時は子供のような容姿だが、意外と精神のほうも子供なのだろうか？……

「んじゃ、いくか……」  
そういうと享助さんも歩き出そうとする。

え？え！説教は？……無しですか？……その方がうれしいけど……  
なんか、それはそれで……

「……あ！あの！！……」

声をかけるとくりりと首だけ回して振り向く享助さん……。

「……………何？……………」

「……………あの……………その……………すみませんでした……………」

なんかごにょごにょと小さい声になってしまった……………怒られるだろうか？……………」

「……………別にいいけど……………」

「……………え？……………」

絶対に説教間違いなしだと思っていたのに予想外の反応で間抜けな声を出してしまう。

「ってゆうか、お前が無事だっただけで、よかったよ。」

ええっ！！……………てことは、つまり……………私のことを心配してくれ

ていたと？・・・

「そもそも虫けら程度のお前に期待なんてしてなかったからな、とつくに死んだかと思ったんだが、・・・まあ、ちっこいのより使える駒が残ってくれて助かったよ。」

かっかつかと笑いながら歩いて行ってしまった享助さん。

見つかってしまったのは自分の責任である。彼にも迷惑をかけてしまった・・・

・・・ただ、・・・



ただ・・・とてつもなくむかついた日だった。

## 第12録　ぬら組撲滅協定成立（後書き）

### 次回予告

享助「血とか駄目だから、・・・戦いとか無理。・・・医者 of 神経とかって狂ってのか？」

ニーゲル「そういう汚い言葉づかいはよろしくありませんよ。この小説は家族で楽しめるファンタジーなのですから。」

ちっこいの「黙らんかあ！！このカスムシ低俗吸血変態バカーー  
ー！！！」

享助「次回、縄文のアカシ・・・・お楽しみに。」

ちっこいの「え？これ予告だったの？・・・・」

小休止録 縄文のアカシ(前書き)

じゃーーーーーー

ちっこいの『水だしっぱですよ!』

享助「……今止めようと思っていた。」

ニーゲル「別にいいじゃないですか、だしっぱがなんだってんですか?」

享助「俺もそう思う……ったぞ……お前がいちいち気にしすぎなんだ。」

ちっこいの『ちょっと、そういう考えのやつらが、この世を悪くするんですよ!』それに関かんじゃってんですか?』

ニーゲル「なにいい子ぶってんですか?……点数稼ぎですか?」

ちっこいの『おめーに言われたくねえ!』

ニーゲル「ははは……なにを言ってるのやら……」

享助「……それでは、どうぞ……」

## 小休止録 縄文のアヤカシ

### 縄文時代

放射性炭素年代にとると1万6000年前後に始まり、紀元前4世紀ごろまで続く縄文土器を指標とする時代である。

またこのころに発達した文化は縄文文化であり、後の日本の文化の下地になった。

縄文文化は主に北海道から、沖縄までの日本列島全ての地域で、発達したとみられ、共通の遺跡がみられる。ただし、北海道と沖縄は、縄文時代後に弥生時代に移行せず、北海道では、続縄文時代、沖縄では貝塚時代というものになる。

縄文時代の初期、世界では、狩猟や木の実を採取するといった新石器時代にあたるが、縄文時代では、呪術的なものや、装飾品などが製作されている。

縄文時代に多く作られたものとして土偶が存在する。主に女性をかたどった土人形だが、男性をかたどったもの、雌雄同体、雌雄不明の物も存在する。腕が故意に折られたものなどがあり、身代り人形として災難よけのお守りだったと考えられる。一番古いもので1万2000年前のものがある。

また、装飾品では、勾玉というものが約7000年前に作られ始めた。

現在もパワーストーンとして人気があり、土産屋などで販売されるのをよく目にする。

勾玉製造工場の遺跡も残っており、主に翡翠・メノウで作られた。翡翠・メノウ以外でも、純金、水晶、琥珀、ガラス、粘土などを用いた。

勾玉は、弥生時代の中期まで製作されるがその後、現代まで作られることは無くなる。

弥生時代中期以降、古代中国や朝鮮半島の国々との交流の際に輸出され大流行し、高い価値で取引されるようになる。

古来の翡翠製勾玉は、本州の特定の場所で作られたものであるため、日本全土に見られる勾玉や、大陸に渡った勾玉も全て、本州のとある地域でとれる翡翠の成分と全く同じである。

前に述べた勾玉製造工場の遺跡も、この、とある地域にのみ存在する。

生活用品としては、縄文土器が有名だが、生活用品としては使い勝手が悪く、複雑な形をしていることから、土偶などと同じく、呪術系に用いられたと思われる。

使い勝手の面で見ると、漆器というものがより生活に浸透していただろう。

漆器とは漆を何層にも重ねて塗った器の漆製品であり、約9000年前の物が北海道で発見され、世界最古のものとなっている。

器以外では、約6000年前のもので、髪をとかす櫛が発見されている。

漆製品以外では、籐で編んだ、小物を入れるための、ポシェットな

ども作成されており、この頃的生活用品は実に多様なものであった。

また、この頃日本の民族宗教である神道の源が生まれる。アニミズムとよばれ、自然を崇拜するため、絶対的な神と呼ばれるものはこれには存在しない。

現在はこれを縄文神道、古神道などというが、現在の日本人が感謝の気持ちや協調などを尊重するようになったもとでもある。

世界の代表的な古代文明、エジプト、メソポタミア、インダス、黄河の4大文明が生まれるのは、約5000年前。これをはるかにさかのぼる時代に狩猟や木の実を採取するだけの原始的な生活ではなく、かなり高度な文明を持った地域が存在するのは類を見ない。

視点：享助

「おれはこつという学術的なのを求めているわけじゃないんだけどなあ……」

学校のパソコンで縄文時代を調べてみる。ちつこいの曰く、ヤマタノオロチは縄文の妖怪なんだそうです。

だが、・・・さつきから別に知りたくない情報ばかりで困る。  
ヤマタノオロチについて知りたいんだよね・・・  
もちろんヤマタノオロチでとくに調べたが、大した情報じゃな  
った。というか文献もそんなないしねえ。

「はあ〜つかれた・・・寝たい。」  
パソコンを閉じて家に帰ろうとする。放課後に調べ物するんじゃない  
かったなあ。

くだらだら調べてしまったせいも、もうだいぶ暗い。

暗いといっても、空が暗いだけで、辺りは昼のように明るい。

田舎じゃないからね、一応東京だからね・・・

コンビニなどの明かりは尋常なく明るい。それが何軒も並んでいる  
と、明るさ倍増である。

しばらく歩くと、ゴミをあさるカラスの群れに出会う。

生ごみをその辺に捨てた馬鹿のせいかな？あれはニオイがやばいぞ。

そんなことを考えながら、カラスの群れをスル　して通り過ぎる。  
通りすぎるときにカラスがこっちを見てくる。

カラスって意外とでかいんだよね。・・・こっち見るなあ！！・・・







ところで、自然を崇拜していた縄文人でも、ただ一つ恐れていたものがあつた。

それは自然の脅威、いつも恵みを与えてくれている自然も時には自分たちを襲う化け物へと変貌する。それはいかに人間が無力でちっぽけな存在を思い知らしめ、絶望と恐怖を与え人を戒めるものだった。

それを人は、山のオオロチと呼んだ。

それは自然を畏れるが故に生まれた妖怪。大自然に巣くう脅威。それこそヤマタノオロチである。

死、絶望、無、これら自然の負の要素の化身がヤマタノオロチであつたのだ。

いかに文明が発達していようと、どんなに人間が優れていようと自然には勝てない。

人は自然と協調して生きていくべきである。と、この太古の昔に彼らは無意識に学び、

そして現在までそれを無意識に実行してきた。しかし……今はどうだろう？

先人の苦勞を踏みにじり、精神は枯れはて、感謝の気持ちを忘れた日本人は果たしてどうなるのだろうか？

ひたひたと自然の脅威は迫り来ている……。

もう残りの時間は少ない。

小休止録 縄文のアヤカシ（後書き）

どうも作者です。

漆器は英語でJapanと言つらしいですね。

というか、今回の話つまんないっすねえ。すみません。

第13録 血液とともに去りぬ（前書き）

いつものように駄文ですが、

四国編本格的に入ります。

楽しんでいただけたら幸いです。

### 第13録 血液とともに去りぬ

とある病院・・・

「鳥居さん！！元気かね！？元気だろーね？」

「清継くん！？みんな！！！」

ベットで横になっている少女に友達と思われる学生が訪れる。

この少女は、夜中に妖怪に襲われ生死の境をさまよったのである。無論そのことを知っているのは、学生にまぎれている、ぬら組若頭とその側近ぐらいである。ある一人の男を除けば。

「ぱっぱらぱっぱらん！！見たまえ！！千羽鶴・・・は一日で無理だから165羽鶴だ！！！」

「わっ・・・すごい！！！」

「ま、数は問題じゃない。込めた思いが重要なのだ！！だから君はものすごく早く治る！！！」

「ありがとう・・・私も・・・そう思う、私千羽鶴に助けられた気がするもの。」

微笑みながらそう呟く少女。

彼女を死から救ったのは千羽という土地神だった。

千羽鶴、それは人の思いの結晶である。

「袖もぎが……やられたと……?」

一人の青年が携帯に送られてきたある男のメールで眉をひそめ不機嫌な顔になる。

所変わってここは巨大なビル。

その一室で男が二人……。

「総大将もいないのに……ずいぶん手際がいいな、……あの孫か?」

「玉章！！………天下を取る器は、アンター人ぜよ……」

「………」

「証明してやるつか……？ 命令しろよ……【奴の首差し出せ】  
つてね」

「だからな いぬが……」

玉章の言葉をさえぎり舌の長い男が、続ける。

「だってよ！！生意気なんだよあいつらは！！ 奴良リクオと玉章  
の絶対的【差】をみせてやらんと。」

そついうと犬神はしつこく玉章に頼みこむ。

すると、黙っていた玉章がおもむろに口を開く。

「確かに……お前を使えば護衛もろとも瞬殺だろうが……」

「……お前の本気は見たくない、……きたないのだ。」



視点：享助

「……まさかもうこんなに話が進んでは思わなかったな・  
」

玉章に袖もぎがやられたことをメールで伝えておく。……袖もぎが倒された所を見ていないのでやられたのかどうかは知らないが、呪いをかけられたトリイさんがもう大丈夫ということはぬら組にやられたのだろう。

それにしても……病院でのリクオの顔……見ものだったな、自分のせいでクラスメイトを危険な目に巻き込んでしまったんだからな。

それは、ショックだったろうな。あの顔を見られただけですでにリクオに対する鬱憤がはれ満足してしまったので、とてつもなく気分が良い。

今日はぐっすり眠れそうだ。

## 次の日

なんだかリクオの護衛が学校の様子を監視している。

とうかそれで隠れているつもりなのだろうか……丸見えなんだけど……

ねえ誰も見えないの？ねえ？……ねえ……

「……アホみたいにきよろきよろしてないでさっさと教室に言ったらどうですか……」

蚊の状態で、腕にとまっているニージェルが生意気な口を叩く。だが機嫌が良いのでそんなに気にならない。

まあ、ようは気もちようで人は変わるってことだね……

つまらない授業を受けて、お昼休みに入る。

今日は売店で何買おうかなあ……………

「享助君!!! いるかああああ!!!」

そう叫びながら、我がクラスに入ってくる清継。

「今日、役員選挙演説があるんだが、君に報告するのを忘れていた  
!!!!」

それでいきなりなんだが、昼休みに仕込みを手伝ってくれ!

「!!!」

おいおいおいおい!!! なんて報告し忘れてんだよ!!!

つていうか、昼休みに仕込みツて……………あつ、思い出した!!! こいつ、ありえないほど派手な選挙演説をするんだつた……………

あんまり関わんないようにしてたんだが……………この行事だけは阻止するべきだったな……………日常が忙しすぎて原作忘れてきちまつたな……………このあとどうなんだつけ……………

昼飯は……………あきらめるか……………

昼休み中にスクリーンやライトなどを設置する。とりあえず清次の演説内容を聞いてみる。

学芸会じゃないんだから……………なんなんだよ……………無駄にこつてるなあ……………

しばらくすると、鐘が鳴りぞろぞろと集まってくる生徒達。とりあえず裏方なので、体育準備室でその様子を見ている。

「生徒会演説って、なんか楽しそうですねえ・・・」

ぶんぶんと俺の周りを飛びながらニーゲルは、はしゃぐ。

おい、演説なんて糞がつくほど面白くないもんだぞ。

尻は痛くなるし、眠くはなるし・・・まあ準備室にいれば尻も痛くならないし、眠れるからいいけどね・・・

がちやり

「あれ？・・・享助君どうしたんっすか？・・・」

ドアを開けると島次郎・・・だめだ・・・この名前は・・・くっ・・・

島が入ってくる。ニーゲルがしゃべってるときじゃなくてセーフだったな。

「裏方だからここで待機・・・らしい・・・」

島とそんなどうでもいい会話をしていると、おもむろに島が着ぐるみを着始める。

なんでも、妖怪役の島を、陰陽師役の清継がやっつけるというシナリオらしい。

役員選挙なめ腐ってるな……おもしろいから良いけど。

準備室から体育館の様子をうかがう。

どうやら清継の演説が始まったようだ。

「スクリーンにご注目ください……」

一斉にスクリーンに生徒たちが目を向ける。さっきまでと完全にノリが違う。

眠そうにしていた生徒も目を見開いている。

『マドモアゼル      ジュテーム』

ふざけてるな。おもしろいからいいけど……後で先生に怒られるかもな……

「き、清継くんだー！ー！ー！」

生徒たちが一斉に叫ぶ。結構清継って有名人なんだよね……変人だからか？

『そーです、清継です。』

「映像なのに返事したぞ……！」

『どうも、全校生徒の諸君！演説は時間内であればどう使ってもか

まわれないといわれたのでね……やる気すぎてこつこつ演出を思い  
ついでしまったってわけさ。』

思いつくのもすごいが、実行する方がもっとすごいよ。なんなん  
でしょうね。……この人……

『僕が生徒会長に当選した暁にはこーだ、

君らの願いを何でもかなえてやろう！……さあ言いたまえ！』

なんでもって、そういうのは教師陣とか、PTAと相談しないとい  
けないのでは？……

「え……って言われても……」

案の定、生徒達は困惑している。そうだよな……いきなり言われ  
てもね……

「ハイハイ 学校指定のかばんの自由化……もしくはブランド品  
にしてください……い……」

清十字団のメンバー、トリマキコンビの一人、巻さんがスクリーン  
に向かって声をあげる。

『ウイームツシュ 願いをかなえよう……！当選したらね』

「うおおおおお、また返事したぞ……！」

「生中継かよ、これ……！」

一斉にさわぎだす生徒。このやり取りを見たら誰もが生中継だと思  
うだろうが・・・

これは録画された映像だ。

ただ単に、巻さんが仕込み人だったにすぎない。

つまり、ちよつとでも、予定が狂えば、全部おかしくなる。・・・

そばにいる島が時間を何度も確認している。そんなに緊張しなくて  
も・・・

『おっと、もうタイムリミットだ。』

ちよつと心もとないが・・・応援演説を君に頼んだ!!』

「あ・・・ども・・・」

めちゃくちゃ緊張してんのがこつからでもわかるくらいにカチカチ  
のリクオがステージに出てくる。

あれ?・・・そういえば、首なしがリクオに変装してたような・・・。

「えー・・・あつと・・・ボク・・・」

「奴良リクオです。」

そうリクオ（ホントは首なしのはず）が言つと、どおお、と体育館に歓声が沸く。

「オレあいつ知ってるー！！！」

「この前グラウンド草むしりしてくれた奴だろー！！！」

「いつもゴミ捨てしてくれる奴だ。」

まあ、内容は置いて・・・超人気じゃないか。

それが気に入らない奴もいるんだろうが。・・・犬神とか・・・

「喰い殺してええ やるぜよ奴良リクオオオオ！！！」

どこからともなく飛んでくる犬の首。

犬の首はステージに立つリクオの首に食いついている。

「まずいんじゃないですかねえ？」

ニーゲルがそう俺の耳元でつぶやく。

そっか、こいつあれがリクオの影武者だって知らないのか。

そうこうしているうちに、ステージ上がさわがしくなる。

周りも半分パニック状態なので何を言ってるか聞こえん。・・・

「・・・！！ちょっと！！今首が飛んだんじゃないですか！！・・・」



二ーゲルがでかい声をあげる。バカ！！

「なんか言っただすか？」

「！！・・・いや・・・なんにも！！、それよりもっそろそろ時間だろはやくいって来い！！」

「は、はいっ！！」

問答無用で島を準備室から押し出す。

「・・・おまえ・・・人がいるときはデカイ声でしゃべるんじゃないかない！！ばれるだろうが！！」

「・・・すみません・・・」

「それに心配しなくてもあれはリクオじゃないしな。」

「・・・え？・・・」

「俺の記憶が正しければありゃ首なしって奴だど……思う。」

首のない奴の首元をねらっても意味ないだろ……だから大ジヨブだ。多分。」

「ずいぶんとはっきりしないですね。」

「……うつ……」

そりゃ、半分近く原作を忘れてるような奴の知識だからな。しょうが無いだろ……

周りが騒がしいせいで何いつてるかさっぱりわからんが、おおきい犬と覚醒したリクオがどんパちやってるみたいだ。

刀だからどんパちじゃないのか？……

それにしてもすごいな……

しばらく、リクオ達が戦っているとスクリーンの映像が復活する。

『出たな妖怪！！学校で暴れおつて、そのふとどきな大妖怪！！』

このボクふんする【陰陽の美剣士】が来たからには……

悪事はもう許さんぞー！ー！ー！ー！

この映像が流れたことにより、プチパニック状態だった体育館はいくらか落ち着くことになる。

ほんとバカみたいにタイミングいいな……



うづ……痛そう……  
はやく、止めて……ほんと痛いから……

「………血……チ……チイ……」

え？……振り返ると、いつの間にか人型になっているニージェル。  
あれ、………なんか目が怖いな……血走っている……

「おい……大丈夫か……？……」

「血………もったいない……あんなに……」

おいおい……聞こえてないのか……怖！！……全身から負の才

ーラが・・・

「全部なめとって飲みつくしてやるつづつづつ!!!」

そういうとステージへ行こうとするニーゲル。

おいおいおい・・・今はやめとけ・・・行くなああ!!!

羽交い締めをかけて、行かせないようにするが・・・いかんせん虫けらのくせに力が強い。

「・・・はなせえ・・・はなさんかああ!!!」

「やめろって!!!おい!!!蚊取り線香で焼き殺すぞオオ!!!」

「あなたに、私の高尚な趣味を邪魔する権限はなあああい!!!」

まずい・・・このままだとホントにまずい・・・

ちらりと、体育館の様子をつかがう・・・みんなステージに気を取られているようだ。

しょうがないな・・・

すると、爬虫類の物の様な長いしっぽを出して、ニーゲルを捕獲。そのままずると引っ張っていく・・・

ぎゃあぎゃあとさわぐニーゲルの口を昼休みの準備の時に使ったガムテープをつかってふさぐ。

ついでに、腕と脚もガムテープで縛りまくる。

はあ・・・めんどくせえ・・・

「・・・んぐう!!んん - -!!!!んん!!」

血のことしか頭にないのかなおも暴れまくるニーゲル。

ふふふふ・・・こんな時のために、準備しておいてよかった・・・

ポケットから1つの蚊取り線香と100円ライターを取り出す。

何でこんなものを準備したのかって?・・・それは今日の朝まで

さかのぼる・・・

朝

「いっつてくる。」

『いつてらしゃーい・・・』

「ちょっと待ってください！！あなたは今から学校ですね!？」

「おい、虫けら・・・いまさら何を言っただ・・・?・・・」

「つれてきなさい!！」

「はあ?なんでだ?」

「気付いてしまったのですよ・・・蚊がもつとも怪しまれずにおなかいっぱいおいしい血をのめる場所に!！」

「それとこれとどんな関係があるんだ・・・」

「学校ですよ!!若い人間どもが勉学にいそしみ!体を動かし!そして学友と語らう!！」

そんな忙しい場所では自分の体の隅にひつつく小さき者に気付きに  
くくなるのです!！」

「いやだね・・・面倒事起こされたらたまったもんじゃない。何か俺にメリットがあるなら考えなくもないがな・・・」

「うぐう・・・な、なら・・・この家にいるゴキブリを根絶やしにしてやりましょう!！」

「……………よしのつた……………」

『のっちゃうんですか？……………そんなんでいいんですか!？』

「そのかわり絶対に面倒事は起こすなよ……………もしもの時に殺虫スプレーがあるといいんだがな……………」

「ぶ！物騒な!……………何も起こしませんよ!……………」

「……………信用できんな……………」

『おろちさま、おろちさま……………』

「なんだ、どうしたちっこいの……………」

『スプレーじゃなくてこんなのならありますよ……………』



というわけだ・・・  
蚊取り線香をみると驚いた顔をして、逃げようともがくニーゲル。  
馬鹿め、・・・虫けらが・・・

「んんん!!!ふむぐううう!!!」

そんなに蚊取り線香ってやなのか？恐怖で顔が真っ青だぞ・・・  
かちりと100円ライターをつけて、蚊取り線香に火をつける。  
すると煙をゆらゆらと出しながら、独特のにおいが出てくる。

それを、ニーゲルの顔のすぐそばに置く。

「んん!!!くうう!!!むぐううう!!!」

顔をそむけるニーゲル・・・おいおい・・・それじゃつまらん・・・  
こっちは、おまえに血を吸われて気絶までさせられたんだ・・・それ  
れ相応の仕返しをさせてもらうぞ。

ポケットから何個か蚊取り線香を出し、火をつけてニーゲルの周り  
におく。下手に暴れると引火するってレベルで近くにおく。

四方八方を蚊取り線香で囲まれたニールゲルはもう何もできない。  
はん、ざまーみろい。

「つつ・・・！んんんっ！！んんっ！！ふんん！んん・・・んー  
ー！！！」  
本格的に煙が出てくる。

「つつづく・・・うっく・・・うっく・・・」

半泣き状態だが、そのままほっつって体育館の様子を見に行く。

「ボクにまかせれば万事OK!!!生徒会長には演出力!!!企画力!!!そして実行力の

この清継に清き一票を————!!!」

ステージに立つ清継がそう言って演説をしめる。

一瞬間があるが、

清継へ体育館を揺らすような喝采が送られる。

どうやら成功のようだな。よかったよかった・・・

しばらくして、演説会は終わり、生徒達は教室へ戻る。







放課後

「あああああああああああ！！！！あいつのこと忘れてた！！！！」  
そう、蚊取り線香と一緒にほおっておいたニーゲルを忘れていた。

気づいてから少しして、ニーゲルのもとに戻る。  
いやあ忘れてた忘れてた……

まだ煙の出ている蚊取り線香と、人型のニーゲルをみつける。  
暴れるのに疲れたのか、おとなしくしているニーゲル。  
とりあえず、いまだに煙を出している蚊取り線香を消す。

「悪い、悪い、お前のごと忘れてた……」

「……………」

返事はない。ふてくされているのだろうか？

「大丈夫か？・・・ちよつとやりすぎたか？・・・」  
「そういいながら、彼女を縛っていたガムテープをはずそうとする。  
ぐたり、としたまま動かないでいるがホントにやりすぎだったかな？

顔を見ると顔色も悪い。

ガムテープを全て取って、もう一度声をかける。

「おい、そろそろ起きろ、もお帰るぞ。・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それでも返事はない。

「・・・・・・・・おい・・・・・・・・だいじょぶか？・・・」

ほづを軽くぺちぺちと叩くがそれでも反応はない。

この辺からやつと違和感に気付く。

あれ？・・・これってマジでやばいのか？・・・





### 第13録 血液とともに去りぬ（後書き）

蚊取り線香は燃え尽きるまでに7時間かかるそうです。

これは日本人の平均睡眠時間なんだとか。

今日のお昼テレビでやってみました。

## 第14録 完全犯罪（前書き）

どうもです。

よくよく見てみると・・・

この小説つてろくに原作キャラと主人公が関わってる描写がないです  
すね。

今回は完全に原作に関係ない話です。

## 第14録 完全犯罪

視点：享助

現在進行形で困っている。

どうせ死ぬなら、虫の状態で死んでくれりゃあ楽だったのに……人型の状態で死なれると、なんか気分悪い。

人殺した後ってこんな気持ちになるのだろうか？……いやいやいや、これは事故だ。

それにホントに人を殺したらこんなに落ち着いていられるわけがない。

現在は妖怪だかなんだかになってしまったが、元一般人だったわけ……一般感情くらいは持ち合わせている。

こいつは蚊なんだという気持ちがあるからか、リアルな人形が横たわってるぐらいの感じだ。見た目も別に血が出ているわけじゃない……

ただ、小さい虫の場合ほおっておいてもいいのだが……

人型だとほおっておくわけにもいかない。それに現在の警察はだてじゃない。

最新テクノロジーを駆使して、犯人をあぶりだそうとするはずだ。そうなたらとてつもなくまずい。あれ、でも入れられるとしても少年院か？

でもそれでもなんかヤダ。こんなことで世間一般からはぶられるなんて耐えられない。

ニールには悪いが、このことはなかったことにしてもらおうぞ……

数時間後、学校にひと気はなくなり、職員室に明かりがつくだけとなった。

よし、これより完全犯罪ミッション1を始める！！

ケータイ電話でちっこいのを呼び出す。

「もしもし……ちっこいのか？……」

『あ、オロ子様ですか！！いったい何してんですか？早く帰ってきてくださいよ……』

「今近くに大家は居るか？……」

『え……いませんけど……？』

よし、．．あの大家はなにかと感が良いから、話を聞かれるのはまずい。

「．．．なら、でえええつかいふくろを何枚も持ってこい。それとあればスコップも、無ければ来る途中にどっかで調達して来い。」

『．．．．え？．．．．』

「いいか、こっそりばれないように学校の門の前まで来い。そこで待っている。」

そこまで言うと、一方的に電話を切る。

真剣な感じで言えば単純な奴だからすぐに飛んでくるだろう。

にしても、蚊とはいえ仮にも妖怪なんだろう．．．蚊取り線香の煙で死んでしまうなんて思わないだろ、

死体を見ながらそんな事を思う。というかそう思わないと罪悪感で押しつぶされそうなんだよっ！！

しばらくして、子供に化けているちっこいのがやってくる。

『いや〜いきなりどうしたんですか・・・スコップないからわざわざ買ったよ。』

(俺にとっての)事態の深刻さを理解していないちっこいの・・・  
・・・まあ死体見せればこいつもどういことか理解するだろう。  
・・・

『ぎゃあああああ!!!むぐっつっつっつ』

ば、バカなのか、死体を見たたん叫ぶとか・・・  
叫ぶちっこいのの口を押さえながら小さい声で怒鳴る。

「バカ!!!騒ぐな!!!ばれたら全部台無しだ!!!」

『・・・うはあ、・・・こっこここ、これって・・・あああ、あ  
いつですよねえ。』

「そーだ、あいつだ、なんだかんだあって、蚊取り線香を使ったら





ミッション2はこれで完了だろう。

「よし、そしたら、この裏庭に穴を掘って埋めるんだ。俺たちは一応妖怪だからそんなに時間はかからんだろう・・・」

『そつつすねえ!!はやく終わらせてラーメン喰いに行きましょう  
』』

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・ああ・・・」

やっぱりこういう所が、元人間と純粹な妖怪の違いか・・・  
俺は2、3日何も喰えそうにないぞ、・・・

数時間かけてふっかい穴を掘る。

雨が降ったり強い風が降ったりして死体が土から出てくるなんてことはあってはならない。

まあ、これだけ掘れば俺が卒業するまでは大丈夫だろう。

死体を投げ入れ土をかぶせていく。すると、ちっこいのが口を開く。

『っていかおいら的には、こいつのせいで出番が減っちゃて……ある意味好都合でしたよ。』

「……そうか……まあ、蚊取り線香で死ぬ妖怪なんて妖怪の風上にも置けないよな！」

『そつつすよ！そつつすよ！だからおいらたちは全く悪が無いんですよ！……！』

ひとしきり盛り上がり、死体に土をかぶせ終わる。ミッション3完了。

荷物を持って直ちにこの場から逃げればミッションコンプリートだ。

「そこまでです!!!!!!」

まずい!!見られたか!?これでは今までの苦勞が水の泡だ。  
声のした方を見る。

そこにいたのは……

「ばっばばばば、ばかな……!!!!ありえない……」

『!!!!よみがえったとでもいうのか!?!?!』

「バカはあなた方です。私ほどのものがキンチョーごときで死ぬとでも?」

『じゃあさっきの死体はなんだったんだ!?!』

ちっこいのがそう叫ぶと、にやりと笑うニーゲル。

「ククク……あれは私の力によって、私になり済ましていたボウフラ達ですよ。」

こここの裏にある、噴水の水たまりによって際限なく増えたボウフラ

を貴方達はひっしこいて埋めたわけですよ。」

つまりこいつは俺をはめたということか。ふざけやがって……。証拠を隠滅しようとした自分の事は棚に上げているが関係はない。もうこつなつたらこいつをこの世から永久的に消滅させるしかない。

「おい！ちつこいの、かまわん！！殺してしまえ！！殺せたら3週間ラーメンだ！！」

『らああああああああああああめえええええええええええんんん！！！！』

そうちつこいが叫ぶと畏れを発動させたのか、体の大きさが何倍にも膨れ上がる！！

みためのグロさも数倍アップだ！！ってゆうか強そうだな……。そんな能力があんなら教えるよ！！！！

『ワレワサイキヨウナリ……。コウナツタラ……。モウワレヲ、トメラレヌ……。シネエエエエ！！！！！！』

おいおいおい！！口調も変わってんじゃねえか！！  
っていうかどこぞのボスみたいだな。頑張れ頑張れ！！！！

「ふふふ……。果たしてそうですかな？」

『ナニ?・・・フグウアアアアア!?!?!?!』

またもにやりと笑うニーゲル。するとちっこいのが苦しみます。ちよっ!?!?!ど、どうしたああああ!?!?!

「私の畏れ、痒みの発動に逆らえる生命体は皆無!!」

最強を名乗っていいのはこのニーゲルのみ!?!?!」

かゆみにもだえ苦しむちっこいの。

ああ、やばいな。ここは逃げるが勝ちだ・・・

「どこに行く気ですか?」

血の気がサーと引くのが自分でもわかる。

「ち、ちがうんだ!?!?!ニーゲル!!これはほんの出来心だったんだ。」

「.....」

「だって、俺は蚊がだーいすきだぞ、ニーゲルを殺そうだななんて本気なわけないじゃん！！だからな、そろそろ帰ろう、なっ！！そうしよう。」

「言い訳はそれで終わりですか？・・・」

真顔で首を傾げてくるニーゲル。・・・  
おいおいおいおい・・・まって、まで、待つんだ！！！！！！

「では・・・いただきます。」

ザクツ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・





第14録 完全犯罪（後書き）

次回はいよいよ百鬼夜行大戦に……  
……入れたらいんですけど……

第15録 unnecessaryもの(前書き)

後半ノリと勢いです。

## 第15録 不必要なもの

視点：享助

「・・・・・・・・首いてえ。・・・」

現在、玉章の演説っぽいなんかをロビーの端っこで見ている。

にしても、こいつの演説ってヒト〇ーさんみたいだな。身振り手振りを加えて、体全身で演説をする、って感じかな。

あつ、ちなみにこれ俺の中では、ほめ言葉だから。

ヒト〇ーさんって演説うまかったらしいし、似てるってことはこいつもうまい部類に入るのかな？

でも、嘘はいけないんじゃないか？・・・犬神自分で殺しておいて他人のせいにするって、ダメじゃねえ？

『こいつにこの街任せていいんですかねえ？・・・闇に染めるって言うてますけど、そしたら、ラーメンもおちおち食べないじゃないですか・・・』

「こんな、クソタレに任せたら、おちおち、血も吸えませんねえ・・・」

ちなみに、すぐそばには人型ニーゲルと、人型ちっこいのもいる。なんだかんだあって、玉章にメールで呼び出された俺にくつついて

きたためだ。

「誰がこいつらの思い通りになんてさせるかああ！誰もが進んで献血をし、それを私に献上する、そんな福祉社会を私は目指しているのだああ！！」

「それよりも子供たちが大好きなラーメンを朝昼晩喰うのを親は怒らない、いやむしろ、進んで食べさせるそんなラーメン社会のほうがいい！！」

「そんな低年齢層にしか支持されない社会なんて作っても無意味ですよオオ！！ここは、今求められている、福祉を充実させるしかありません。献血を重視してね！！」

「貴様ああ！！ムシの分際でラーメンの崇高さを分かったような口を聞くなああ！！てめえが血を確保したいだけの、偽善社会などおこ・と・わ・り・だああああ」

「なんですってえええええ！！しゃ！！謝罪と撤回を要求する！！！！」

うるせえなあ・・・まあ周りはもっとうるさいから、話の内容は聞かれてないけどね。

っていうか今頃ぬら組はどうしてるんだろっねえ。

ちよつと様子でも見させてくるか……

「おい……ニーゲル……」

「なんですか！……いまいそがしいんです！……このゴミ屑に血の素晴らしさを教えないと！……！」

『それはこつちのセリフだ！……クソたれ女！……貴様にラーメンの崇高さを叩きこんでやるわ！……』

「まあ、まあ……それよりニーゲル、おまえぬら組の様子を見てこい。」

文句を言ってくるが、なんとか頼みこむと、しぶしぶと蚊になって飛んでいくニーゲル。

なんだかんだで言うこと聞いてくれるんだよね。……なんでだろ……

いまだに憤怒した顔のちつこいのをなだめてどうやってこの場から逃げようかと思案する。

もう、四国という意味無いんだよね……袖もぎ先生のおかげでいいもの見れたし。

むしろこのあとの百鬼大戦に巻き込まれないようにはやくここから立ち去りたいんだが。

「享助君……さあ、君もこつちにきたまえ……」

いつの間にか演説を終わらせた玉章は、ナルシスト特有の笑みを浮かべてついてくるように促す。

「……………はあ……………」

何となく断れない気がしたので、曖昧な返事をしてついていく……………

「魔王……………招喚……………?」

刀を持って不思議そうな声をあげる妖怪がいる。玉章たちがそばにいるのを気付いてないみたいだ。

「……………ぐおっ!!……………」

手洗い鬼と呼ばれる幹部がその妖怪二人を取り押さえる。

さらに、おいうちをかけるように雑魚妖怪が二人に群がり取り押さえる。

んんー？牛頭丸と馬頭丸だったのかぁ……………ってそうい

えは原作でこの後ひどいことが起こるような……

刀を抜いて、二人に切りかかる玉章……

しかし、刀は二人だけではなく取り押さえていた雑魚妖怪共も切り捨てる。

「……がはっ……ワシら仲間じゃ……ねーのかい……な  
んで……ワシらも一緒に……斬るんですかい……」

うわああああ……血だ……痛い……いや痛そう……  
っていうかニーゲルいなくてよかったな。こんなに流血を見たら絶  
対に狂う。

「代わりの物などいくらでもいる……強い奴しかいらぬ……  
君らはコマなんだから……」

ひどい奴だね。友達だと思ってた奴から嫌われてるって知った時  
みたいな感じか……

そういう奴大っきらいだ。まあ、この世界に友達がいないからそう  
いう気持ちには多分なんだろうけど……

自分で言ってる悲しくなるな・・・なんなの、いじめか？いじめなのか？

地球ぐるみで俺を省く気なんだろ・・・はん、いいさ・・・さみしくなんか・・・

さみしくなんかねえぞ！！（注：彼はこの世界に来てから被害妄想気味です。）

しばらく物思いにふけていると、ガシャン！！と大きな音を立てて鴉天狗が突入してくる。

マズイ・・・顔見られないようにこの場から立ち去るかな・・・

何やらもめているようだが、とりあえず部屋から出る。

よかった・・・気付かれなかった・・・



視点：ニーゲル

「俺が同じ目に会わさなきや！！血がおさまらねえんだ！！」

ぬら組本家に到着してすぐ、身長の高い男がそう叫んでいるのが耳に入る。

血がおさまらない？・・・ならば私が吸ってあげましょう・・・  
そうしましょう！！

「そのおさまらない血、おさめて差し上げましょうか？」  
享助さんに余計なことはすると言われていたが、これは余計なことではない。  
だから、私は悪くない。

「何奴！！？」

「誰だ！！！！」

そばにいる妖怪が一斉にこちらを向く。



まあ、私の畏れがあれば何の問題も無いんですがね・・・

「くあああああ！！！！」

「猩影くん！！！！！！」

若頭の少年が心配そうな声を上げる。

「貴様！！猩影になにをした！！！」

この男猩影というのかあ・・・にしてもobserver・・・つまり外野の妖怪がうるさい。

「私の発動した痒みに苦しんでいるんですよ。私は痒みを自在に操れますからねえ・・・」

「ふざけええええるなああああ！！！！！」

そういうと、猩影と呼ばれた大男が私に切りかかる。

バカな！！！！痒みをこらえただと？信じられない！！！！っていうかうわああああ・・・

ぎしゅしゅしゅ

「・・・・・・・・ぶくぶく・・・・・・・・」

全く予想外だったのでもろに攻撃を食らってしまっ  
ああああ！！血がああ・・・私の血がああ・・・  
自分の体から流れる血を見て半分パニックになる。  
傷は深くないようだが・・・やってくれたな大男め！！！！

ちょうどその時、何か起こったのか騒がしくなる・・・  
誰かがけがをして帰ってきたんだとか・・・  
そんでもって、ちゃっかり私の事を確保して逃げられないようにす  
る、ぬら組の妖怪・・・  
ほとんどの妖怪は騒ぎのあった方へ向かっていく。

「詳しく話しを聞かせてもらおうか・・・」

私をつかまえた張本人である首のない妖怪・・・どっかで見たよ  
うな・・・  
どこでしたっけ？・・・  
そんなことを考えていると、首のない妖怪は紐を操って私を縛りあ  
げる。  
これは・・・まずいのか・・・まえもこんな状況があったような・・・  
さすがに二度目になったら享助さんに説教されるかもしれない・・・

「私は四国の妖怪ではないのでこのような不当な扱いを受ける義務はない。私が言いたいのはこれだけですな。」

このまま蚊になって逃げてもいいのだが、さっきの出血の元を取らなくては。

「四国の妖怪でなければ何をしに来た!!誰に頼まれたんだ!!・・・うつ・・・か、かゆいつ!!・・・」

痒みによってもだえる首のない妖怪、そのはずみで、ひもが緩む。私は学習するのです。どこかの馬鹿な脇役と違ってねえ!!

「・・・斬られたお返しに貴方の血をもらいます。」

「・・・なっ!!!がああ!!」

首が無いので腕に食いつき、血をすする。

うん、なかなかの味だ。

とりあえず貧血の一手前ぐらいまででやめてあげる。私はむやみに殺さないのだ。

また、こいつには血を作ってもらわないと・・・

ああなんというエコ生活・・・殺さず再利用。なんと素晴らしいのだろうか。

こつなったらついでだ。そのへんの下っ端妖怪達の血もいただこつ。

視点：享助

現在四国の百鬼夜行（八十八鬼夜行だっけ？）の末尾を歩いている。ニーゲルはなにやってんだ？遅すぎるだろ・・・あいつが帰ってこないせいで、逃げだすタイミングを逃してしまっ

た。  
『オロチ様〜ホントに参加するんですかあ？帰りましょつよお〜』

「ああ・・・後五分でニーゲルが戻らなかつたらとんずらするぞ・・・」

にしても、ホントにどうしよう今なら逃げられるんだが・・・逃げ  
ちゃおっかな・・・

・・・にげちゃお・・・

「予定変更だ、逃げるぞ!」

『え!?!...あつ...はい!?!...』

くるりと方向転換して、一番近くにあった店に入って隠れる。  
ふう・・・よかったばれなかった・・・

一息ついて、店を出ようとしますが店員と思われる女に呼び止められ  
る。

「ご主人様・・・おかえりなさいませ!?!...」

ごしゅじんさまあ?・・・なんなのこいつ馬鹿なの?

明らかにふざけた接客にむかっと、したので振り向いてしまった・・・

.....

やばいやばいやばいやばい・・・おかしい人だ、

これはいわゆるメイドなんかの、ぼったくりの店に入ってしまったのか？

入る前に店の雰囲気をもっと確認するべきだったか！！・・・

すぐに出ようとするが、半分無理やりに席に座らせられてしまった。

おかしいだろ！！こっちは出ようとしてんだよ！！

周りを見渡すと明らかに社会知識の欠如したと思われる店員と、二トや引きこもりといった、社会のお荷物、社会のゴミといった感じのオーラを出す客で埋まっている。

バカみたいにどぎつい色の店内のせいで気分悪い。

ああああマジではやく出たい・・・こんな奴らと、こんなところに1秒でもいること自体が不快極まりない。

「ご主人様、メニューをお持ちしました。」

そう言いながら、店員がメニューを渡してくる・・・

まあ、なんか飲みもん頼んで早々に立ち去るか。・・・



「……………」

「た……高い!!」

「一番安くて、コーヒー一杯3000円だ?!?……………」  
「おかしい……ふざけてんのか?……………」

『オロチ様……おいらちょっとトイレ行ってきますねえ……………』

「……………え?……………おおい!!……………」

「そそくさと、席を立つちっこの……この店にトイレなんてあるのか?」

「ご主人様……………ご注文はお決まりですか?」

「あ……この……………この「コーヒー」で……………」

「すみません、ご主人様・・・どれでしょう?・・・」

「はあ!?!?・・・こいつは目が悪いのか?明らかに一番やっすいコーヒを指差して言ってるだろうが。」

「えーと・・・だからこれ・・・」

「これでは分かりません、ちゃんと名前と言わないとだめですよ!」

・・・キモっ!!!!!!!!!!・・・

「このむずがゆい商品名を言わなきゃなんねいのかい?」

「・・・ええと・・・めいど、らぶらぶハートコーヒー(棒読み)ください。」

「かしこまりました!!メイドらぶらぶハートコーヒーですね!!」

「おいおいおい!!デカイ声で言わなくても分かるよ!!!!」

「さっさと、コーヒー持ってこい。」

「っていうか俺コーヒー嫌いなんだよね・・・嫌いなものに3000円って・・・最悪だ・・・」



玉章！！世界を闇に沈めた暁には、こんな下らない店は即刻閉店に  
しろ！！

こんな下らない店はこの世界に必要な！！！！

## 第15録 不必要なもの(後書き)

作者の住んでいる田舎では、メイド喫茶なんて見たことが無いので、全部イメージで描かせていただきました。

値段設定は、遊戯王5Dsにでてくるブルーアイズマウンテンを参考に……

商品名なんか、完全ノリですね……

散々バカにして書いてますが、メイド喫茶好きの人にはすみません……。

## 第16話 主人公おろし（前書き）

ホントはおととい投稿するはずだったんですけど、  
データが切れてやる気がうせたので、ちょっと間が空きましたね。  
いつも低クオリティーなのに、やる気がうせたおかげでいつも以上  
にカス文ですね。

## 第16話 主人公おろし

視点：冥土<sup>メイド</sup>さん

現在、珍しいご主人様をおもてなししています!!

すらりと長身の若い男性のご主人様です。整った顔立ちで鋭い眼が印象的です。

なんだか、他のご主人様と違ってノリが悪いんですが、・・・なん  
ででしょうねえ？

「・・・なかなか、イケメンじゃない?・・・」

「あんまり見かけませんですけど、初めての方でしょうか?」

ほとんどのご主人様が何度もおこしになっている常連さんなので、  
新鮮味が無かったのですが、初めての方が来るのは珍しいので、我  
々メイド達も興味津津です。

そんな中、なんとワタシが接客役になることができたのです!!  
ちよっとわくわくしますね、どんな方なのでしょう?・・・

「ご主人様！！ゲームをしましょう！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ルールは簡単！！今から用意する10枚のクッキーの中に激辛クッキーが1枚だけ入っています！！  
ワタシとご主人様でそれを交互に食べていき、激辛クッキーを食べたほうが負けです！！」

ご主人様が勝った場合、メイドと一緒に写真をとることができますよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・しない・・・・・・・・」

っそんな！！喰いつきが悪い！？

初めてだからでしょうか？それともワタシの接客が悪かったのでしょうか？



でもこのままではメイド喫茶を楽しんでもらえません!! もっと積極的に行かなければ!!

「え〜そんなこと言わないで〜やりましょっよ、やりましょっよ!」  
「ご主人様あ〜!!」

視点：ニーゲル

「ぎゃあああああああ」

残った妖怪たちの血も吸い終わる。これで任務完了・・・

こんなにたくさんのお血を飲んだのは何年ぶりでしょう？・・・  
所詮、蚊の状態だとたいして多くお血を吸えないものでして、やはり  
人型の状態で飲んだ時の満足感とはまりませんねえ・・・

「カカカ！にしても、このままぬら組のすべての妖怪のお血を吸い  
つくすって言うのも悪くないですねえ・・・」

冗談ではなく、けっこう本気だったりする。

「そこまでだぜ・・・」

いつの間に来ていたのか、一人の男が出てくる。

あれ？・・・どこかで見たような・・・っあ！！思い出した！！  
たしか応援演説の時にステージで戦っていた男だ。とすると、さっ  
きの若頭少年と同一人物ですか！？

前に見た時にも思いましたけど・・・変わりすぎじゃないですかね  
え？

「すごい頭ですね・・・私は本気ですよ？・・・なんたって  
私はこの世のすべての血液をとつともなく愛しているのですから」

「……ふっ……」

ふってなんだふって!!

血を馬鹿にした態度をとった男を睨みつけようとするが、するりとすぐ目の前まで間をつめてきた男に驚愕する。

ってっわあああ!! ちょ!! ストップ!! ストップ!!

「……平和的に解決しようじゃありませんか……そうです。そうしましよ!!」

首筋に刀が当てられている。確か前にもこんなようなことが……ない!! これは私が初めて直面した事態だ。決して私が学習していないわけではない。断じてなああい!!

「お前は四国の妖怪じゃねえのか?」

なんども否定している質問をされる。

話を聞いていないのでしょうか? もしくは忘れているのでしょうか? ……

「だから四国じゃねえってさっきから言ってるんですがね? そもそもそつちから先に手を出してきたんでしょうが、私は過剰防衛をしたにすぎません。私はただ献血用の血を集めているのにすぎないのですよ。いわばこれは社会貢献!! 私は何も悪くなあい!!」

そういうとパツと蚊に戻り暗闇の中へと飛び去る。  
逃げる間に、若頭の男に忠告しておく。

「……確か四国には、夜雀とかいう奴がいましたねえ……  
そいつに気をつけなさい……」

何となく、だまって逃げるのは癪に障るので、余裕の感じを出すために前に享助さんから聞いたことのある四国妖怪の名前を出す。実際どんな妖怪かも知りませんがね……

・ なんか一番厄介な奴とか言ってたような気がしたんですけどねえ……

「……ちよっ!!!!どういうことだ!!!!……おい!!!!まで!!  
!……」

待てと言われて待つ人はいないでしょう。

やはり少しあの男の血も吸っておくべきでしたかねえ？

しばらく夜空を飛んでいると、どこかの人気料理店に並ぶ人たちの様な列を作った妖怪軍団が見えてくる。  
ここから見る限り、享助さんはいなさそうですね。まあ、その辺でうろつろしてることでしょ・・・

どこにいるんでしょうねえ？・・・

視点…ちっこの

『はあ、オロチ様には悪いんですけどあんなところにいるくらいだったらインスタントラーメンを出してくるラーメン屋のほぅが10倍マシですねえ。』

そんなくだらないことを考えながら、オロチ様が店から出てくるのを待つ。

はやく出てこないかなあ……

「おめー、そんなところで何してんだ？……はやくしねえと玉章様に置いていかれるぞお。」

とつくに四国の妖怪たちは行ったのかと思いきや、まだちらほらと四国妖怪が残っているようだ。

これはまずい……

「はやくすんべ、はやくしねえと百鬼大戦がはじまっちゃうぞお……

」

『いやあ、おいらはそういっくんじゃなくてえ……』

「ほらほら、はやくしろお」

ぐいぐいと、四国の百鬼夜行のほぅへ連れて行かれる。

ちよっ！……たすけてええオロチ様ああああ！……

視点：享助

「やりましょうよ、やりましょうよ・・・」

さっきから何度もそう言ってくる店員。

もしかして、これってやるって言わないといつまでも帰れない感じなのか？

「・・・」

「めっいちや〜ん！！ボクちゃんとやろうよおお」

変な格好をした社会的なゴミが店員に向かってそう喚く。  
気持ち悪・・・

「今はダメですよ〜このご主人様にゲームをしてもらおうんですから  
!」

キモデブのおっさんは、そう言われるとしゅんとして、「こっちをに  
らんでくる。

睨まれる筋合いはないんだがなあ。っていつかさつさと俺の視界か  
ら消えてくれ。汚物を見ているようで胸糞悪い。

「ご主人様?この子では満足できませんか?なら私がお相手差し上  
げましょうか?」

別の店員がこちらに歩いてくる。

さつさとコーヒー持ってこいよ。どれだけ時間かかるの?豆から作  
ってんのか?

「うわーん!!そんなんですか?うつ...」

さつきまでさんざんゲームしろと言っていた店員がすっごくいわざと  
らしく泣く真似をする。小学生かよ、キモいなあ。...

「わーいーめいちゃんを泣かせた!...」

「ひどいぞーゲームくらいしてやれえ!」



社会のゴミ、社会の汚物、社会の・・・が一斉に俺を非難し始める。  
キモいキモいキモい・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちるちる」棒読  
み（・・）」

「・・・・・・・・え？・・・ほんですか？・・・」

「・・・・・・・・うん、うん、ほんとほんと」棒読み（・・）」

視点：冥土さん

「……………うんうんうん、やるやるやる（棒読み）……………」

やった！！やっとその気になってくれたんですね！！

「あら、残念……………」

ふん！！先輩……………このお客様は渡しませんよ？必ず私のお得意さんにするんですから！

「そのかわり俺が勝ったらこのゲームが終わった瞬間から10秒でコーヒーを持ってこい。」

「じゃあ、私が勝ちましたら、ご主人様に私たちと同じメイド服を着てもらいます！！」

ちよつとこのご主人様に着せたら面白そうですね。絶対勝って着させてやります！！

「……………なんで俺がそんなことしなきゃなんねえんだ？……………」

「だって勝負は公平にしなければつまらないじゃないですか？」

視点：ニーゲル

名前が無いので何と呼べいいのか分かりませんが、まあ、享助さんの金魚のフンを発見いたしました。百鬼夜行に並んでいるところをみると参戦するのでしょうか？

にしても・・・享助さんがいませんねえ・・・

「ちょっと、享助さんはどうしたんですか？」

人型になって、金魚のフンに詰め寄る。

『おめえのせいでこういう状況になってんだよ・・・』

はて・・・何のことでしょう？・・・

にしても、享助さんはどこに行ったのでしょうか？  
そここうしているうちに前方ではぬら組と接触している模様・・・  
後ろからではよく見えませんが、何かがおこってそれをきっかけに  
激しい争いが始められたようです。ここにいるのは少々危険かもし  
れないですねえ・・・

「おや？君たちは・・・享助君はどうしたんだい？・・・」

いつのまに來ていたのか私たちのそばには四国の大将。

『なんか・・・腹痛らしくて、百鬼夜行には参加できないみたいで  
すよ？・・・』

腹痛？・・・享助さんが？・・・  
なんか、四国の大将の方も呆れた顔してるような・・・

『代わりにおいらたちで頑張りますので、・・・』

「ふん、期待してるよ・・・」

そういうと、私たちから離れていく四国の大将。

おいらたちってなんですかね？私も含まれているのでしょうか？  
それになんとか嘘っぽいような……

『ふひい〜……さてと、どうやって逃げようかな。……』

「……どうでもいいんですけど、何がどうなってる  
のか説明しなさい。」

聞いたところによると、ここには享助さんはいないんだとか……  
それがどうやら私がかなか帰ってこなかったせいらしく……  
うう……すみません。

『だいたい、こんな争いに参加してもおいらには何のメリットもな  
いんだよ。享助さんも戦わなくていいって言ってたし……さっさ  
と逃げよう……』

「……そうですね……私もそれが良いと思いますよ……」

視点：享助

「だって勝負は公平にしなければつまらないじゃないですか？」

こいつは立場を分かって物を言ってるのか？

客と店員の立場関係を分かっていないのかなあ？……………

「きゃー！！勝ったら、今度は私と勝負しましょうよー」

「めいちゃ〜んがんばれー！！」

店員と客の声でうるさい。……………店員はちゃんと働けて感じだし、客は自分の席についているって感じだな。

「では……………」

店員が一枚のクッキーを食べる。からいのクえからいのクえからいのクえ……

「甘いです!!」

つち……

適当に1枚選んで口に放る。……

「……からくない……」

それを何回か繰り返して、……残りのクッキーが二枚になる。

「最後まで残ったので同時に食べましょうか……」

お互いにクッキーをとる……が、なかなか店員が食べようとしな  
いでこつちをにらんでくる。なんだ?……

「……やっぱりそつちのほうが正解な気がします……」

はあ? 訳わかんねえ……まあ実際どつちでもいいけどな、見た目  
で分かる代物でもないし。

「……じゃあ……こつちの食べればいいんじゃないですか?」

「・

そういつて、自分の持っていたクッキーを渡す。めんどくせえ、

「いいんですか!?!?」

「……はいはい……いいですよ……」

互いのクッキーを口に運ぼうとする。……が……

「やっぱりやっぱり、そっちが正解な気がします。」

はあ?ふざけんな、もういい加減めんどくさい。

店員を無視してクッキーを口に放り込む。

………これ……辛いのかな……

あんまり辛く感じないのだが、今までのと味が違うから多分これが辛いのだらう。

どうしよう。………あ!?!?!いいこと思いついた。

「………からくない……俺の勝ちだ……」

まだ食べていない店員に向かって大ウソをはく。

こう言ってしまうばわざわざ辛いのを食べるバカはいないだらう……



「じゃあ、その辛いのがクちゃんが食べてあつゲルね〜めついちゃ〜ん!〜!」

おい!〜!ばかふざけんじゃねえ!〜!社会のゴミの分際で俺の計画を邪魔すんじゃねえ!〜!

「・・・あれ辛い、これ辛いよ?」

この一言で全員の視線が俺に向く。  
なんだかとてもなく水がほしい。なんでだろうか・・・み、水・・・  
後から来るタイプだったのか・・・?

「・・・ご主人様・・・嘘はいけませんよ・・・おしおきだ〜!〜!」

「いや・・・その前に水・・・」

視点：ニーゲル

なかなか戦地を抜けられない私たち二人。

次第に戦況は一変、・・・四国の大将が自らの百鬼夜行の妖怪を殺して強大な妖気をまとい始めたのです。

ああゆう男について行くのは大変そうですねえ・・・

しばらくすると、四国の大将の前に享助さんのご学友でしたかね？その少女がなにやらほざいています。何やってんですかねえ？死にますよ。

「たんろー！！ろくそんー！！いくで・・・全式神出動やー！！！！」

そういうと果敢にも一人で立ち向かう少女、陰陽師だったんですか・  
・  
しかし、四国の大將が刀を一振り……それだけで彼女の式神は  
全て消え去ってしまったんです。……よわいんですね。

「何のつもりだ……？ん……？」

「はっ……あ……あう……あ……」

しょうがないですねえ。……

「が……体が……」

視点：ゆら

「からだがああああ！！」

うちを殺そうとした妖がいきなり苦しみだした。なんやようわからんけど・・・チャンスや・・・

「感謝しなさい。人間よ！！我が最強の力を持ってあなたを助けたのですから！！」

妖怪と間をとると不意に後ろから声を掛けられ、うちは後ろを振り返った。

後ろには女のひとが一人。見たところ人間にしか見えへんけど、妖怪なんやろうか・・・

その人を見たときたんうちにうちを襲った妖怪が怒声を上げてうちらに切りかかってくる。

「きさまああああ！！」

あかん！！よけきれへん！！・・・

ずしゃああああ！！！！

「死ぬぞお前・・・下がってるよ・・・」

うちらと妖怪の間を割って、妖怪の主が相手の妖怪に切りかかる。



あたりを探してみるがどこにもおらん、……いったいなんや  
ったんやるか……

視点：ニーゲル

『……何自分だけいいカツコしてんだよ……』

「あら？……ひがみですか？……いやですねえ……これだから  
金魚のフンは……」

『……』

「にしても、享助さんはどこ行ったんですか？」

さっきから何度も聞いているのだが、いまいち要領を得ない答えばかり……

すると一軒の店の前で、止まるちっこいさん。……

『……静かにこの店に入るから、ちょっとついてきてね……』

……?……

店の少しドアを開けると、中はすごい騒ぎです、私たちがドアの隙間から覗いていることに誰も気づいていません。  
にしてもこの店って、……

「あなた……こんな趣味の持ち主だったんですか……」

『いやいや……違うから!だからドンビキすんのやめて……』

『  
「……………」  
」

『まあいいから、よく見て…………』

言われた通りに目を凝らしてよく見る。

ん？…………まさかあれは…………享助さん？…………ですかね？…………  
…………  
にしても…………享助さんがこんな趣味の持ち主だったとは…………  
トマトから血が出てきた並に驚くべきことですね。

『…………まさか…………オロ子様…………ここまでになっているとは…………  
』

ちっこいのさんが、ちよつと哀れな声を出しているが…………  
すぐにけがれた汚物を見るかのような目になり一言…………

『イタイ…………イタイ…………』

確かに…………

「見てられませんね…………」

無言でその場を立ち去り、私たちは家へと帰りました。



視点：享助

罰ゲームにより、現在この奇々怪々な奉公人の服を着させられている。

店員からはキヤーキヤー騒がれ、お客からもなんか変な目で見られ・  
・いい加減いらついできた・・・

「すごい似合ってますよ!!・・かつらかぶって化粧すればもっと  
女の子っぽくなるんじゃないでしょうかねえ?・・・」

数分後・・・

ガキの遊ぶ、おままごと用の人形のように遊ばれた俺は、とうとう  
逃げ出した。

もういい・・・コーヒーなんていらぬ。金も払ってなんかやらねえ。・・・  
服もそのまま、かつらをかぶせられ、化粧によって、見た目もろ女のようになっている状態だが関係ない。  
トイレに行くふりをして、素早く逃げる。

外に出るとあたりはもうだいぶ白んでいる。  
人通りも今は少ないが、もし見られたらだいぶ恥ずかしい格好である。

それに、身長が高いので余計目立ってしまう。  
身長を女性並みに縮めて、人に見られない様、きよろきよろしながら、家までの道のりを急ぐ。

いつもならちよつとでつく道のりも人に見られないように注意するため何倍もかかった。

すばやく階段をのぼり部屋に入ろうとする。・・・がこういう時に限って邪魔ものが入る。

「おや？・・・あなたどちら様で？」

4号室に住む確か・・・・・・・・福田だっけ？

「え・・・ええとお・・・あの・・・お手伝いの清掃係です・・・はは・・・」

顔をひきつらせて笑いながら苦しい言い訳する。

「ほぐ、ずいぶん別嬪さんのお手伝いさんだねえ・・・」

女じゃないし、女装趣味はないから全く嬉しくないぞ。さっさと部

屋に戻って着替えたい。

「……あの……私これから手伝いがありますので……」

「ああ！！すまんすまん……」

そういつて、福田と別れ、ばれないように部屋に戻る。  
はあ……

「……あんだ誰ですか……」

『勝手に入れちゃあ困るんですけどね……』

「……え？……ああ！！俺だよ……おれ……享助だよ……」

「新手の詐欺ですかね？……うちに変態は居ませんよ？」

『もうそっち方向で生きていくことにしたんですよ？・・・身長も女性に合わせて小さくしているし・・・化粧もしているし？・・・おいらたちは止めませんよ！・・・さあ、行ってらっしゃい、そして永遠にさようなら！・・・』

ええ！・・・ちょっとまって！・・・ちがつって！・・・え？もうお前は必要ないって？・・・

・・・ひい！・・・そんなのやだあああああ

## 第16話 主人公おろし（後書き）

次回は多分、邪魅・・・

主人公が本格的に原作キャラとからみ始めるかもしれないかも  
しません。

かもがかぶってますね・・・

特別録　これまでとこれから（前書き）

作者が中学生の頃・・・

校庭の草を学校生徒全体でひっこ抜く機会があつたんですね・・・ひっこ抜いた草はある場所に集めるのですが、その集める場所に行つた時のことです。

よく知らないけど、後輩と思われる女子生徒が先生から逃げるようにこちらに向かつて歩いているのが見えたんですね。

そのあとを先生が追いかけてきたんですが、この先生の容姿がですね、眼鏡でデブなおばさんの先生だったんですよ。

この先生の授業を受けたことはなかつたんですがね、容姿がこんなに特徴のある先生ですから・・・知っていたことは知っていたんです。

するとその先生に向かってその女子生徒はこう言い放つたんです。

「くんじゃねーよデブー！」

あまりにも単刀直入過ぎて内心爆笑してたんなんですがね、先生は軽く受け流して軽いお説教をします。

『ちゃんと、草抜いたらな、（でぶ特有の声）』

その後もそこまで言うか！！というほどの暴言を吐く女子生徒。（

つまりは不良少女）

しかしそれを華麗にスル　してお説教を続ける先生。

しばらくして、それでも女子生徒が言うことを聞かないのを見た先生はあきらめて校舎に戻ろうとします。（デブ特有の歩き）

すると、その後ろ姿に向かつて、女子生徒がとんでも発言をぶちかまします。

「死ねっ！！！」

その言葉を聞くと歩いてきた（デブ特有の動き）先生がぴたりと歩を止めます。

その時、その女子生徒は怒鳴られるんだと思いましたね。だってそう皆さんも思うでしょ？

先生はこう言っただんです、

『ああ、いつかはな（デブ特有の声）』

それはそれは朗らかな顔で、……

ちよつどそれを見たのは自分だけ、一瞬吹きそつになりましたね。今では宝物の記憶です。



## 特別録 これまでとこれから

(オープニング)

ちやちやつちやちや、ちやちやつちやちやちやー

ちやちやつちやちや、ちやちやつちやちやちや！……

てけてけてけてけてけてけてけ、たららるん、ちやーん！！

くるまーにひーかーれてー、やってきたばしょはー

流血ふつーうの、地獄のーせかーいだー

やくにたたない仲間を引き連れてーやあってきたぞー原作のま  
ちへー

原作キャラに！！お・そ・わ・れて、いつかー復讐だー

こ・の・しょうせつのしゅやくはー まったくかーつやくし  
まーせんー

つーいてきたのは、子供と蚊トンボ

タカタカ、ちやららら・ちやん

自分は一体なんなのか

キャラせてい、すら分らないー

ちやんと、せつめいしましようよっ

いやいややつぱりめんどうかー

つきよえちゆうー学校ー



「ある日車にひかれた享助さんは、なぜかぬらりひよんの孫というマンガの世界に転生してしまったそうです。そして、聞いたことな……スゴク有名な妖怪になっちゃったんですねー」。

その後生活に困った享助さんは強盗と窃盗をして、お金を手に入れます。

つえ?……ちがう?……失礼しました。神社の恵みと心優しい青年のおかげで生活用品をそろえたようです。

その後、東京の浮世絵町にグリーン車に乗っていくわけです。その際になぜか余計なものまでついてきてしまったとか何とか……浮世絵町に着いた享助さん達は、嘘情報で塗り固めた証明証を作り、家など、町で生活するために準備を整えます。

享助さんは、折角マンガの世界に来たんだからということ、原作キャラを見るためだけにこんなめんどくさい事をしてきたんですね。感心します。

その後、何の因果か、旧鼠と呼ばれる妖怪と、ぬら組の妖怪の争いに巻き込まれ、正義のヒーローだと思っていた、原作主人公に半殺しにされます。

それによって、巻き込まれたどんくさい自分を棚に上げて享助さんは、主人公に復讐することを誓いました。

しかし、どのように復讐するのか、などの重要な予定を立てていなかったため、その後長きにわたり、復讐の機会がありませんでした。

しかし、……

ある者たちの登場により、一気に物語は動き出します。

四国です・・・ポンジューズが有名な四国です。ちなみに私、セ  
○ンイレブンのくじを引いたところポンジューズが当たったことが  
あります。

そのポンジューズが有名な四国が無謀にも関東一大勢力のぬら組へ  
攻めてきたのです。

そこで享助さんは、新しく仲間に加わっていた、とてつもなく優秀  
な人材を四国に送ります。

その甲斐あってか、享助さんは四国と手を組むことになりました。

しかし、当初の目的を既に失っていた享助さんは、原作に関わりや  
すくなったことをよしとせず大活躍したはずのとある人材を蚊取り  
線香によって殺そうとしました。

結果的にその無敵の使者によって痛いめにあいますが・・・

その後、四国率いる、八十八鬼夜行と、ぬら組率いる、百鬼夜行の  
衝突が起きます。

この事態に享助さんは、ワタ・・・優れた使者をぬら組に派遣し、  
もう一人の使えない下僕を、四国の軍勢に入れて、自分は悪趣味な  
お店で、だらだらと時間をむさぼりつくしました。

最終的に、四国の大将をぬら組の若頭が倒し、浮世絵町には、平和  
が戻りました。

ぬら組の若頭は、四国の大将が殺した四国の仲間たちを弔うことを  
条件に全面的に四国と和解することを決めました。

そのころ、享助さんは、とうとう自我が崩壊し、もう戻れないとこ

るまで突っ走ってしまっていました。

そこで、この世界の全知全能の神、さくーしゃによって、主人公を下され、この小説は打ち切りが決定しました。

この小説の後には、新小説、【ニーゲル〜素晴らしき旅行記〜】が書かれる予定となりました、皆さんお楽しみに！！それではアディオス〜！！」

\*\*\*

『くだんねー事でこんなに行数使うんじゃねーよ！！！！』

「全くだな、こんな下らんことを本文でするとは・・・さすがにちよつと予想外だったぞ、・・・」

「えーそうですかー、私の説明なかなかうまいと思っただんですがねー」

「ところどころねつ造があったような気もしなくもないがな・・・」

『全然駄目だな、おいらならもつとうまくできたのになー』

「というか俺は邪魅編をやるのかと思っていたんだがな、もうこのノリだと解散だろう?」

『あーこれ給料もらえんですかね?ー一応出たからその分はもらえんですかね?』

「ホント、ゴミの様な回になりつつありますよ?やめてくださいよ、今回私の出番が多いんですから、私のせいみたいになっちゃうでしょうが!」

「事実テーマのせいだろうか!」

『今回おいらたちの会話で成り立ってる話ですよ?地の文が一個もないような・・・』

「それより俺はオープニングとかいうのにビビったよ・・・曲も分らないのによくあんなもの出したな・・・」

「ああ、それはですね、一世代前の戦隊ヒーローっぽい曲をイメージして歌ってみてねハート・・・だそうですよ。」

「ちなみにこのショー説にスポンサーなんていんのか?」

『いないでしょ、ちょっと言ってみたかったんじゃないんですかねえ?』

「ちなみにこの歌、2番もあるみたいですよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『どうせこのままだとつもなく短くなってしまつとかいう下らない理由なら聞きませんよ？・・・・・・・・』

「・・・・・・・・つづつ・・私が進行役をやってるからって言いたい放題ですな。」

「この回がとつもなく下らないせいだろ、よくこんなん企画書にオーケーもらえたな？」

『まあまあ、オロチ様、俺たち先輩なわけですし、そういうのは我慢して、若いのに花持たせてやらないと・・・・・・・・いまどきの若いのは・・・・・・・・』

「あなたが言うつと無性に腹立ちますねえ？・・・・・・・・なんででしょう・・・・・・・・」

「脇役にくせに先輩ずらしてるからじゃないか？」

『ちよつと!!オロチ様!!なんですか!!裏切るんですか!?!』

「そもそも俺は、おまえと協力関係にはないぞ・・・にしても・・・お前のあらずじ最後のどうにかなんないのか?・・・」

『だって!!女装してますヤン!!変態言われてもしょうがないん  
違いまつかあ!?!』

「なぜいきなりなまる!!・・・キモいからやめろ!!」

「にしても・・・今後どうするつもりなんですか?・・・」

「なにつて・・・なにもしないよ、だらだらと一日を過すだけだ  
が?」

「いやそれダメでしょー!!ただでさえ今まで関わってこなかった  
んですから!!クレームのあらしになっちゃいますよ!!」

『こつこつ雑談の場に原作キャラの何人かでも呼べばいいんじゃない  
いですかね?』



「それは名案だ!!・・・これで本編であまりかわらなくても、ごまかせるな・・・」

「ダメですよ・・・ちゃんと関わって下さいよ、関わらないと、強制的に私たちの存在を消して、原作キャラ以外と接触できないようになりますよ?」

『・・・え?・・・』

「それでもだめなら町の人たちの存在も消して、この世界に原作キャラとあなただけになりますよ?ホントにそれでいいんですか?・・・」

「分かった、わかった・・・関わればいいんだろ?」

『是非そうしてください!!!!』

\*\*\*

「さあさあ、お呼びしましたよ、今日仕事が入っていたのは、リク才役の阿竹さんと・・・」

「ストーーーーーッップ!!!リクオでいいでしょ・・・もう言わないから・・・空気読んでくれよ?」

「ははは・・・今日来てくれたのは、原作人気アンケートの上位3名の方々です。」

「・・・おい・・・リクオのジーさんは?・・・」

「あれは阿竹さんがメイクで大人っぽく見せたのがぬらりひよんの若かりしころの姿ですよ・・・実在しない人を連れてきても無駄

でしょ？それにお年寄りをこんな馬鹿げた話につきあわすのは気が引けるので、リクオの御爺さんは呼びませんでしたよ？問題ないですよね？」

「……………うん……………」

「さあ、紹介しましょう！！一番人気のリクオさんです。今日は昼バージョンでお越しくださいました！！」

「……………ははは……………どうも……………」

「二番手は、リクオさんの側近、雪女さんです。」

「三番手は……」

「三番手は、泣く子も黙る羽衣狐さんです……」

「……………妾は……………そんなに子供をあやすのは得意ではない……………」



「では、羽衣狐さんはどうでしょうっ？」

「妾はまだ出ていないからなんとも言えんが……この役には向いていないような気もしてな……」

「おおっとー！！ここでまさかの自信ない発言です！！！」

「ああいう演技の後は、演技の後もそういう顔になってしまったな……この役をやるようになってから、友達に怖いと言われるようになってしまった……」

「イメージが壊れるんで極力、友達とかいうワードは避けてもらえますっ？」

「まあまあ、享助さん、そんなことを言うてはだめです。傷つけてしまうでしょうっ？」

「……………」

「そーですよ、傷ついてしまいます！羽衣狐さんにとっては優しいんですから。」

「おまえもか雪女……原作キャラで敵対してる奴が援護すると、……イメージが……」

「まあまあ、享助君、原作ではちゃんと演技するんだから、大ジョブだよ！！」

「……うむ……うまくできるかはわからぬが……精一杯やらせてもらうぞ。」

「だから、精一杯とか……使っと……」

「さて、そろそろお時間も迫ってまいりました！！最後に一人ずつ感想を……」

「これから、僕の出番をもっと増やしてほしいと思ったよ、夜じゃなくて昼のね……」

「今後も若の側近として頑張っていきたいです……」

「妾のようになつまらないものをよんでいただいて嬉しかった、また呼んでくれると嬉しい。」

「だから、羽衣狐さん!! あんたなんなの!?!? . . . めちゃくちゃ気を使ってんじゃないん? ホントにあの羽衣狐なの?」

『後半おいらの出番なかった!!!! もっとだせ!!!!』

「ではみなさん、本編をお楽しみに—————!!!! さようなら—————!!!!」

「. . . . . ひでえ終わりだな、おい. . . . .」

(エンディング)

あかーい血は生命のもと  
すごいぞー、すごいぞー、  
いくーらのんでもたりないな  
血液ー、血液ー、  
けんーけつ平和つくるためー  
すすんでー、すすんでー、  
かーりせんこうは排斥  
しましうー、しましうー、  
のもう、のもう  
血液パツクー  
のもう、のもう

輸血用血液

血液、血液、血液、血液ー  
なんどのんでもやめられないー







特別録　これまでとこれから（後書き）

最後の曲ですが、音程はふにくりふにくらの曲で……  
つまり鬼のパンツの歌です。

第17録 温泉卵アイス（前書き）

享助「おひさし〜」

ちっこいの『なんかキャラ変わってませんか？』

享助「そういえばさー、前回どのあたりで終わったんだっけ・・・  
覚えてないやー」

ニーゲル「案ずることはありませんよ・・・前は・・・置いといて・・・四国編が終わったのですから、前回のつながりを気にする必要はございません。」

さあ、さあ、そろそろ本番が始まりますよ。」

ちっこいの『なんか違う!!、なんか違う!!』

享助「というわけで・・・はじまりませう・・・」

追伸・・・アニメを見ている方、邪魅編はちょっと、あれですね。

この小説の邪魅編もちよつとあれです。

第17録 温泉卵アイス

しゅーしゅーしゅーしゅーしゅーしゅー

雨が降っている。

音にまぎれ、

水にまみれ、

ぬるい風と共に……

奴の名は……邪魅

視点：享助

あー、なんだかこの、二、三週間の記憶があいまいだ。

確か、クソ忌々しい格好をさせられたような・・・そのあとどうなったんだっけ・・・

っっていうか、俺って妖怪なんだよね、目立った活躍してないから忘れてる奴多数だろうけど・・・

ああーもうやだ、

かえりてーよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

現在、清十字会気探偵団、あれ？なんか違うような・・・まいつか

・・・

そのメンバーと、謎の妖怪に出会うべく海見える町へやってまいりました・・・

なぜそんなめんどくさい事になったのかといいますと・・・

ある日、妖怪ハンターと大ウソぶっこいた清継君のもとへ一通のメールが・・・

清継くん！！助けて！！私の家に妖怪が出るの

夜になると枕もとに立つのよ！！

お願い・・・御被いしてもどーやっても解決しないの

数多くの妖怪をハントしたという清継くんしか頼れないのよ！！

さてさて、最初は反対していた団員も、海があるという言葉に騙されて、とうとう行くことに決定したのでございます。

どんっ！！

「おいこらあ、どこに目えつけとんじゃ！？」

その言葉で、どこかへ吹っ飛んでいた意識が、現実世界に戻ってくる。

町のチンピラ・・・かな？・・・ぶつかっただことをかなり怒っているらしい・・・

「ハセベさんが原宿で買ったイケテルシャツがべちゃべちゃじゃねーか」

「アイスついちゃってるよ、アイスがよお〜」

「温泉卵アイスついちゃったじゃねーか」

なかなか、かわいいチンピラ達である。

別に金に困ってるわけじゃないから、クリーニング代払えば全て解決だ。

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

持っていた財布の中から諭吉さんを一人取り出して差し出す。  
ぽかんと口を開けて呆けるチンピラ達・・・足りないかなあ？・・・

「・・・・・・・・は、話分かる奴じゃねえか・・・じゃあありがたく・・・

はせべと呼ばれた男が諭吉を受け取るうとすると、どこからか正義のヒーローを気取った糞たれ野郎が声を上げる。

「ちよつと！！享助君！？何してるの！！ダメだよそんな人たちに  
！！！」

誰であろう・・・奴良リクオである。

穏便に済まそうとした俺の友好的解決法を否定し、崩壊させ、何の  
解決能力をも持たない、偽善者が首を突っ込んでくる。

一瞬リクオを見るチンピラ達と俺の表情が同じようになった気がする。

空気読めよ・・・的を感じて・・・

「おい・・・餓鬼が・・・そんな人たちって誰だあ？俺たちの事か



「？」

「ふざけんじゃねえ、こういう場合はクリーニング代払うのが当たり前なんだよ！！なんか文句あんのか！！」

リクオに詰め寄ろうとするチンピラ達。

しかし、彼らは悲鳴をあげて逃げていく……なぜだろうか、……それは少年の背後に無数の小妖怪がへばりついていたらだ……

そう彼こそは、妖怪任侠一家ぬら組、若頭、奴良リクオである。

「ちよつと……おまえたち！！」

素っ頓狂な声をあげてリクオが妖怪たちを隠す。まあ、俺は見ないふりをしていよう……

「ねえ、……享助君今の見た？……」

顔を真っ青にしながら効いてくるリクオ……

「何を？」

「見てないんだね！！」

「だから何を？」

ばれていないことが分かると明らかに安心したー！！という雰囲気



しばらく歩くとでっかいお屋敷みたいなところに着く。

にしても田舎のうちにはデカイ、・・・

都会のマンションのセツマイ一室で害虫と非行少年と一緒に住むような輩がいるのと同じ国なのだろうか・・・

にしてもでかい・・・

いいなあ、こういうのなんかいい・・・

「あなたが清継くんね!！」

自己思考の中に陥っていたため全く話が読めないのだが・・・この娘、誰?・・・

そしてなにゆえ、清継?・・・

「私は清継だったんですね。」

「ちょっと!?!何言ってるの享助君!!清継君は、こっちでしょ!

「！」

うるさいなあ、リクオ・・・耳が痛い。

「え？違う？こっちの天パの方？」

「天パ？キミ何だ、天パのどこに問題あるんだ！？」

俺を清継何ぞという妖怪オタクと間違えた、この少女の名前は、菅沼品子。

今回の事件の依頼人らしい・・・

まあ、今回の事件に何ぞ関わる気ないけどね、っていうか俺って原作知識を持った気がするんだけど、あんまり思い出せない、たしか神主がハセベとつるんでて・・・  
・・・あれ？ちがったっけ？・・・

部屋に案内された十字団ご一行・・・もちろん俺も含めるが、

にしても、こりやおびただしいほどの御札だなあ・・・広いからってこんなとこで住むの・・・ヤダナア・・・

「品子ちゃん、また・・・新しい人連れてきたの？御被いなら神主さんが毎日きてくれているじゃない」

なに？お母さんなの？っていうか親の了承を得てないのかよ・・・

「だって・・・効かないんですもん、その神社じゃ」

「ねえ、こんなにお札いっぱい場所で飲んだり食ったりしてるの？気持ち悪くない？」

「え？享助君そこ突っ込むのはちょっと・・・」

「俺だったらこんな場所で寝たりしたら怖い夢見てうなされそうだな、っていつかつなされる・・・」

菅沼さんが小さい声でつぶやく。

「一応ね・・・それに昨日もここに出て、私に覆いかぶさるようにそいつは私をじっーと見るの」

「のぞきこむだけなんだね？・・・」

清継が菅沼さんに確認をとる。

すると、菅沼さんは腕に巻いていた包帯をするするといっていく。

「これを見て、昨日はこうして後がつくまで強く握られてたの！」

お願い！！邪魅から守って！！

……って言われてもねえ、めんどくさ……こういときは偽善者が活躍してくれるはずだ。そのあと、しばらく邪魅の話を聞いているうちに夜になり、男子は見回り、女子は同じ部屋でおねねすることになった……。

・  
なんで、見回りなんかしなきゃなんないんだろうねえ……眠い……  
ぶらぶらと廊下を一人で歩きながら文句をタラタラ……

眠い眠い眠い……

ん？・・・歩いてるうちに、女子の部屋の前につく。  
にしても、清継達のいる所とは真逆の方まで歩いてきてしまったら  
しい、回って戻ってもいいのだがめんどい、女子には悪いが、この  
部屋を横切らせてもらおう・・・

女子を起こさないようにふすまを静かに開けて、部屋に入ろうとす  
るが、目に飛び込んだのは長身で腰に刀を差した男・・・これ  
が邪魅か？・・・

「きゃあああああ！！！」

その直後、悲鳴を上げる家長、うるさ！！

・・・  
・・・  
・・・

「なんか、言い訳ある？・・・」

布団にぐるぐる巻きにされ、押さえつけられている俺に、巻さんが聞いてくる。

どうしてこんな状況になったのかというと、家長の大声によって、妖怪が出たと勘違いした清継ご一行も部屋に侵入。

なんだかんだあって、全ての原因が俺にあることが判明・・・というわけだ。

「・・・・・・・・」

「女子の部屋に忍び込んだのはごまかせないよ!!」

清継が俺を見下ろす。ムカつくなあ・・・殺したくなる。

めんどいからしないけど・・・

女子から白い眼で見られるのは分かるが、清継達からそんな眼で見られる筋合いはないんだヨねえ、おめえらだって騒ぎの原因だし・・・

「何とか言いなさい!!」

黙ってる俺に鳥居さんが文句を言って来る・・・





まあ、関係ないから軽く聞き流すけどね、どうせ邪魅編とか興味ないし、……

確か、この神主の式神が邪魅だったっけ？……違うんだっけか……  
・ 忘れた。

神主が全く興味のわかないお話を始めたので、部屋の隅にあった雑誌を読み始める。

……なになに、あなたの疲れをいやす温泉旅行？……

何これ！！めっちゃ行きたい！！

……京都めぐりの旅、東北めぐりの旅、様々な観光スポットに目移りする。

こういうのって、行った気分になれるから結構好きだったりする。

……？……東北縄文遺跡で謎の遺物発見……只今博物館で展示中……

写真付きで紹介されているそんな記事に、首をひねる。

なんだか大きな塊にしか見えなかった遺物は、よくよく見ると蛇の頭のようにも見えたからだ。

……ちよつと行ってみようかな……

そんなことを考えながら、その記事を見てみると、大きな声で、菅沼さんが叫ぶ。

「もうたくさんよ！！鎮めるって……一向にいなくならないじゃない！！！」

・・・え？・・・なに？・・・今どういう状況？

さっぱりわからないが、神主さんのお話を聞き終わったと見えて、みんなぞろぞろと外に出ていく。

「・・・神主さん・・・この雑誌もらっていいですか？・・・」

「・・・あ、ああ、べつにかまわんが・・・」

快く了解してくれた神主さんはいい人に決まっているだろう。

こない人見たことないね。

お礼を言ってみんなの後を追いかける。

みんなに追いつくとなぜか海に行くことになっていて、でも実は漁業が盛んで泳げない海でしたなんて言う茶番があったが、この際、スルーさせていただく。

菅沼さんが清十字団のおかげで元気が出たことで、お礼を言ったり、朝絡んできたチンピラが威勢よく出てきたけどリクオを見てビビっちゃって逃げ帰ったのもまたしかり……

その後屋敷に帰ってきた俺達。

リクオが偽善者モード全開で神主さんに、僕らは品子さんを守りたい発言をすると、神主さんは京より取り寄せた奥の手があると言って胡散臭いお札を四枚出してくる。

奥の手って最終手段だからこういう言い方すんだらうけど、そんなのあんなら、はなっからそれ使えっというね……  
ウ○トラマンの光線もそうだけさ……

今日は菅沼さんだけを一人で寝かせるらしい。

一緒に寝た方が安心できると俺は思っただけだね。

「菅沼さん……一人で寝ない方がいいと思いますけど……つか、あの神主の御札って効かないんでしょ？」

「……でも、こうするしか他に方法が……」

「まあ、止めはしませんけどね、」

本人がいーんなら別にいいさ、さて今日は寝る。  
絶対寝る。見回りなんかしない。

そう決めた俺は、用意された部屋に布団を敷くと、そのままお休み  
タイムをとった。

耳せんにアイマスクまでつけて完全に、シャットダウンした俺は朝  
まで天国のような時間を過ごせた。

\*\*\*

こちらは、帰宅途中の清継ご一行。もちろん俺も含めて。

なんだか知らんが、全部解決したらしい。

多分リクオがなんかしたんだろうね。一応主役なわけだし。

・・・にしても、ホントなんで俺ってこの世界に来たんだ？

元の世界に帰れる可能性はほぼ零だから考えたところで無駄なんだけどさ。

こういう世界で、一般の何も知らない奴の立場だったらと思うと怖いな。

だって、自分の知らないところで妖怪が暴れまわってんだよ？やだねえ・・・

でも知らないから、どうでもいいのか。もしかしたら、俺も転生する前の世界では、何も知らないわき役だったのかな？そもそもそういう裏の事はない世界だったのか・・・今となっては分かんないけど、一応今はこの世界の主役にへばりついておこう。多分生き残れるんじゃないかな・・・そんなに都合よくはいかないか？・・・

もしコレ原作通りにいかないかどうかなんだ？・・・  
ちよつと見てみたい気もすんだが、転生してそんなに立ってない気  
がすんのもう前世の記憶があいまいつてどういこと？・・・ね  
え、どういことか説明しろおおお！！  
全然原作が思い出せん！！





第17録 温泉卵アイス（後書き）

ちっこいの『そういえば・・・何で感想書けなくしちゃったんですか、っていう質問メールがきてましたよ・・・なんですか？』

享助「それを俺に聞くのか・・・まあいい答えてやる・・・」

ニーゲル「簡単に言うつつまんねーごみ文だな！！読む価値ねーぜ！！っていうこの小説を全否定する感想が送られてきたからですね。そんな感想ならいらないうわげです。」

享助「ちょー！もつとオブラートに包んで言えよ！！コレだから外人は嫌いなんだ・・・うう・・・」

ニーゲル「正しくは日系西洋妖怪ですがね・・・」

ちっこいの『西洋なんだ・・・』

ニーゲル「というか、このお話がつまらないのは周知の事・・・それをあえて言ってきたということは・・・MKYまじくめないうか、このお話を、ネット上からたたきだしたかったんでしょね。」

享助「・・・つまんねーなら、そのまま立ち去ればいいじゃん・・・何感想とかかいちゃってんの・・・」

ちっこいの『だいぶきてますね・・・』

ニーゲル「何でもその人は主人公が気にいらなかったみたいですよ、目的のない奴なんか主人公失格って書いていましたし。」

享助「……………ぐさっ……………」

ちっこいの『……………やめてあげなさい！！！！』

ニゲル「ま、しょうがないじゃないですか、私、正直なところほんとに主人公として、ダメダメだと思いますよ。」

享助「……………」

ちっこいの『ああ……………！！享助さんが炭に！？……………』

ニゲル「というわけで！！今後も不定期に更新していきます。よろしくっ！！！！」

ちっこいの『てめ……………！！勝手にしめてんだ！！終わらせんな……………！！！！』

……………！！！！』

ニゲル「うるさいですね……………いやいやよもなんとかって言いますし、そういうことだったんじゃないですか？」

ちっこいの『いや……………ね……………よ、感想でそういうのね……………！！！！』

第18録 そうだ！！博物館へ行こう！！（前書き）

享助「どうも！！一応この小説の主人公です。うちの馬鹿作者のせいで色々迷惑かけた方がいたらすみません。前回のあとがき読んでコレ俺のせい？って思ってしまった方すみません。違うんです。あれはそのえっと……」

ニーゲル「何が違うんですか？」

ちっこいの「うん、君はまず空気を読もうか？」

ニーゲル「皆さん大丈夫です。作者の様なチキンハートいや、ガラス細工の様なハート野郎が罵倒メールを残しておくわけがないでしょう？そのメールはすでに消したんです。卑劣なことにその感想がなかったことにしたんですよ？だから感想ページに自分の感想が残っているならすなわち大丈夫だと言うことです。」

ちっこいの「……」

第18録 そうだ！！博物館へ行こう！！

「オレ博物館行きたい。」

「いきなりなんでそうなるのか知りたい・・・」

\*\*\*

さかのぼること数時間前。

『オロチ様、この雑誌どツから持ってきたんですか？』

「ん〜、どこだっけ、確かどツかからもらったはずなんだが？」

せまい部屋でゴロゴロとする享助とちっこいの。

ニーゲルはお使い中である。

それにしても、だいぶ暑く感じる季節になってきた。

実際はだいぶどころではなく、超アツいのが正しいが……

『にしてもオロチ様〜どツか旅行でも行くつもりなんですか？』

「ん〜旅行というか……ちょっと、これが気になってな……」

そういうと享助は、雑誌のとある写真を享助は指差す。

『なになに〜東北縄文遺跡〜？こんなのに興味あつたんですか？』

「興味つていうか、なんて言うか……」

実際興味はそこまで無いのだが、自分がいったいどんな妖怪なのか？現在少なくとも大きな蛇くらいしか自分に対する妖怪のデータはないのだ。

ちっこいのはヤマタノオロチなんて言う大層な名前を出してきたがほんとにヤマタノオロチであるという保証もない。

『オロチ様！！行きましよう！！』

「へっ???」

『オロチ様この遺跡が気になるんでしょう？それに東北ならここよりも暑くない！！まさに一石二鳥じゃないですか？』

「う〜ん……」

実際この遺跡が自分に関係している保証などどこにもない。

ただ、東北は基本、観光名所がいっぱいある。借りに目的が果たせ

なくても、東北に行くのはいいことかもしれない……

「……行ってみるか……」

その言葉を聞くと、ちっこいのは目を輝かせる。

『じゃあ、じゃあ、さっそく申し込みましょう!—泊二日、それとも二泊三日ですか?』

「お、落ち着け!!分かった、分かったから……静かに!」

『わーい、わーい……』

ちっこいのはその言葉を聞いてはしゃぎだす。

現在人型に化けているため年相応のように見え非常に愛らしく見えるのだが……

『わーい、わーい』

あまりしつこいと……

『わーい、わーい……』

「黙れ！！！！」

あまりにもしつこいので、享助はちっこいの頭にげんこつを叩き落とす。

するとすぐにちっこいのは、ぎゃあぎゃああと泣きだす始末。

「ちょっと！！アンタまた泣かせてるのね！！！！」

バタンつと乱暴にこの部屋を開けてきたのは、このアパートを管理する大家。

享助に対してかなり暴力的である。

小一時間説教を受けて、やっと解放される享助。  
説教の後は何か大事なものをなくしてしまったような、そんな感覚にいつも陥る。

しばらくして、ニーゲルが買い物から帰ってきたのだ。

「オレ博物館行きたい。」

「ちよっ！！さっきからおんなじことしか言わないんですけど！！？  
大丈夫ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「オレ博物館行きたい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「オレ博物館行きたい。」

\*\*\*



視点：享助

なんとか正気を取り戻した俺は、

一泊二日の旅行の予定を立てて、東北に向かうことにした。

まだ夏休みに入ったわけでもないが、学校二日程度休むくらいならたいして気にされることでもないだろう。

それより、四国の影響でずっと、めんどくさい状況だったので最近自由に過ごせていなかったが、この旅行で疲れを癒せれば、万々歳である。

ちっこいのやニージェルがいるっていうのが微妙なんだが、まあ今回は目をつぶる。

『オロチ様、トランプでもしますか？』

「んー、まあやってもいいかな・・・」

「じゃあ、カード配りますね。」

こうして俺達の、楽しい旅行は始まった。

……はずだった……

第18録 そうだ！！博物館へ行こう！！（後書き）

東北に行くことになりましたけど、

今のところ遠野とからませるつもりはありません。 . . . たぶん .

. . .

第19録 日本オロチ伝説（前書き）

享助「前回の話短かったな……」

ニーゲル「でも今回が長くなる、とかではないんですヨねえ？」

享助「まあね、」

ちっこいの『毎度思ってますけど、この無駄な前書きなんですか？』

享助「ケータイとかで小説開いたらいきなり本文になっちゃうのが嫌だから……」

ニーゲル「確かに、ヤですよねえ。」

ちっこいの『それだけ!?!』

享助「それだけ……」

ちっこいの『ほんとに?』

ニーゲル「ほんとに……」

第19録 日本オロチ伝説

『そりゃ!!!スリーカード!!!』

「何をお!!!こっちはフルハウスです。」

「『.....』」

「ルール分かんないのにやるのやめて!!!」

\*\*\*

しばらく電車に乗っているうちに、目的地に到着する。

予定としては、博物館を今日ぱぱっと見ちゃって、残りを全部自由時間に回そうと思っっている。

実際博物館も気になるんだが、旅行気分になっっているので別に博物館を重視してない。

すでに当初の目的を失ってるな。まあいいさ・・

「とりあえず、この博物館に行こうか。そしたらあとは自由時間だ。」

「『やったー』」

餓鬼か！！・・・・・・・・いや餓鬼だったな。

とりあえず地図を片手に、博物館へと急ぐ。

バスに乗って、少し歩いたところにその博物館はあった。

まあ、博物館って言っても郷土博物館だからたかが知れているが。

だがそれでも、遺物の発掘は結構有名なことらしく、大きなポスターやら何やらが貼られている。

地域復興の役目を任せようとしているのかもしれないが、実際凡人が見ればただの石ころにしか見えないだろう。

実際俺も気づくまで唯のでかい岩としか思わなかったけどな。

というか写真うつりで蛇の頭に見えただけかもしれないし、俺も立派な凡人だから・・・

『にしても、この博物館、思ったよりしょぼいですね・・・』

「まあ、そういうな、岩を見たら帰るから。」

「なんで岩なんか見ようと思ったんですか？」

ちっこいのは・・・まあ大体訳を知ってるが、ニーゲルは俺がどんな妖怪なのかさえもまだにわかっていない様子だ。

俺が石ころなんかに興味を持つのが不思議でしようがないんだろうなあ。

実際問題俺も半分気分で来たようなところあるし、特に理由なんてないな。

説明すのがめんどくさい・・・

「まあ気分って奴だよ。」

「いつものことですか。」

ありゃりゃ、俺は気分で動くっていう評価なの・・・なんかひどい・・・

とりあえずチケットをもらって博物館の中に入って行く。

古臭くなつた資料が置いてある郷土博物館の一角に、真新しそうなコーナーを見つける。  
きつと今回見つかった遺物かなんかがあそこに置いてあるのだろう。興味のないコーナーを素通りして、そのコーナーに一直線で向かう。

果たして、そこに目的の物はあつた。

が、雑誌で見た時に感じたのより小さく、岩ではなくおつきい石レベルのサイズで拍子抜けだ。  
だが代わりに雑誌で見た時よりもより蛇の頭の形のように見える。唯のくぼみにも見えるが、一度そこを見ると眼のように見えて頭から離れない。

もっとよく見てみようとして一歩その展示物に近づく。

.....ドクン.....

「.....っ.....」

何にもしていないのに冷や汗が出てきて止まる気配が無い。

何これ、気持ち悪い.....

しだいに、冷や汗どころではなくほんとに気分が悪くなってきた。



「享助さん？大丈夫ですか？」

ニールが声をかけてくるが、いまいち頭に入ってこない。

それどころか気持ち悪いはずなのに、どんどんその展示物に近づいていく俺。

とうとう自分の意思とは関係なくその展示物の前に来る。

遺物と俺の間にはガラス板があつてそれ以上近づけない・・・その時俺の気持ち悪さが頂点に達する。

「・・・っ！！・・・」

なんだか俺を呼ぶ声が聞こえた気がするが、意識は暗転する。

\*\*\*

真っ暗い空間。

確か一番最初に眠りから覚めた時にいた空間に少し似ている気がする。

まあこの空間は広々としていてせまくないが。

「…………オレ暗所恐怖症なんだけど。覚えてる奴いんのか? ……

」

ただ、空間は広々としているのに、全く体は動かない。

一体どうすりゃいいんだろうね……………

途方に暮れて悩んでいると耳元でささやくようなだけととても遠くで聴くような小さい声が聞こえた。

……………見つける……………

「なにを!？」

いきなりの声にびっくりして、声の主に聞き返してしまつう。

このあたり自分でもほとほと間抜けだと思つう。

こういう場合、なんか重要なことをぼろつと言って終わりっていうのに相場が決まっている。

だから聞いたところで答えが返ってくるわけがない。

……………ばかが……………

あれ、なんかひどい言葉が……………

そんなことを考えている途中に、真つ暗な闇の中から一匹の大蛇が染み出るように話現れる。

え？なに・・・なんかいやな予感が・・・

その蛇は身をよじらせたかと思うと、一瞬で俺の口めがけて飛びかかってきた。

その時のことと言ったらもう・・・あれはトラウマになる。

胃カメラを全部飲みこんだらあんな感じになるのだろうか。

口めがけて飛びかかってきた大蛇を 飲み下した瞬間、視界が明るくなった。

\*\*\*

「ちよつと享助さん大丈夫ですか？」

『オ口子様~~~~？』

「ん？・・・まあ大丈夫だ。」

さっき気絶してからたいして時間はたっていないようだ。

さっきまではたっついていられないほど気分が悪かったのだが、今では全然なんともない。

むしろ気分が良い。なんでだろ？

まあ気分が良いのに越したことはない。

俺はその遺物の隅々をくまなく見はじめる。

さっきの声の言っていたことの手掛かりがあるかもしれない。

しばらくすると明らかに人口に傷をつけられた痕がある。

木の枝の様な棒線と、葉っぱの様な形の絵。そして最後に大きな三角形。

この三つのマークのようなものが、石の端っこにつけられている。

どういう意味だ？・・・さっぱりわからん。

\*\*\*

旅館に着いた俺たちはとりあえず、温泉を堪能し、おいしい食事を楽しんだ。

「そういえばさあ、……」

「なんですか享助さん？」

「男二人と同じ部屋って女としてどうなの？」

いつもマンションでは蚊の状態のニーゲルだが今回は人間のほうが万が一の時に役立つからと、人型にさせている。

まあ、蚊の状態の方が金はかかんないんだけどね、一人分。

でもそれだとニーゲルが折角の旅行でなんもできないから、人型で旅行を楽しませてやっている。

なんてぼくちゃんやさしいの!!

「別に特に気になりませんが……もしかして享助さんは……」

「あ、ないないよー……」

「……血ッ!!……」

『何その舌打ち?字が違う。』

「まあ、いい。それより寝る前にお前らに問題だ。」

そう言ってペンと紙を用意し、今日博物館で見たマークを書いていく。

結局考えても分からなかったので、こいつらの浅知恵を借りることにした。

癩に障るから言えないが。

「え？何ですこれ？・・・枝？」

・・・ニーゲルの考えは俺と同じか。  
じゃあ、これは枝の可能性が高いが・・・

『棒人間じゃないですか？』

棒人間か・・・どうだろう、頭まで二つに裂けているんだが・・・

「これは葉っぱじゃないですか？」

『ううーむ・・・難しい・・・』

ちっこいのは役に立ちそうにないな。  
こうなったらニーゲル！お前頑張れ。

「三角形・・・コレなんでしょう？・・・」

『三角形だけ他のより大きいですねえ？』

「ううーん、枝に葉っぱだとすると、自然系ですか。山ですかねえ？」

山か！！可能性は十分あり得る。

よく思いついたな・・・全然思いつかなかった。

『コレ大きいんですけど、』

「山に枝に葉っぱ、森かなんかですか……」

『いじ……』

ちっこいのの発言をスルーしてたらいじけてしまった。

だが、山に葉っぱに枝、とすると答えは森か。

だがこの国は国土のほとんどもが山の森林大国だぞ？どこの森なんだよ？

「ニーゲル？どこの森かわかるか？」

「んー……さすがにそこまでは……すみません。」

「別にいいんだが……」

そこまでいって俺の頭に電撃が走る。

いや待て待て、そんな安直な考えでいいのか？……だがこの情報ではこじか思いつかない。行ってみる価値は……ある……

しばらく黙っていたが、すくりと立ち上がる

「？」

「おい、ちっこいの、おまえは天才だよ。」

『…?』



## 第19録 日本オロチ伝説（後書き）

### 次回予告

狂骨「はじめまして京妖怪の狂骨です!!」

羽衣狐「妾もいるぞ。」

狂骨「それにしても私たちの出番まだですかねえ?」

羽衣狐「まあ、そう言うでない。出番が来るまで出来る限り精進せぬとな、」

享助「ハイ!!アウト!!!!!!」

狂骨「何よ!?!何がアウトなの???」

享助「キャラだよ、DSで人間なんかゴミ屑以下だと思っている羽衣狐にあるまじき発言でしょーーが。」

狂骨「お姉さまはそんなじゃない!!アンタサイテー死んじやえ!!本編でお姉様にやられて死んじやえ!!!!!!」

羽衣狐「こら狂骨、相手を傷付けることは言うてはならん。」

享助「……………（餓鬼の言葉では傷つかない。だからあんたのそのキャラどうにかしてくれ）」

羽衣狐「次回、【続日の本オロチ伝説】どうぞよしなに。」

狂骨「絶対見てね〜〜」

享助「以上下らない予告でしたー！ー！。」

ちっさいの『予告にすらなっってねえよー！ー！』

## 第20録 続日の本オロチ伝説(前書き)

羽衣狐「記念すべき第二十録目。」

享助「あれーまだ帰ってなかったの？」

羽衣狐「……………」

享助「ちよつと、そんな泣きそうな顔すんのやめて、俺が悪いみたいだから!!」

羽衣狐「……………だって……………」

享助「つていうかなに？今日の前書き俺ら二人だけ？どついう組み合わせだよ!!」

羽衣狐「みんな帰つてしもつたゆえ……………」

享助「つていうかあんた役作りはできたんですか？そろそろ出演するんでしよう？」

羽衣狐「うむ、万事順調だぞ。」

享助「そーですか、(ほんとかよ…………不安だな〜)」

羽衣狐「では第20録をどうぞ。」

享助「(ほんとは、24話目だから記念とかないんだけど…………言わないけど)」



第20録 続日の本オロチ伝説

さて前回までのあらすじ。

．．．．．  
やっぱめんどいから割愛．．．

(完)

\*\*\*

視点：享助

「今度はここに行こうと思う。」

旅行から帰ってきた俺達は早速また別の場所へ向かおうとしている。

「また旅行ですか？」

『旅行好きなんですネ．．．．』

「ところでなんで富士の樹海なんですか？確かにハイキングコースありますけど基本樹海って言ったら．．．．」

『自殺スポットスねえ．．．』

なぜ富士の樹海なのかというと．．．

この前のマークが関係している。

枝の様なマーク・葉っぱのようなマーク・そして大きな三角形。

三角形は多分山の事だろう。

そして、大きな．．．これが重要になってくる。

日本で大きな山と言えば富士だろう。

そして富士山は、正面から見ると限りなく三角形に近い。

枝や葉っぱはきつと森の事だ。

富士にある森。すなわち樹海だ。

まあ、樹海のどこかまでは分からのだが．．．

「気にするな、死体の一つや二つ見たところでもかまわんだろう？妖怪なんだから．．．」

分からないのならくまなく見て探せばいい。だからハイキングコースなんて言うアマちゃんの手だけじゃなくて、自殺スポットの方にも行こうと思っている。

『おいらそんなとこやですよ、行くなら一人で言うてくださいね？』

「私も死体はちょっと……」

……

何この子ら……ノリ悪い。

\*\*\*

しかたがないので、一人で行くことにした。  
なんか一人で行くことは予想してなかったから、ちょっと怖いな。  
まあ今さらだけどさ……

はい、というわけで今樹海の入り口にいます。

ハイキング用の入り口じゃなくて、薄っ暗い裏道の入り口だけどね。  
多分自殺者が入って行く方の道の前にいるんだけどね。  
まあ、別に一人だって怖いとかはないさ。

「ちょっとお兄さん……」

ぼーっと森への入り口を見ていると、知らないバーさんが俺に声を

かけてくる。

「あんた、ここに何しに来たんだい？観光かい？」

「え？いや、観光と言うわけでは……」

「あーそうかい、そうかい、ちょっと私のうちによつてかないかい？」

「ええ！！」

「ほらほらこつちだよオ」

そついうと見知らぬバーさんは、俺の手をぐいぐいと引っ張って歩き出す。

年寄りのくせに力強いな……

\*\*\*

見知らぬおばあさんのうちに連れてこられてしまった……  
コレだから年寄は……  
そついえばかなーり昔、集団の婆さんに……思い出したくない  
なあ……



「お兄さんなんか悩みでもあるんかね？」

「つこにこしながら初対面の人間には絶対効かないことを聞いてくる婆さん。」

「悩みならあるさ……今こうして貴様にオレの計画を邪魔されていることがなあ！！」

「とか、過激な言葉をぶっかけてやろうとしたけど、やめておいた。」

「俺はそんなに鈍くないぞ……」

「この婆さんオレが自殺志願者か何かと勘違いしてやがるな？」

「こういう婆さんには、俺が自殺志願者ではないということを分からせないと、自分の昔話や、親の話なんかを延々としてくる雰囲気だ。」

「おばあさん？俺がこの場所に来たのはですね、学校の研究なんですよ。なんで忙しいんで帰りますね？」

「まくしたてるように、婆さんに言うとは絶対嘘だろ的なまなざしを受ける。」

「そんなにへたくそな演技だったのか……ちよつとへこんでいると婆さんが爆弾発言をかます。」

「それ私もついて行ってもええかね？」

「ダメにきまっている。」

「でも婆さんのつまらない話をこれ以上聞くくらいなら、ついてくるぐらいなんでもないか？とちよつと思ったり……それに一人で行くのもなんか怖いし……」

「ええ、良いですよ。」

こうして、お婆さんと二人きりで樹海の中へ進んで行きました。  
やっぱなんかやだなあ……

\*  
\*  
\*

だいぶ奥深くまでは行ってきた俺と婆さんでしたが、運よく死体に

は合いませんでした。

婆さんは、どンドン奥に入って行く俺に注意してきますが、全部無視してやりました。

拳句の果てに婆さんが怖いとか言っつて、俺にへばりついてきたのでこっつ言っつてやりました。

「だからついでこなくていいですつて！！さつきからそう言っつていいんじゃないですか！！」

そう言いなながら、くっついてくる婆さんを引き離して距離をとる。

「そんなこと言っつたてねえ、あんた、女性をこんなところに連れてきて・・・まさか・・・」

そう言っつて顔を赤らめる婆さん。行っつとくが俺に年上趣味は皆無だし婆さんなら尚更だ。

ちよっつと吐き気を催してくる。

「そのまさか・・・は絶対にないですから。だから帰っつてください。」

「じゃあ、出口までついできておくれえ。」

そう言っつて俺を潤んだ瞳で見ってくる糞婆。

もうこいつ糞婆でいいや。死ね糞婆！！ばーか！！

心の中で小学生でも最近は口にしなくなっつたフレーズをいいながら。表情にそれを出さず、ニコニコとしながら拒否する。

「いやいやあ、今来た道を戻れば大丈夫ですつて。」

嘘です。樹海の場合は、ほんとダメなんだけど・・・いいじゃん。どっちにしろあと少しで死ぬもんね、この人。

「わたしやあ疲れたよ、おぶって出口まで連れてっておくれよう。」

そういうとその場にへたり込む婆。

言っておくが、今俺はかなりムカついている。この婆を喰ってしまったもいいのだが、あんまりうまそうじゃないし、喰って病気が移ったら嫌だから喰わない。

そんな慈悲をかけてやっている俺に、糞婆はおんぶく、おんぶくと言い続けている。

餓鬼となんら変わらない行いをする婆。餓鬼は幼いから許される行為なのであって、脳にしわを刻み込むだけでは飽き足らず、体中にしわを刻んだ、年寄がやっていい道理が無いし、きつもちわるい・・・

糞婆はそれどころか俺の体にまとわりついておんぶをねだる。

「ひい！！や、やめてください！！！」

気持ち悪さから来る恐怖で、婆を振りほどこうとするが、いかんせんこの婆力が強い。

おかしい・・・本気で若い男がこんなに振りほどこうとしているのに、離れないばあさんなんて異常である。

「なかなかいい男じゃ、喰わせてもらっぞ？」

必死で婆を振りほどこうとしている俺の耳元で何かがつぶやく。

それは、少女の様でもあり、年老いた女の声にも聞こえた。

びっくりして、辺りを見回すが誰もいない・・・

俺は、がっしりと俺の服を握りしめて離そうとしない婆さんに一応  
離れてほしいと伝える。

すると、自然に婆さんの顔を見ることになるのだが・・・

そこにあったのは、顔をぐしゅぐしゅにして笑う老人がいた。

「・・・ひっ! ! ! ..」

一応確認しておくが、これは比喩ではない。  
つまりホントに顔がぐしゅぐしゅなのだ。  
今まで見てきた妖怪で一番怖いかも知れない……

「喰わせろ!!」

その子供と老人が混ざったような声で、我に返った俺は、婆を引き離しにかかるが……

無理、絶対無理……日ごろ運動してないせいかこの婆さんの力に勝てる気がしない。

それどころか婆さんに押し倒されて、身動きが取れなくなってしま  
う。

婆さんに押し倒されるって……すげえ嫌な展開……

「いやあああああああああああああああああああああああ  
あ!?!」

男の悲鳴が森にこだましたとか何とか……







享助「・・・ははは、なんだこれ笑えて来たぞ・・・ははは、俺は婆に押し倒されて喰われるのか・・・あはははははははははは・・・」

羽衣狐「な、何をしておるんじゃあ!!」

享助「なにつて、・・・この窓から飛び降りる・・・」

羽衣狐「待たぬかあ!!!!」

享助「はなせええええええええええええええええ!!俺は悩みのない世界に行くんだああああ!!」

第21録 続々日の本オロチ伝説(前書き)

羽衣狐「ゼエー、ゼエー、ハアー、ハアー」

享助「この縄をほどけ馬鹿があああああ」

羽衣狐「はあ、・・・危ないところじゃったのう・・・」

享助「いやだあああ、あんな状況で死ぬのは嫌だあああ」

羽衣狐「またそれか・・・」

享助「(ちっ、くそ・・・どツから縄なんて持ってきやがったんだこの狐・・・まあしょうがない、・・・こうなったら何としてみてもあそこから飛び降りてやる・・・それにはまずこの縄を何とかせんと・・・)」

羽衣狐「?・・・気分でも悪いのか?」

享助「いやー俺は何をしていたんだろー、飛び降りてもどうにもならないのになあ?もうばかなことはしないから、はやくこのなわをほどいてくれー」(棒読み)

羽衣狐「(さすがにこれは妾でも演技とわかるぞ・・・いや、・・・しかし・・・誠だった時、申し訳が立たん・・・どうしたのか・・・)」

享助「(押しが足りないのか?) いやいや、それにしても羽衣狐さんはお美しい。そしてとても賢そうだあー、女神の様な羽衣狐



じりじり……

羽衣狐「な、なにを……はなせ!!ちっ、近いっ／＼／＼!!!!」

享助「……冗談はさておいて、……はじまるよー」

羽衣狐「……(煽るだけ煽ってこれか……)」



\*\*\*

目覚めたところはお花畑……

あれか……良く病院で九死に一生を得た人とかが、見たっていう  
あれか……

あーなんかあつちに川が見えるなあ……三途の川？  
渡ろつかない……なんかあつちいっぱい人いるみたいだし……  
ちよつと頭無かったり腐ったりしてる人ばかりだけど一人よりマ  
シだな……

そうこうしているうちに俺の前に一台の船が、止まる。

全自動式の船らしくこぐ人は誰もいない。うわーすごいなー、  
……

そう思いながら、その船に乗り込もうとするが、どこからともなく  
声がする。

【待て!!】

まさか・・・そっちに行つてはダメだ!! っつて奴か?・・・  
そう思つて振り向いてみるが、誰もいない・・・あれ?  
するともう一度声がする。

【そっちじゃない・・・こっち・・・】

声はどつやら俺が行こうとしていた方向からしている・・・

もう一度向こう岸を見ると俺をよんでいると思われる奴がいる。

と言つことはあれか?・・・こっちに来ちゃいけない!! っつてやつか?

そう思つて向こう岸の奴が何か言つのを待っていると、そいつは手招きしながらこう言ってくる。

【その船は団体様用だ、おまえは泳げ。】

.....

\*\*\*

渡り切った先は、見るも無残に死んだと思われる者共がうごめいている。

ここが地獄って奴か？・・・あんまり暗くないな・・・むしろさっきのお花畑と変わらんと言っつか、お花畑をうごめくこいつらはなんかあれだな・・・そう・・・なんだ・・・あれだよ、あれ・・・なんだっただけ・・・

【どうした？】

ぼけらーっと思ってっていると、さっきおれをよんでいた奴が話しかけてくる。

そいつに振り向くと、見た目から何から全部おれそっくりの奴が真っ黒い服着てたはずんでいるっていう・・・なんだこれ？

まさか俺にはそっくりの兄弟がいたっていうおちか何かか？・・・それとも俺のクローンか？いや、俺がクローンなのか？・・・

【勘違いしているみたいだから言っつか、ここは地獄でも天国でも無いぞ？おまえの精神世界だ・・・】

・・・俺の頭ってこんな気持ち悪い世界なのかよ・・・もっとフツッがよかつたなあ・・・

【それで俺はおまえの精神世界の負をつかさどるものだ・・・名前



は・・・フランシスコ・ザビエル!!!】

ストオオオオオオオオオオッ！負をつかさどる割にはふざけた名前だな・・・っていうか普通に俺の名前でいいんじゃないのかよ・・・

【まあ、どうでもいい話だが、貴様の混乱状態が極限になったからこの世界におまえの意識が入りこんだわけだ。まだ死んでないから安心しろ。】

え？死んでないの？・・・やった・・・やったああああ・・・

【もちろん今現在進行形で、婆に襲われているからこのままだと死ぬな・・・。だからまだ安心はできない】

・・・

【話しを続けるが、俺を構成している元になっている精神は、おまえの物だけじゃないらしい・・・】

俺の精神世界にいる奴が俺以外の奴の精神によって構成されてるってこと？

何それおかしくないか？・・・

【そうだおかしい、だがおまえが化け物になった日から貴様の中に存在しなかった化け物の記憶もお前の精神世界の奥底に組み込まれ

ることになったらしい。だから表のおまえは知らなくても、俺は知っているんだ。どうやらこの化け物は、おまえのお供が言ってたヤマタノオロチで間違いなさそうだぞ?】

……随分さらりと言ってくれやがる……

しかも、俺はさっき心の中だけで思ってたはずなんだが、こいつには全部筒抜けなのか?

っていうか、しゃべっても声になん無かったりするし、一体どうなってるんだ?

【今お前が思っているのも筒抜けなわけだが、まあいい今の状況を簡単に説明しようか。おまえはそもそも化け物じゃなかったな?その時はそんな意識なんてなかったわけだから俺もお前の精神だけで構成されてたし、この精神世界もこんなではなかった。だが貴様のへまで化け物になった日にその化け物の感情やら何やらが全部おれに降り注いできたよ。その化け物どうやら、負の感情しか持ってなかったみたいでな、全部俺が管理しなきゃならなくなっちゃた訳だ。……ここまでいいか?】

つまり、俺の意識の中にヤマタノオロチの意識かなんかが入ってきたと?

【そう言うことだ。で、どうやらヤマタノオロチは、この富士の山を中心に、東に二つ、西に二つ封印が施されているらしい。おまえはもうその二つを解いたから残るは、この富士の山の封印も入れて三つだ。……

で、前に探せっていう声が聞こえたと思うんだけどあれは俺だ。実はもう俺一人でこの化け物の管理するのは無理でな、このままだ

とおまえは化け物に乗っ取られちまうかもしれないんだ・・・】

え・・・ええ・・・さらに言ってるけど・・・いや何とかしろよ・・・おまえもつと頑張れよ!!

【いやいや、もう俺にしては十分頑張っただろ。大丈夫。残りの封印をちゃんと解けば、めでたく俺達とヤマタノオロチとの精神世界は完全に一つになって乗っ取られることはないから・・・】

一つになるって・・・それ大丈夫なのか？

【いや、俺に聞かれても多分としか言いようがない。まあヤマタノオロチに乗っ取られました。っていう感じにはならないと思うんだけどなあ・・・】

何でわかんねえの？一番大事なのそこ!!そこだよ!!

【どつちにしろ早くしないと、俺らの精神世界はぶっ壊れるから・・・それだけは嫌だろ？だから俺のためにもおまえのためにも封印を解け!!確か、京都に封印の一つがあつたはずだ。東の方は分らんが・・・ヤマタノオロチの首を、京都のどっかの町に埋めてるイメージが化け物の記憶から流れてきたからきつとそこにある・・・はず・・・やばいな、もう時間だ、行かなければ・・・】

ちよつとまっつてくだあさい!!

最後に一つだけ!!一つだけ聞かせてください!!!!

何で俺は漫画の世界なんかに来ちまっただんでしょうか!!ザビエル





## 第21録 続々日の本オロチ伝説（後書き）

ニーゲル「はい、呼ばれて飛び出て、じゃじゃじゃじゃ〜ん！  
」！」

ちっこいの『オリキャラ脇役コンビでーーす。』

ニーゲル「おっと、私は脇役じゃないでしょ？ヒロインでしょ？何  
言ってるんですか？」

ちっこいの『おまえヒロインだったの？何それ、聞いてないよ？監  
督ーー！！』

ニーゲル「それよりも最近私たちの扱いが雑ではないでしょうか？  
・・・」

ちっこいの『前書き任されたりナレーションやったこともある奴が  
何ユートンのじゃあ！！おいらなんかなあ、最後にチヨロットとか  
そついうまとめ役でしか最近使われへんのやぞ！！何寝ぼけたこと  
ほざき腐るんじゃワレボケえ！！』

ニーゲル「あーはいはい、そう言うんじゃないかと思いましたが？  
次回の前書きとあとがき貴方自由に使っていいですよ？」

ちっこいの『ええ！！・・・それ・・・ほんとでございませるか  
・・・』

ニーゲル「ええ・・・（にこっ）」

ちっこいの『奇跡やああ！！神様ありがとオオおお！！生きてて  
よかったああ！！』

ニーゲル「よかったですねえ？・・・まあせいぜいがんばりなさい・  
・・フフ・・」

\*\*\*

謎の声「さあ、一体次回はどうなるのか！？【続続々日の本オロチ  
伝説】お楽しみに！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2444t/>

---

ぬらりひよんの孫～異世界旅行記～

2011年8月6日16時24分発行